部

504
267

立正大師日蓮聖人撰著

小林一郎註解

裝禎 横山大觀書伯

立正安國論要解

地涌學會出版部發行

大正
13. 5. 7
内交

即滅七福即生之句調一百座百講
之儀有日秘密真言之教講五
瓶之水有念生坐禅入定之儀
澄空觀之月若書七鬼神之符

立正安國論

振容來嘗曰自近年至近日
天變地夭飢饉疫癘遍滿天
下廣逆地上半焉骸骨路
充路相死之輩既過太半悲之
族敢无一人然間我專利鈍即
是之文唱西土教主之名稱與
病患除之願誦果十卷妙法蓮
我作病即滅不老不死之利
堂法華真實之櫃文我信七難
即滅七福即生之句調百座百講
之儀有目無容真言教灌五
瓶之水有人坐坐禪入定之儀
澄空觀之月若書七鬼神之號

504-267

例言

一、立正安國論は日蓮上人の遺文中に於ても殊に重要なものとして、古來から重んぜられた所である。余の如き淺識の者が之に解釋を加へやうとするのは僭越の甚しきものであらう。ただ余は今日の時勢に於て立正安國論の必要を痛切に感じ、之を精讀する人の一人も多からんことを望んでやまぬのである。此の小著が多少なりとも此の希望を達するために用に立つならば、余の本懷は之に過ぎぬ。

一、立正安國論は漢文で書かれてあるが、漢文を通讀して其意味を正しく解するのは人によつては可なりに困難な事である。因て先づ原文をあげ、次に之を假字交りに書き下し、次に字句に就ての説明を施し、次に本文を讀むために參考ともなるべき事を述ぶることにした。

一、本文の段落は古來の學者の定めた科段等には少しも據らず、たゞ解釋を加へるの便宜に從つたのみである。

一、巻首に『日蓮上人と立正安國論』と題する一篇を附し、聊か上人の事蹟と立正安國論を書かれた當時の事情等について説明を試みた。別に深い研究の結果を發表したのではない。たゞ今迄上人の著述などにあまり親しんだことの無い人に參考ともならばと思つて書いたのである。

一、日蓮上人に對しては全く敬語を用ゐぬことにした。これは別に意味があるのではない。たゞ用語の簡易を旨としたのみである。しかし余が上人に對する渴仰の情は自ら讀者の了知せらるゝ所であらうと思ふ。

著者再記

立正安國論要解序

日本國民の凡てが深く反省しなければならぬ時である。大なる活動の力は深い反省の中よりして生み出さるゝものである。幸運に狎れて反省を忘れた者は必ず衰亡に傾かなければならぬ。顧れば吾々の過去はあまりに幸運であつた。吾が國は今世界の三大强國の一に數へられて居るが、此の地位は國民の努力によつて獲得したるものではなく、歐洲に勃發したる大戰亂の影響にすぎぬのである。大なる努力を積まずして大なる幸運を得たものは、その幸運に狎れずして自ら戒め自ら勵み、永く此の幸運を持ち續け得べき實力を作るの覺悟が無ければならぬ。然るに今日の日本國民には此の覺悟が缺けて居る。此國の前途を思へば眞に寒心に堪へぬ事のみである。

しかし吾々は決して失望してはならぬ。建國以來殆んど三千年の國史は、吾々の祖先が優秀なる國民性を有するものなることを、最も明かに證して居る。若し吾々が此の優秀なる國民性を發揮することに力を盡すならば、世界の凡ての國を凌駕するだけ

の實力を具ふるやうになることも、決して困難ではあるまい。今日に於て最も必要なのは、今迄の幸運の爲に緩んだ心を立て直すことである。社會の制度を立て直したり種々の機關を整備することも必要には相違ないが、それよりも更に大切なのは心の問題である。人々の心の持ち方が自ら其の日常の行爲に現はれて社會萬般の出來事となるのである。心の持ち方が間違つて居ては、形の上に現はれたる制度や機關をいかに改めても、決して健全なる社會の作れるものではない。心を立て直すのには正しい教の力に依らなければならぬ。六百餘年のむかし日蓮上人によつて唱へられたる立正安國の四字は、今の吾々に最も適切である。

去年の九月一日に吾が國を襲うた大震災と之に續いて起つた大火災は非常なる打擊を吾々に與へた。其の精神上及び物質上に及ぼしたる影響の極めて大きかつたことは僅々半歳に足らぬ間に兩度まで詔書を賜はつたといふ一事を以ても察すべきである。吾々の力は自然の力に對すれば甚だ微弱なものである。されば吾々が多くの歳月を費して作りあげたものを、自然界の變化によつて僅かの時間に於て粉碎されてしまふこ

とも少くは無い。けれども吾々が斯く生活をして居るのは、全く自然の力によつて扶けられ養はれて居る爲であることを忘れてはならぬ。又自然の變化の爲に種々なる障礙を受けながらも、多くの人の努力が積み重つて今日まで社會が發達を遂げて來たことをも考へなければならぬ。吾々は如何なる災害にあひ如何なる困苦にあふとも、決して勇氣を失つてはならぬ。たゞ如何にして此の苦境を越えて、更に新なる進歩發達を遂ぐべきかを考ふべきである。

また心の持ち方によつては、種々の災害や困苦は吾々に與へらるゝ自然の大なる警告と見ることが出來るのである。人の心は兎角に緩み易いものである。久しい間の安佚は多くの人に惡い影響を與へる。安佚に狎れたものは永遠の計を忘れて唯だ眼前の小事にのみ囚はれ、永く悔を遺すものである。此の如き場合に於て覺醒を與ふべき力あるものは、唯だ大なる變災のみである。平生に於て心の置き方の間違つてゐたことが、何か事變のある場合に最も明瞭に證せらるゝのである。現に九月一日の震災の際でも、若し國民一般の心の持ち方がシツカリとして居て、各自によく其の責任を重ん

じ、各自に物事を冷靜に判斷して、つまらぬ浮說の爲に惑亂されぬだけの覺悟をもつて居たなら、あの災難とあの混亂とは遙かに少くてすんだ筈である。實に此の天災によつて吾々は『汝等は大なる困難に堪へられぬ國民であるぞ』。『汝等は心に何の根柢もなく、唯だウカ〳〵と毎日を送つて居る、極めて淺薄なる國民であるぞ』といふ痛烈なる自然の警告を受けたものと考へなければならぬ。

一時の打擊はいかに大きくても、國に衰亡を來すほどの力のあるものではない。國民の心の緩んで居る爲に、いつとは無しに周圍の國々から加へらるゝ壓迫は、實に國の運命に拘はるものであつて、此ほど恐ろしい事はないのである。されば一時の大なる打擊によつて覺醒するものは幸である。何の打擊をも受けずして、いつ迄も覺醒せぬものこそ眞の不幸なる者といふべきである。顧れば維新以來五十餘年の間に、吾が國に於ては西洋の新文明を模倣することに重なる力が向けられて居る。而も西洋の近世文明なるものは一朝一夕にして出來上つたのではなく、殆んど六百年の歲月を費して漸次に完成したものである。それを僅々五十年の間に盡く模倣したのであるから、

凡てが皮相的、外面的で何の深みも無いのは據ない次第である。吾が固有の美點は殆んど失ひ盡し、彼の外面のみを眞似て其精神を逸したといふ有樣である。日々に多くの不祥なる事が續出するのも更に不思議ではない。今は正しく吾々の大に反省すべき時である。今迄の模倣時代に一段落を下し新に健全なる生活に入るべき時である。

此時に當つて大なる天災が吾が國を襲ひ、吾々に反省の機會を與へたことは偶然とは思はれぬ。各自が反省して各自が眞面目にならなければならぬ。此國は吾々の國である。此國の美しい歷史を作つたものは吾々の祖先である。此國の將來を托すべきものは吾々の子孫である。吾々は各自に今の社會の氣風を根本から刷新するべき責任をもつて居ると考へなければならぬ。世を救ふ者が天から降りもせぬ、地から湧きもせぬ。吾々各自に此の大任に當るべき覺悟を固むべきのみである。即ち各自に立正安國の精神を發揮すべく努めなければならぬのである。

今より六百餘年のむかし此國に天災地變の續いて起つた時、鎌倉に日蓮上人が出た。上人は此の天災地變を吾々に與へられたる自然の警告であると解し、日本國民が一齊

露光量違いの為重複撮影

に大覺醒をすべき時であると斷定した。而して之が覺醒の機運を作る所の大任には誰が當るべきものかと考へて、『人を待つまでも無い、自ら之に當らなければならぬ』と決心したのである。『之を知る者は之を世の人に知らしむる責任を有する者である。知つていはぬのは國を愛せぬ者である。たとへ如何なる困難を冒しても、之をいふことが自分の天職である』といふ確信を以て起ち、日本國民全體の覺醒を促さんが爲に書いたのは『立正安國論』である。立正安國論は日蓮上人の敎を信ずると否とを問はず苟くも國民の覺醒を必要とする人の共に讀むべきものである。余の此の小著は固より日蓮上人の眞意を發揮するだけの力の無いものであるが、今日の場合敢て之を世に公にするのは、今日こそ吾々が眞に反省し眞に覺醒すべき時であると感じたるが爲である。地下の日蓮上人は必ずしも余が不遜の業を尤められはしまいと信ずる。

大正十三年一月

小林一郎

立正安國論要解

小林一郎著

日蓮上人と立正安國論

『立正安國論は日蓮上人の名と共に普く知られて居る。上人の敎を信ずると信せぬとを問はず、立正安國論が上人の[illegible]ることを知らぬ人は少い。斯く世に名高いものであるのみならず、上人自身にも立正安國論を最も重要なるものと認めて居たやうである。上人が五十四歳の建治元年に身延で書いた『撰時鈔』の中に、此の立正安國論を北條時頼に訓じた事と、其後蒙古の來襲について再度平左衞門に警告を與へた事を擧げて、

余に三度の高名あり。……此の三の大事は日蓮が申したるにはあらず、只偏に釋迦如來の御神我身に入りかはらせ給ひけるにや、我身ながらも悅び身にあまる。法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり。

露光量違いの為重複撮影

に大覺醒をすべき時であると斷定した。而して之が覺醒の機運を作る所の大任には誰が當るべきものかと考へて、人を待つまでも無い、自ら之に當らなければならぬことを決心したのである。之を知る者は之を世の人に知らしむる責任を有する者である。知つていはぬのは國を愛せぬ者である。たとへ如何なる困難を冒しても、之をいふことが自分の天職である。といふ信念を以て起ち、日本國民全體の覺醒を促さんが爲に書いたのは「立正安國論」である。立正安國論は日蓮上人の教を信ずること香ること同はず苟くも國民の覺醒を必要とする人の共に讀むべきものである。余の此の小著は固より日蓮上人の眞意を發揮するだけの力の無いものであるが、今日の場合敢て之を世に公にするのは、今日こそ吾々が眞に反省し眞に覺醒すべき時であると感じたるが爲である。地下の日蓮上人は必ずしも余が不遜の業を尤められはしまいと信ずる。

大正十三年一月

小林一郎

立正安國論要解

小林一郎著

日蓮上人と立正安國論

「立正安國論は日蓮上人の名と共に普く世に知られて居る。上人の教を信ずること信ぜぬことを問はず、立正安國論が上人の作であることを知らぬ人は少い。斯く世に名高いものであるのみならず、上人自身にも立正安國論を最も重要なるものと認めて居たやうである。上人が五十四歳の建治元年に身延で書いた「撰時鈔」の中に、此の立正安國論を北條時頼に獻じた事と、其後蒙古の來襲について再度平左衛門に警告を與へた事を擧げて、

余に三度の高名あり。……此の三の大事は日蓮が申したるにはあらず、只偏に釋迦如來の御神我身に入りかはらせ給ひけるにや、我身ながらも悦び身にあまる。法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり。

露光量違いの為重複撮影

といつてある。即ち法華經の精神によつて此の立正安國論を書いたといふのである。又六十一歳の弘安五年十月、池上に於て入滅に先つて、弟子等のためて此論を講じたといふ事も傳はつて居る。

何故に立正安國論が斯くまでに重んぜられたのであるか。之を知るためには日蓮上人其人の性格と、その主張とを明にすることが最も必要である。若し日蓮上人に就て多く知る所なく、立正安國論を讀む人は多く失望に終るであらう。法華經の精神によつて書いたといふ立正安國論をいかに精讀して見ても、法華經の内容などは少しも分らぬ。又日蓮上人の教義の大要を知[illegible]といふ考へで此論を讀んで見ても、此論の中には教義の説明などは殆んど無い。上[illegible]自ら法華經の行者を以て任じ、あらゆる艱苦を凌いで此經を世に弘むることをその天職と信じて居たので、

日蓮が法華經の智解は天台傳教には千萬が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事はおそれをも懷きぬべし。――開目鈔

といふやうな語もあるのである。此人が法華經の行者として世に立つに當り、いかなる態度を以て世を率ゐ人を導いたかを知らうと思ふならば、是非とも此の立正安國論を讀まなければならぬ。また

涅槃經に云く、一切衆生が異の苦を受くるは、悉く是れ如來一人の苦なり等云々。

日蓮云く、一切衆生が一切の苦を受くるは、悉く是れ日蓮一人の苦と申すべし。――諫暁八幡鈔

といふ語もある。これは弘安三年、[illegible]歳の時の語であるけれども、これが實に上人の生涯を一貫したる精神である。獨り上人のみならず、苟くも法華經の行者を以て自ら任ずるものは、誰も皆この精神を以て世に立たなければならぬのである。

此の精神から立正安國といふことが生れて來る。立正安國とは正法を立て國土を安んずるの義である。立正安國論には法華經の内容が説明されて居るのでもなく、又日蓮上人の教義が叙述されて居るのでもないが、法華經の行者たる日蓮其人が活きて現はれて居る。こゝに立正安國論の價値が存するのである。

詮ずる所は天もすて給へ、諸難にもあへ、身命を期とせん。……我日本の柱とな

露光量違いの為重複撮影

露光量違いの為重複撮影

らん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん等と誓ひし願破るべからず。

といふ如き覺悟ある人にして、初めて立正安國といふことを聲を勵まして唱ふることが出來るのである。國は人が集まつて出來て居るのであるから、人の心が正しくならなければ、いかに法律や制度が完備しても安らかに治まるものではない。人の心を正しくするのには、正しい教の力に俟たなければならぬ。人の心には種々なる惑がある之を除くためには教によるの外はない。譬へば闇を除くに光の必要なのと同じ事である。但し光にもいろ〳〵有つて、若し光や青い光を以て闇を照すならば、たとへ物の姿は見えても紅や青の色を帶びて見るのであるから其物の眞の姿は見られぬのである。闇を照すためには無色の光を擇まなければならぬ。心を明にするには正しい教に依らなければならぬ。教と名がつきさへすれば何でも宜いといふわけには行かぬ

正しい教によつて國民を導くことに意を注がないで、たゞ其の過失を數へ其の罪科を責めて、之を防遏しやうとしても何の効もあるものではない。觀普賢經の中には、

一切業障海は皆妄想より生ず。若し懺悔せんと欲せば、端坐して實相を思へ。衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す。

とある。木の葉草の葉に夥しく置いた露霜をいかに骨折つて掃つても、容易に掃ひ盡せるものではない。しかし日が空に高く昇つて、その光が遍く草や木を照す時には露も霜も皆殘らず消えてしまふ。人生の事もまた其の如くで、多くの罪を除かうとするには智慧の日の光を明にするより外はない。是れ正法を立つるの必要なる所以である

日蓮上人の立正安國論は正嘉元年の大地震によつて大なる刺激を受けて、國民を警醒するの必要を感じ、文應元年に至つて此論を完成して最明寺入道時頼に献じたといふことであるが、此論の精神は永久に何人も服膺しなければならぬ所で、之を六百餘年前の事と考へてはならぬのである。立正安國論は北條氏の爲に書かれたものではない日本國民全體の爲に書かれたものである。獨りその當時の日本國民の爲ではなく、永く吾々の爲に遺されたる教訓なのである。

然らば何故に之を最明寺入道時頼に献じたのであるか。それは當時武家の棟梁とし

露光量違いの為重複撮影

らん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん等と誓ひし國伎るべからず、

――開目鈔

こいふ如き覺悟ある人にして、初めて立正安國といふことを聲を勵まして唱ふることが出來るのである。國は人が集まつて出來て居るのであるから、人の心が正しくならなければ、いかに法律や制度が完備してゐるとしても安らかに治まるものではない。人の心を正しくするのには、正しい教の力に俟たなければならぬ。人の心には種々なる惑がある之を除くためには教によるの外はない。譬へば闇を除くに光の必要なのと同じ事である。但し光にもいろ〳〵有つて、若し紅い光や青い光を以て闇を照すならば、たとへ物の姿は見えても紅や青の色を帶び見えるのであるから其物の眞の姿は見られぬのである。闇を照すためには無色の光を擇ばなければならぬ。心を明にするには正しい教に依らなければならぬ。教と名がつくさへすれば何でも宜いといふわけには行かぬ。正しい教によつて國民を導くことに意を注がないで、たゞ其の過失を數へ其の罪科を責めて、之を防遏しやうとしても何の効もあるものではない。觀普賢經の中には、

一切業障海は皆妄想より生ず。若し懺悔せんと欲せば、端坐して實相を思へ。衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す。

とある。木の葉草の葉に夥しく露霜がいかに骨折つて掃つても、容易に掃ひ盡せるものではない。しかし日が空に高く昇つて、その光が遍く草や木を照す時には露も霜も皆殘らず消えてしまふ。人生の罪もまた其の如くで、多くの罪を除かうとするには智慧の日の光を明にするより外はない。是れ正法を立つるの必要なる所以である。日蓮上人の立正安國論は正嘉元年の大地震によつて大なる刺激を受けて、國民を警醒するの必要を感じ、文應元年に至つて此論を完成して最明寺入道時頼に獻ぜられたといふことであるが、此論の精神は永久に何人も服膺しなければならぬ所で、之を六百年の前の事と考へてはならぬのである。立正安國論は北條氏の爲に書かれたものではない日本國民全體の爲に書かれたものである。謂りその當時の日本國民の爲ではなくて、永く吾々の爲に遺されたる教訓なのである。

然らば何故に之を最明寺入道時頼に獻じたのであるか。それは當時武家の權勢でし

て最も勢力のある北條氏を覺醒せしむることが最も必要であると感じたからである。その頃は大義名分を全く辨へず、たゞ武家あるを知つて上に朝廷の在すことを知らぬものも往々にしてあつたが、日蓮上人は其等と全く見る所を異にし、京都の朝廷以外に鎌倉の幕府といふものゝあるのを根本的に間違つた事であると斷じて、

日本國に代始まりてより已に謀叛の者二十六人、第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は賴朝、第二十六人は義時なり。二十四人は朝に責められ奉り、獄門に首を懸けられ山野に骸を曝す。二人は王位を傾け奉り國中を手に握る。王法既に盡きぬ。——筒御器鈔

と慨歎し或はまた

日本國の武士の中に源平二家と申して、王の門守の犬二匹候。——上野殿御返事

と喝破したこともある程である。況してその源氏の家人たる北條氏を國主として仰ぎ貴ばう筈は萬々無い。然るに其の精神を籠めて書いた立正安國論を最明寺時賴に献じたのは、別に見る所があつての事である。

其の當時に於ては國家の事、一として武家の意向によつて決せられぬものは無かつたのである。京都は久しい間文化の中心であつたが、それも引續いて兵亂の爲に昔とは全く變りはてた有樣となつた。又久しく政權を握つて居た藤原氏の一門も殆んど勢力を失ひ盡して、國民を指導すべき力は無くなつた。之に代つて起つたものが即ち武士である。武士は政權を握つて居たのみならず、萬事につけて國民を指導すべき地位に在つた。一般の農民や商人は多く無敎育であつて、自分達の每日の生活以外に何事をも考へずに暮して居るといふ有樣であつたから、その上に立つ所の武士の責任は決して輕いものでは無かつた。武士は其の勢力が四民を壓して居たのみならず、其の分別といひ識見といひ確かに四民の上に立つべきものであつた。勿論多くの武士は無學であつたけれども、何にせよ生死を賭しての戰爭に於て種々なる鍛錬を受けて居る上に、國の政治を執るべき最も責任ある地位に置かれて居たのであるから、たとへ無學であつても相當な覺悟は皆もつて居たのである。されば此等の武士階級の考へ一つで此國の運命が決せられるといつても殆んど過言ではない實狀であつた。

信仰の問題に就てもまた同じ事で、武士の向ふ所には四民皆之に隨ひ武士の背く所は四民皆共に離れ去るといふ有様であつた。農民や商人は自ら正邪善惡を辨別する力を殆んど持つて居なかつたのであるから、武士の爲す所を見て之に倣ふより外に途は無かつたわけである。それ故に日本全國を動さうといふには武家を動すことが肝要である。武家が動かなければ農民も商人も動かぬのである。たとへ其中に多少歸依するものが出來ても、農民や商人だけでは到底全國を動すほどの勢力は作れぬ。日蓮上人は日本國民の全體を正しい信仰に導きたいといふ理想を以て活動されたので、武士階級のみを相手にしやうといふ精神では勿論なかつた。それは上人の語に

剩へ廣宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は、大地を的とするなるべし。——諸法實相鈔

とあるによつても明である。しかし日本國民の全體を動すためには、是非とも武士階級を動す必要があつたのであるから、上人は之が爲に殆んど其の全力を傾けたのである。その趣意は此の立正安國論を作つてから九年目の文永五年十月に、北條時宗に與へた書の中に、

所詮は萬祈を抛て、諸宗を御前に召し合せ佛法の邪正を決し給へ。……敢て日蓮が私曲にあらず、只偏に大忠を懷くが故に、身の爲に之を申さず、神のため君のため國のため一切衆生の爲に言上せしむる所也。

とあるに照しても亦明である。

斯る趣意であるから、當時に於て最も勢力のあつた最明寺時頼に此論を提出したのである。時頼は康元元年（立正安國論提出の四年前に當る）に執權をやめて出家し、その嗣子の時宗がまだ幼年であつた爲に同族の長時が假に執權の職に當つて居た。しかし實權は依然として時頼の手に在つた。時頼は剃髪した時に三十歳であつたから、文應元年にはまだ三十四といふ壯齢で、決して隱居などして居るべき年頃ではない。日蓮上人は名義上の執權を眼中に置かず、凡ての武士を動すべき實勢力ある時頼に覺醒を促さんが爲に立正安國論を之に贈つたのである。又此の時頼は歴代の執權の中でも、殊に佛敎に深く歸依して居た人である。時政をはじめ義時でも泰時でも多少は佛

教の信仰をもつて居た。その中でも賢人の聞えのあつた泰時はことに栂尾の明惠上人に歸依してゐたといふ言ひ傳へもある。しかし佛教の教理などに就て深く究めたものはなかつた。然るに此の時頼は最初に宋から來た道隆に就て禪を學び、次に同じく宋から來た兀庵に就て教を受け、段々と修行が積んで弘長二年の十月には兀庵より印可を與へられ、

弟子二十一年旦暮に望み、今一時に已に滿足す。

と感涙數行に及んだといふことである。それは立正安國論提出の時よりも二年後の事であるが、既にその前からも相當に深い研究を積んで居たに違ひない。殊に正嘉元年（彼の大地震のあつた年）の四月には、日頃の宿願を果さん爲に紺紙金泥の大般若經一部を伊勢の大廟へ奉納したが、其時の發願文の中には、

凡そ厥の國家を擁護するものは神の明德なり。我が願廼ち之に在り。民黎を富饒にするものは經の惠力なり。我が願また之に在り。

といふやうな事を言つて居る。然るに天災地變が頻年續いて、人民が少しも堵に安んずることの出來ぬのは何故であるか。此の事實を擧げての日蓮上人の詰問は、最明寺入道の胸に充分こたえなければならぬ道理である。

いかに佛教に歸依して居ても、いかに多く寺を立て經を寫しなどしても、其の信仰の根柢が間違つて居れば何の功德もないといふのが、即ち日蓮上人の主張である。但し佛教の中には種々なる分派があつて、各派ともに皆佛の本意を傳へたものは吾であると主張して居る。其の何れが果して正しいものであるかを辨別することは、一般の人には到底出來難い事である。勿論涅槃經の中には『法に依りて人に依らざれ』と教へてある。是は末世に生れた吾々に信仰を定むるための標準を示されたるものである。末世に及ぶと權力のある人や地位の高い人に結び付いて、その勢力を利用して自己の宗派の擴張を謀るものが多く出る。それに眩惑されて、正しくない教に歸依する者も少からぬであらう。佛は豫め之を憂ひたまひ、いかに勢力ある人が信じて居やうとも、其人によつて自己の信仰を左右されてはならぬ。必ずその法の邪正をよく辨別して正しい法に依らなければならぬぞと誡め置かれたのである。斯く佛の誡めは懇であるけ

れども、その法の邪正を見分けるといふことが普通の人にはむづかしいのである。是れ即ち日蓮上人が『諸宗を御前に召し合せ佛法の邪正を決し給へ』と主張したる所以である。

日蓮上人は立正安國論の中に、法華經に背いた信仰は皆正しいものでないと斷言して居る。しかし是は自分一己の獨斷で斯ういふのではない。二十年の間研究を積んだ結果として此の信念を得たのである。即ち佛意に從ふといふより外に他意は無いのである。それ故に上人は若し自己の此の見解が誤りであるといふことを明に示す人があれば、いつでも法華經を捨てやうと明言してゐる。若しさういふ智者が出て來ないで、たゞ世間的の勢力を以ていかに自分を壓迫しても決して屈せぬぞといふのが上人の意氣である。即ち

大願を立てん。日本國の位をゆづらん、法華經をすてゝ觀經等について後世を期せよ。父母の頸をはねん、念佛申さずば。なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義やぶられずば用ゐじとなり。——開目鈔

の言ある所以である。されば上人が北條氏に對して望む所は、諸宗の僧を集めて自由にその各宗の教義に就て談論せしめ、以て果して何れの宗に從ふべきかを決定せんことである。唯だ諸宗を斥け諸經を擲つて法華經に歸依せんことを要望するのではない。極樂寺や建長寺の住僧等は多くの武家の歸依を得て、高德の名が世に喧傳して居る。日蓮上人は松葉ヶ谷の片隅に僅かに膝を容るゝばかりの庵を結んだる、無名の一寒僧に過ぎぬ。しかし上人は其等の諸高德と對論して必ず法華經が最勝の經なることを承認せしむべき自信をもつて居る。自由に對論をする場合になれば、今迄に蓄へ來つた勢力の多少、若くは歸依者の多少などは全く問題にならぬ。他の多くの人々を承服せしむることを得たものが、今後に於ける凡ての人の歸依を受くべきである。斯くてこそ涅槃經の『法に依りて人に依らざれ』の文が活きて來るのである。

但し此事は日蓮上人が新に思ひ付いたことではなく、和漢共にその前例がある。殊に傳敎大師は桓武天皇の勅許を得て、延曆二十一年正月に高雄寺に於て南都七寺の碩學十四人と對論し、法華經の最勝の經たることを彼の人々に承認せしめた。其時彼の

七寺の人々から出した謝表の中には、

講ずる所の經論其數多きも、彼此理を爭ひて其疑未だ解けず。而して此の最妙の圓宗猶ほ未だ闡揚せず。……久年の諍渙焉として氷解し照然として既に明なり。猶ほ雲霧を披いて三光を見るが如し。

といふ如き語さへある。日蓮上人もまた此事の蹤を追はうといふのである。上人には充分の自信があつたから、彼の北條時宗に對して諸宗との對決を求めた時には、建長寺はじめ諸寺に對しても書を贈つて此事を告げたのである。その建長寺への書の末文には、

日蓮が申す事を御用ゐ無くば後悔これ有る可し。此趣鎌倉殿宿屋入道殿平左衞門尉殿等へ之を進狀せしめ候。一處に寄り集りて御評議ある可く候。敢て日蓮が私曲の義に非ず、只經論の文に任ずる處なり。具には紙面に載せ難し、併ながら對決の時を期す。

とある。上人の態度はいつも此の如くに公明正大である。但し上人の眞意を解せぬものは、諸宗を罵倒して獨り自ら高しとする者のやうに思つて、兎角の批評をも試むるやうである。此點について誤解があつては、立正安國論などを幾度繰返して讀んでも其の精神を捉へることの出來やうわけは無い。此の上人の態度——法華經の行者として世に對し人に對する態度を了解するためには、上人の人物閲歷について一通りを知つて居なければならぬ。今極めて簡單にその事蹟の一端を述べ、然る後に立正安國論の內容に說き及ぼす事としやう。

上人は貞應元年二月十六日を以て安房國小湊の漁村に生れた。時は後堀河天皇の御宇で、鎌倉では北條義時が執權であつた。上人の家系については種々の說もあるが、上人自身には

日蓮は安房國東條片海の石中の賤民が子なり。——善無畏三藏鈔

日蓮今生には貧家下賤の者と生れ旃陀羅（漁者のこと）が家より出たり。——佐渡御書

といふのみで、その父祖に就て何事も語つては居らぬ。諸經の王たる法華經を弘めて、

濁惡の末世を救ふべき大任を負うて立つ人は、即ち如來の使と稱せらるべきものである。普通世間の貴賤尊卑を超越したる人である。その祖先が王公貴人であつても少しも誇るに足らず、乞食非人であつても更に耻づるに足らぬ。上人が出家となる目的で清澄寺に入り道善坊を師としたのはその十二歳の時、即ち天福元年である。それより數年の後に剃髮したが、諸宗の敎義を學ぶこと漸く年を經るに隨ひ、疑惑はたゝ深くなるばかりであつた。

清澄寺は其頃天台宗であつた。(今は眞言宗になつて居る。)天台宗といへば法華經によつて立つ宗なのであるが、久しい以前から密敎を採り入れて大日如來を崇めるやうになつて居た。之を眞言宗と區別するために台密といふ語も出來た。眞言宗は京都の東寺を中心として敎を弘めるので、東寺の密敎といふ意味で東密といひ、一方は天台の密敎であるから台密と稱するのである。清澄寺もその台密の寺であつた。而して其頃は淨土宗の勢力が國中を風靡する有樣であつたので、台密の寺の者も共に阿彌陀佛を念ずるといふ體であつた。日蓮上人は後に此時のことを回顧して、

日蓮は日本國安房國と申す國に生れて候ひしが、民の家より出て頭をそり袈裟を着たり。此度いかにもして佛種をも植る生死を離るゝ身とならんと思ひて候ひし程に、皆人の願はせ給ふ事なれば阿彌陀佛をたのみ奉り、幼少より名號を唱へ候ひし程に、いさゝかの事ありて、此事を疑ひし故に一の願を起す。——妙法尼御返事

といつて居る。こゝに『いさゝかの事』とあるのが實は大問題なのである。

十二歳にして清澄寺に入つた時に、どれ程の覺悟があつたかは知らぬが、研鑽を積むこと漸く久しきに及んでは、法師たる者の天職のいかに貴いものであるかを、上人は深く考へたことであらう。法華經の法師品には法師の貴いことを繰返して述べて、

當に知るべし是人は則ち如來の使なり。如來の所遣として如來の事を行ずるなり。

といひ、或はまた

當に知るべし是人は佛の莊嚴を以て自ら莊嚴するなり。則ち如來の肩に荷擔せらるゝことを爲ん

ともいつてある。法師は此の如くに貴い天職を有するもので、則ち佛の使として此世

に遣はされたものなのである。既に佛の使である以上は、佛の本意に違はぬやうにして法を弘めなければならぬわけである。然るに同じ佛敎の中にも種々の宗派があつて、何れに佛の本意が傳はつて居るか、容易に之を判ずることが出來ぬ。之を判ずることが出來なければ、法師として世を導き人を敎ゆることの出來やう筈はない。たとへ若年と雖も天性の聰明なること比類なき日蓮上人が（その頃の名は蓮長）此の大問題を解決せずに、安閑として日を送ることに堪へられなくなつたのは當然の事といふべきである。

佛敎が吾國に傳はつてから鎌倉時代まで、凡そ七百年の間に種々の宗派が弘まつた。先づ奈良朝の末までに支那から傳はつたのが六宗である。即ち小乘の敎に於ては倶舍と成實と律との三宗、大乘の敎に於ては三論と法相と華嚴との三宗である。其後平安朝に至つて天台宗と眞言宗とが傳はつた。それに平家全盛時代に起つた法然上人の淨土宗と、鎌倉時代に入つて宋から傳はつた禪宗とを加へると凡そ十宗となる。勿論此中で奈良朝の六宗は律宗を除くの外、いづれも宗敎としての活きた力は無くなつて居たが、敎義としては各宗それ〴〵に特色をもつて居たのである。一人の釋尊から出た佛敎が斯く多くの宗派に分れて互ひに相爭ふやうになつたのは、據ない事情によるとはいへ、誠に歎ずべき事である。絶對の眞理は唯一でなければならぬ。多くの分派を許して、何れにも相應の道理はあると妥協的に考へて居ることは、眞面目に道を求むる者の堪へ得る所でない。是非とも各宗各派の敎義を究めて、果して何れが釋尊の本意を傳へたものであるかを明にしなければならぬ。日蓮上人は前に引いた妙法尼御返事の續きに、

日本國に渡れる處の佛經並に菩薩の論と人師の釋とを習ひ見候はゞや。又倶舍宗成實宗律宗法相宗三論宗華嚴宗眞言宗天台法華宗と申す宗どもあまた有りと聞く上に禪宗淨土宗と申す宗も候なり。此等の宗々枝葉をば細かに習はずとも所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に、隨分に走りまはり、十二十六の年より三十二に至るまで二十餘年が間、鎌倉、京、叡山、園城寺、高野、天王寺等の國々寺々あら〴〵習ひ廻り候ひし程に、云々。

といつて居るが、以て其の熱心なる研究の態度を推すべきである。

今一つ大なる疑問がある。彼の聖德太子が佛敎の興隆に力を盡したまへるより以來諸宗が次第に榮えて來てゐるが、何れの宗でも國土の安穩と國民の幸福を祈らぬといふものは無い。然るに其の祈りは更に効き目が無くて、國土の安穩ならぬ事のみが續いて、四民その堵に安んずることは久しく出來なかつたのである。殊に日蓮上人の幼年の時以來、天災地變の吾國を惱ましたことは一度や二度ではなかつた。例へば嘉祿二年（上人五歲の時）六月には美濃に大雪が降り、七月には鎌倉に霜が降つた。安貞二年（七歲の時）には京にも鎌倉にも洪水が出て、人畜の死傷甚だ多かつた。寛喜元年（八歲の時）八月には諸國に大風洪水等の害が夥しくあつた。同三年には諸國に疫病が行はれ又饑饉に惱まされ。八九の兩月に亘つて大風洪水等の害があつた。此年の九月に朝廷よりして、京都の窮民が家を壞して薪と爲すことを禁ずるよしを令せられたのによつて見ても、其時の慘狀はほゞ察せられやう。貞永元年（十一歲の時）の饑饉も隨分甚しいものであつた。仁治二年（二十歲の時）には又之に倍する饑饉があつた。一般人民は源平二氏の爭ひによつて戰亂の絕え間が無かつた爲に、田畠は荒され家は燒かれ、一家離散するの不幸に逢つた者も少くなかつた。その戰亂が熄んでホット一息ついて間もなく、斯く連年の天災地變に惱まされたのである。然るに神佛の力でも之を救ふことは出來なかつたといふは、いかにも哀しい事ではないか。

情にあつい日蓮上人は此等の事を見聞して、いかに心を痛めたことであらう。人生は泡沫夢幻の如きものである、哀むべき事もなく喜ぶべき事もないと、冷やかに觀じてしまへばそれ迄であるが、上人の如き恩愛情誼にあつい人は、如何にしてもさういふ冷淡な考へになれぬのである。五十歲をすぎて迄も、身延の高峯に上つて遙かに安房の空を望み、亡き父母の恩愛を憶うて涙を灑いだほどの上人である。諸國の人民の流離艱難するに對して心を動さずに居られやう筈がない。彼等の爲に心を惱ますことの切なると共に、自ら佛の使たるべき地位に在りながら彼等を救ふことの出來ぬことを、限りなく遺憾に思つたに違ひない。日本國には十宗が並び行はれてゐるのに、その十宗の一でも眼前に多くの人が惱んで居るのを救ふべき力はないのである。これで

は古來から國土の安穩と國民の幸福とを祈ると聲言して來たかひが無いではないか。此の問題をいかに解決すべきものであるか。

斯く案じ來ると共に、上人の前には二つの大問題が横はつて來ることを痛感したのである。その一は『いかなる敎が敎主釋尊の本意を傳へたものであるか』といふ問題である。その二は『いかなる敎が諸民の艱苦を救ふべき力を有するものであるか』といふ問題である。此の二つの問題を解決すること無しに漫然として經を誦し袈裟を着けて日を送るのは、法師といふ名に對して愧づべき事といはなければならぬ。茲に於て日蓮上人は自ら一切の經論を讀破して、此等の問題に對する解決を求めやうと決心したのである。しかしながら是は大事業である、尋常一樣の努力で出來ることではない。是れ上人が清澄山にある虛空藏の廟に日參して、日本第一の智者たらしめたまへと祈願を凝したる所以である。古來此の虛空藏菩薩に祈れば智慧を授かるといふことが言ひ傳へられてある。上人が虛空藏に祈つたのは一身一己の爲でない。自ら法師たる天職を空しくせず、世を導き人を救ふの大任を完うせんが爲である。斯く誠心誠意を以て祈つたので、其の感應があつたことを自覺し、喜び勇んで研究に入つたので、上人自身にこの事を

日本第一の智者となし給へと申せし事を不便とや思し食しけん、明星の如くなる大寶珠を給ひて右の袖にうけ取り候ひし故に、一切經を見候ひしかば、八宗並に一切經の勝劣ほゞ是を知りぬ。——清澄寺大衆中

といつて居る。此の自信あつて初めて法華經の流布に魁し得べきである。

上人は此の決心を以て研究の途に入つたのである。天台の敎義を固執するのでもなく、密敎に心を惹かるゝのでもない、まして念佛の力を賴まうとも思はぬ。一切今迄の行き懸りをすて、虛心坦懷にして一切の經論を究め、一は自己のため一は一切衆生のために、大切なる問題を根本的に解決しやうとの志である。斯くして三十二歳の時までは、純粹の研究時代が續いた。或は鎌倉に赴いて諸宗の碩學の說を叩き、或は叡山に學び或は三井寺を尋ね、或は高野山に上つて密敎を究め、或は大阪の四天王寺に遊んで經論を讀み、全く寧日はなかつた。その中にも叡山には最も多くの歲月を費し

て深く究むる所があつた。又此間に於ては獨り佛法について研鑽を積んだのみならず或は儒教を究め道教を學び、或は國學を習ふ等、凡そ其の當時の學問として窺はざるものは殆んどなかつた。日蓮上人の遺文を以て各宗の祖師の著述と對比して見ると、上人の智識の該博なる到底他の諸宗の祖師の比でないことは、誰も之を認めざるを得ぬ所である。上人は少しも其の結論を急がず、たゞ深く究め遍く探つて完全無缺なる斷定を得やうと志して居たのである。

二十年の研究を重ぬるならば、凡庸なる人と雖も相當な成績を擧げ得べきである。況して上人の如き非凡の人が日本第一の智者たるべき抱負を以て、身命を賭してその研究を續けたのである。如何なる迫害にも屈せず、如何なる危難にも堪へ得るだけの確信を得たのは少しも不思議ではない。上人が後年に至り

例せば風に隨て波の大小あり、薪によりて火の高下あり、池に隨て蓮の大小あり、雨の大小は龍による。根深ければ枝しげし、源遠ければ流長しといふこれなり。—

—報恩鈔

といつた語は、移して以て上人自身の生涯の評語に充つべきである。又上人が斯くまで研究に力を用ゐたことが明かに今日に傳はつて居るのは、吾々に取つて何よりの幸といはなければならぬ。古來の偉人傑士、殊に宗教界の偉人などの事蹟には兎角神秘的の色彩が多過ぎて、後世からは殆んど其の眞相を捉ふるに苦むやうなのが大多數を占めて居る。それ故に吾々が自身の修養の範として之を仰いでも、何處から學んで宜いか殆んど手懸りもつかぬといふ有樣である。

勿論非凡な人の言行を凡庸な吾々の心で推度するのであるから、不可思議に見える點のあるのは免れぬことであらう。けれども餘りに神秘的の點が多くて、宛ら雲の中を翔る龍のやうに見えたのでは、たゞ仰いで讃歎するのには宜いけれども、幾分かづゝでも之を學び、之に近づいて行かうといふ志のある者に取つては甚だ頼りなき次第である。然るに日蓮上人の如きは極めて偉大であるけれども、多くの偉人傑士の如くに神秘的超越的に傳へられて居ないのである。同じく雲の上に高く見えるけれども、龍の高く翔るやうではなく、千仞の峯の高く聳ゆる如くである。其の頂は雲の上にあ

るけれども、その麓は吾々の脚下の地と連つて居るのである。吾々は其の頂を仰いで讃歎すると共に、自ら一歩一歩と其の麓に近づき、その峯に攀ぢて、やがては其の頂をも極むることが出來やうといふ希望をもつことが出來る。是は何といふ有難いことであらう。勿論上人は非凡なる天分を具へて居たにちがひ無い。けれども其の天分を完成するには二十年の研鑽の力が之に加はつて居る。前に擧げた妙法尼に與へた書の一節は、よく之を證するものである。吾々は上人の研究時代の事實が明かに傳はつて居て、努力の貴いことを今も吾々に物語つて居るのを、深く感謝しなければならぬと思ふ。

二十年の眞摯なる研究は、上人に法華經の行者として世に立つべき決心を與へたのである。此の決心を固むるに就ては最も重大なる理由が二つある。その一は『法華經は最勝の經であつて、釋尊の本意は此經の中に於てのみ最も完全に說き顯はされ居ること』である。その二は『濁惡なる末世の衆生を救はんが爲に、特に說き遺されたものが法華經であること』である。此の二つの事は日蓮上人より以前に、既に支那の天台大師も日本の傳敎大師も之を語つてゐるけれども、上人は天台傳敎の言であるから之を信じたといふのではない。二十年を費して一切の經論を讀破して後、天台傳敎の言のよく佛意に合せることを認め得たるが故に之を信ずるに至つたのである。

傳敎大師云く、淺きは易く深きは難しとは釋迦の所判なり、淺きを去りて深きに就くは丈夫の心なり。天台大師は釋迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す等云々。安州の日蓮は恐らくは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す。三に一を加へて三國四師と號く。——顯佛未來記

といふ決心は天台宗の寺なる淸澄山で出家した爲ではなく、諸宗を離れて直接に釋尊に接し、その本意の在る所を究めて後に思ひ定めた所である。

日蓮之を案じて云く、八宗十宗等は皆佛滅後より之を起し論師人師之を立つ。滅後の宗を以て現在の經を計るべからず。天台の所判は一切經に叶ふに依りて、一宗に屬して之を棄つべからず。——寺泊御書

といふ語は簡單にしてよく其意を悉してゐる。釋尊の敎が本となつて諸宗が分れ出たのであるから、諸宗の解釋によつて釋尊の本意を推しては危險である。釋尊の敎を直接によく究めて、それに依つて諸宗の從ふべきや否やを定むべきである。

さて釋尊の一代五十年の間に說かれたる經々を引比べて讀んだ末に、日蓮上人は法華經こそは釋尊の眞實の敎を其の內容としたものであつて、其他の經はいづれも方便の敎であるといふ斷定を得たのである。此事は他の人がいつたのではなく、釋尊御自身に明言されたのである。即ち靈鷲山に於て法華經を說かるゝ前に說かれた無量義經の中に

諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種々に法を說きにき。種々に法を說くこと方便力を以てす。四十餘年には未だ眞實を顯さず。——說法品

とあり、次に法華經を說かるゝに當つてはまた特に

我今喜んで畏無し、諸の菩薩の中に於て、正直に方便を捨て但だ無上道を說く。——方便品

と明言されたのである。又藥王菩薩に對つて告げられた所の語にも、

藥王今汝に告ぐ、我が所說の諸經、而も此經の中に於て法華最第一なり。——法師品

とある。斯く釋尊自身に此經が最勝の經たることを明言せらるゝ以上は、更に疑を容るべき所は無い。

苟くも佛法を學ぶ者にして法華經を全く窺はぬといふ者はない筈である。されば法華經が最も貴い經であるといふことを誰も知らずに過ぎやうわけは無い。吾國に於ても聖德太子が親しく法華經を講ぜられ、また其の義疏を作つて後に遺されてより以來、此經を重んずることは一般の習はしとなつて居たのである。然るに久しく年を重ぬる間に法華經が世に廢れて來たのには別の理由がある。それには法華經を弘むべき大任を負うて居る叡山の人々が、傳敎大師の精神を失つて偏に密敎に歸依し、權門の意を迎へて御祈禱の用を勤め、それに依つて自宗の繁榮を謀らうといふ考へになつたのも大なる禍根であるが、殊に禍の本ともいふべきは『末法の世』といふ思想である。即ち佛の入滅より二千年を經た後は末法の世となり、正法が滅び盡すといふことが大集

經等に示されてあるのである。委しくいへば斯うである。

佛滅後一千年間は正法の世

其後一千年間は像法の世

以上二千年過ぎて後は末法の世

正法の世といふは佛法が正しく信ぜられて、人々は實踐躬行を主として居る時代である。像法の世といふは佛法に就ての研究とか、或は寺を建て塔を作る事とか、凡て形式的のことが盛になり、實行の方は次第に疎くなつて行く時代である。末法の世は形式的の佛法すらも廢れて、人々は我意我欲にのみ耽り正義も人道も光を失ふ時代である。此時を白法隱沒の時といふ、白法とは正法の意である。又鬪諍堅固の時といふ、人々皆我執によつて相爭ひ相鬩ぐのである。斯うなつて來ると、いかに貴い敎でも之を信ずる者もなく又之を弘むる者も無くなるから、自然に廢れ果つべきである。

吾が平安時代の末期から、いかにも末法の世らしい事實が續々として顯はれて來た。常陸に將門の亂あり、伊豫に純友の亂あり、續いて奥州に前九年と後三年の役があり、久しからずして又保元の亂あり、平治の亂あり、人心匈々たる有樣となつた。さしも全盛を極めた藤原氏も勢力を失つてしまつた。之に代つて興つた平氏も二代にして亡びた。平氏を亡ぼして政權を握つた源氏も三代にして亡びた。其等の騷動のために人民は離散し、多くの寺も塔も燒かれ、尊い佛像さへも多く破壞された。修羅の巷といふ語が書物の中のものでなく、活きた世の中に實現さるゝ時となつた。天下泰平も國土安穩もむかしの夢となり神も佛も此國を守りたまはぬかと疑はるゝやうになつた。

此の如く白法隱沒といひ、鬪諍堅固といふ語が其儘に實現さるゝのを眼前に見て居ると、多くの人々はたゞ心細く悲しくのみなつて、自尊心も自重心も全くなくなつてしまふ。其中でも武士は四民の上に立つて得意を極めて居るのだが、それでも父子兄弟が戰爭の爲に死に別れをしたり、一家一門の者の中に衰へたり亡びたりする者のあるのを見ると、隨分心細く感ぜぬことも無からう。大乘の佛經に於ては人々皆佛性を具へて居ることが屢々くり返して敎へられ、殊に法華經に於ては

我本と誓願を立て、一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲

とまでいつてある。即ち佛が一切の人をして我と等しく佛の境界に到達せしめやうといふ御心を以て、法を說かれたといふのである。是はまことに洪大の慈悲といはなければならぬ事である。しかし餘りに心細い事ばかりを見たり聞いたりして居ると、吾々が佛のやうな力を具へるやうになるなどゝいふ事は、あまりに現在の有樣と懸絕して居て殆んどあてにならぬやうに思はるゝのである。

斯る人心の機微を捉へて起つたものは即ち淨土門の敎である。即ち一切の大乘經典をすて、一切の神佛に依り縋ることをやめて、たゞ彌陀の救ひを求めよといふ主張である。大乘の經典がつまらぬものだといふのでは無い。殊に法華經の如きは最も貴い經にちがひ無い。たゞ如何せん末世に及んで濁惡の世に生を受けてゐる爲に人の心も濁りはて、機根も卑くなつて居るから、高尙なる大乘の經典を讀んでもそれを解する力が無いのである。ましてそれを身に行ふことなどは思ひも寄らぬ。その實行が出來なければ神や佛の御心にも叶はぬわけである。さういふ困難な事に力を用ゐるよりも、たゞ阿彌陀佛の御力に賴るに若くはない。何人でも一心になつて念じさへすれば、必ず極樂淨土に往生すべき力を與へてやるといふのが彌陀の本願である故に、各自にその自力を賴むことをやめて、偏に彌陀の他力を賴むがよいといふのが、其の敎の大要である。此の如き敎は久しい間の困苦と混亂に疲れ果てたる人々の心に大なる慰安を與ふること、宛も旱天續きで乾き切つたる土地に大雨が降り注いだやうなものである。斯る敎が次第に勢力を占むるに及んで、法華經を讀誦する人も、釋尊を禮拜する人も殆んど無くなつたのである。現に日蓮上人がまだ靑年時代に、鎌倉へ赴く途中に程ヶ谷で或家に宿したが、その家の主人は淨土宗の信者であつた。それで釋尊の像を小兒の玩具に與へてあるのを上人が見て、その不心得を懇々と說き聞かせたといふことも傳はつて居る。

然るに此の如く末世の混亂狀態に驚いて、釋尊に背き大乘經典を拋つといふのは、深く思はざる者の爲す所である。それは釋尊の敎を深く味はぬ者の所爲で、その罪たる甚だ大なるものである。釋尊は法華經を說かるゝと共に、此經を末世に及んで逼く

弘むべきことを命ぜられたのである。今その證據となるべき文を經の中から二三引用して見やう。法華經の法師品には、眞の法師とは如何なるものであるかを說き示してあるが、その中に

我が滅度の後に於て衆生を愍むが故に、惡世に生れて廣く此經を演ずるなり。

とある。又その次の寶塔品には、

佛滅度の後に能く其義を解せん、是れ諸の天人世間の眼なり。恐畏の世に於て能く須臾も說かんは、一切天人皆供養すべし。

といつてある。勸持品に至つては此經を說き弘むる者の覺悟を說いて、

佛滅度の後、恐怖惡世の中に於て我等當に廣く說くべし。

といひ、なほ又

我身命を愛せず、但だ無上道を惜む、我等來世に於て佛の所囑を護持せん。

といひ、所謂鬪諍堅固の世に出て此經を弘むべき覺悟が明に示されてある。神力品に至つては眞の法華經の行者を讃めて、

是人の功德は無邊にして窮まりあること無けん。十方の虛空の邊際を得べからざるが如し。

といふと共に、斯る人の世に現はるべき時を示しては、

如來の滅後に於て佛の所說の經の因緣及び次第を知りて、義に隨ひて實の如く說かん。

といつてある。而して後に藥王品に至り。

我が滅度の後、後の五百歲の中に廣宣流布して、閻浮提に於て斷絕せしむること無かれ。

と明かに此經の世に遍く弘まるべき時を示されてある。

後の五百歲といふは即ち末世のことである。即ち前にいつた大集經の中に、五百年づゝ五つの時期が分けて說いてあるのである。その文をあげて見ると、

我が滅後五百年の中に於て、諸の比丘衆猶ほ我が法に於て解脫堅固なり。後の五百年には我が正法の禪定三昧住することを得て堅固なり。後の五百年には讀誦多聞堅

固なり。後の五百年には我が法の中に於て多く塔寺を造り住することを得て堅固なり。後の五百年には我が法の中に於て鬪諍言訟し白法隱沒し損滅すること堅固なり。とある。この第五番目の五百年が即ち後の五百歳で、佛滅より二千年の後である。此の混亂を極めたる末法の世に於て此の法華經を閻浮提に弘めよといふのである。閻浮提とは即ち全世界である。されば此の法華經が眞に光を放つべき時は濁惡の極なる末世なるべく定められて居るのである。釋尊の深い御考へは此處によく現はれて居る。

凡そ敎には深淺高下さまざまあるが、皆それぞれの利益を人に與ふるものである。宛かも種々の藥が病の輕重によりそれぞれの効驗を示すやうなものである。健康な人には藥の用はない。又死人には藥を與へても何の用をもなさぬ。人の心に少しも惑がなければ敎の用はない。又人の心が惑ばかりで充ち塞がつて居るならば、いかに善い敎があつても入るべき餘地がないであらう。病人は藥を飲めば健康になり、藥を飲まずに捨て置けば死ぬかも知れぬ。茲に於てか初めて藥の用がある。凡夫の心には煩惱が充ちてゐるけれども、その奥には貴い佛性も潛んで居る。故に其の煩惱を拂ひ佛性の光を發せしむべき爲に敎の用があるわけである。即ち凡夫は精神的の病者であつて、敎は之に對して與へらるゝ藥である。其の病の輕い者には、凡庸なる藥でも充分その効を奏するであらう。しかし非常なる重病になると普通の藥では之を癒すことが出來ぬ。たゞ之を癒すべきものは名醫の處方による所の靈藥のみである。敎の力によつて世を救ふことも亦た此と同樣である。

末法の世は白法隱沒の時である、けれども決して失望するには及ばぬ。普通の藥の力では癒らぬ重病でも之を治すべき途が全く塞がれて居るわけではない。佛の眞實の敎を以て其の內容とする法華經は名醫の處方による所の靈藥に比すべきものである。いかなる敎でも世を救ふことの出來ぬ時に初めて此經が光を發し、力を現はすべきである。されば釋尊は吾々に對して、

是の好き良藥を今留めて此に在く。汝取つて服す可し、差えずと憂ふること勿れ。

——壽量品

と申された。此の良藥の力によつて如何なる病でも癒らぬといふことは無いのである

末世濁惡の時になつて人の心は極端に險惡となり、如何なる敎をも受け附けぬほどに我欲が發達して來ても、その心の底にはなほ佛性が存して居る。涅槃經には『一切衆生悉く佛性有り』といつてある。一切衆生といふ中には、如何なる惡人でも皆含まれて居なければならぬ。たとへ地獄の底に落ちた者でも、その具有したる佛性を開發せしむべき道を得さへすれば、その苦しい境界を脫出することの出來ぬ筈はない。斯る道を與ふるものは唯だ佛の敎のみである。

佛性を具へたる人と人とが集つて社會を作つて居るのである。さればいかに濁惡の世になつても、凡ての人が之に滿足して居やう筈はない。罪を重ね過を重ねて行く間には、何となしに恐怖も煩悶も募つて行くのである。其の苦みと惱みとが積り積る間に、何とかして斯る闇黑の時代から脫出して光明の世界に住みたいといふ、强い希望が湧いて來る。これ即ち人々の心の底に潛んだる佛性の閃きである。これ即ち道を慕ひ敎を求むるの念である。しかし種々の世相の紛糾した中を通り拔けて來た人々を歸依せしめやうといふには、尋常一樣の敎ではいかぬのである。唯だ佛の眞實の敎を以てその內容とする所の法華經にして、初めて此の要求に應ずべきである。若し末法の世に出て身命を惜まずして此の法華經を弘むる者があれば、必ず新なる機運を作つて世間の人に新なる光明を與へることが出來る。濁惡の世に出て正しい敎を弘むるのであるから、最初は種々の迫害にもあひ、又嘲笑をも受けるであらう。しかし人々の心の底には敎を求むる强い力が動いて居るのであるから、弘むる方の努力が屈せず撓まずして續きさへすれば、後には必ず其の効果を奏するに定まつて居る。天台大師が

後の五百歲遠く妙道に沾ほはん。

といひ、又唐の妙樂大師が

末法の初め冥利無きにあらず。

といつたのも、必ず末法の世に斯る法華經の行者が現はれて、佛の遺命を完うし、一切衆生が永く其餘澤を受くべきことを信じたからである。

日蓮上人は一切の經論を讀破して此の結論に到達し、二十年來の疑惑がはじめて解けたのである、法華經は最勝の經である、而して此經の弘まるべき時は今である。此

の法華經が弘まるによつて八宗十宗も皆統一せらるべきである。又此の法華經が弘まるによつて國土の安穩も必ず見らるべきである。斯くてはじめて天台傳敎等諸師の努力も其の意義を有すべきである。斯く今まで二十年間の疑問の解決はついたが、まだ解決されぬ大問題が殘つて居る。それは『今の時に出て法華經を弘むる人は誰ぞ』といふ問題である。いかに貴い法があつても、之を弘むる人がなければ世に弘まらぬ。其人が必ず末法の世の初めに出なければならぬ筈であるが、未だ影さへ見えぬのである。法華經の神力品には末法の世に出て此經を說き弘むる人の貴いことを述べて、

如來の滅後に於て佛の所說の經の因緣及び次第を知りて、義に隨ひて實の如く說かん。日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯人世間に行じて能く衆生の闇を滅せん。

といつてあるが、『斯人』と呼ばるゝ人は今の世に於て誰であるかと案じて見ると、更にそれらしい人も見えぬ。元來天台傳敎の流を酌むものは叡山なのであるから、若し斯る人が出るとすれば叡山よりして出づべき筈である。然るに叡山には久しく傳敎の精神が亡びて居る。多くの學徒の中でも殊に俊秀と目せらるゝ者は、却て法華經に背いて去り、或は法然の如くに念佛を弘め、或は榮西や道元の如くに禪を唱ふる有樣である。此儘で居るならば、末法の世の人はいつ迄も法華經を知らず、佛の豫言せられたことは虛言となつてしまふべきである。

斯く考へ來つて日蓮上人は『此大任を果す者は自分より外にない』といふ自覺を得たのである。佛が虛言をいはれやう筈がない。而るに佛が必ず此の法華經を弘むる者が出ると定め置かれた時に、自分より外には此經の貴いことを辨へた人が無いのである。然らば此經を弘むるといふ大任は自分の肩にかゝつて居るものと考へなければならぬではないか。若し此大任を果すことが出來なければ、日本第一の智者となしたまへと虛空藏の廟に祈つた事は何の意味もなくなつてしまふ。どうしても自ら奮ひ起つて此の大事に當らなければならぬ。上人は後日に至り此意を述べて、

此を申さば必ず日蓮が命となるべしと存知せしかども、虛空藏菩薩の御恩を報ぜんがために……此を申しはじめて其後二十餘年が間退轉なく申す。——清澄寺大衆

といつて居る。『日蓮が命となるべし』とは自分の生命に危害が及ぶであらうといふことで、法華經を弘むる以上は此の覺悟がなければならぬのである。此經は必ず末法の世に於て全世界に弘まるべきものであるが、其の弘まるに先つて多くの困難がある。この困難に打克つて行く程の人が出て、はじめて此經の弘まる機運が開けるのである。

正義は最後の勝利者であるけれども、其の勝利は多くの犧牲を拂つて後でなければ得られぬものである。世間の事に於て皆然り、敎を弘むるについては殊にさうである。されば法華經の勸持品には、末世に出て此經を弘むる者の一身に集り來るべき危難を數へて、

諸の無智の人の惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者有らん。

といひ、又讒言の徒の多かるべきことをも擧げて、

我等を毀らんと欲するが故に、國王大臣婆羅門居士及び餘の比丘衆に向ひて誹謗して我が惡を說き、是れ邪見の人、外道の論議を說くと謂はん。

といひ、なほ又

惡口して擯出せられ塔寺を遠離せん。

ともいつてある。但し法華經を弘むるといふ大任を果すことは此上もない貴い業である故に、如何に大難が重り來つても必ず之に堪へなければならぬので、即ち

我は是れ世尊の使なり、衆に處するに畏るゝ所無し。

といふのが其の平生の覺悟でなければならぬのである。此の覺悟を以て事に當れば、如何なる境遇に處しても其心に餘裕があつて、常に世間の毀譽褒貶の上に超越し、その大目的に向つて歩を進めて行くことが出來る。されば經の中に此の如き人を讃めて

遊行するに畏れ無きこと師子王の如く、智慧の光明日の照すが如くならん。——安樂行品

といつてある。法華經は此の如き人の力によつて末世に弘まるのである。

是は併しながら難事中の難事である。自ら正しい敎を說いて居ながら世間の有らゆる迫害を受け、而も之が爲に少しも心を動さぬといふことが容易に出來るものではな

い。法華經が難信難解と稱せらるゝのは實に之が爲である。法華經の文字章句を一通り解することは、さまで困難なる業ではない。しかし之を解し得ても信じなければ何にもならぬ、信ずるといふだけで之を行はなければ信じたかひは無い。行ふに當つては如何なる難にも堪へなければならぬ。之を堪へて行くことが容易に出來ぬ故に、つまり信ずることも解することも空に歸してしまふのである。斯る困難を冒して此經を信じ此經を弘むる人にして、初めて眞の佛の使と稱せらるべきである。日蓮上人は自ら此の法華經を世に弘むる大任に當らんとの決心を固むるに當り、果して自ら此等の困難を堪へ得らるゝであらうかと熟考して見た。若し堪へられずして中途で止めるならば、最初から思ひ立たぬ方が宜いのである。思ひ立つ以上は身命を賭して之を貫かなければならぬ。何れにしやうかと熟考した末、上人は身命を賭して此の大事に當らうと心に誓つた。後に此時のことを回想して、

日本國に此を知れる者はたゞ日蓮一人なり。これを一言も申し出すならば、父母兄弟師匠に國主の王難必ず來るべし。いはずは慈悲なきに似たりと思惟するに、法華經涅槃經等に此二邊を合せ見るに、いはずは今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮つべし。いふならば三障四魔必ず競ひ起るべしと知りぬ。二邊の中にはいふべし。王難等出來の時は退轉すべくは、一度に思ひ止むべしと、且らくやすらひし程に、寶塔品の六難九易これなり。我等程の小力の者須彌山は投ぐとも、我等程の無通の者乾草を負ひて劫火には燒けずとも、我等程の無智の者恒沙の經々をば讀み覺うとも、法華經は一句一偈も末代に持ち難しと說かるゝはこれなるべし。今度强盛の菩提心を起して退轉せじと願しぬ。——開目鈔

（二邊とあるは此事を言ひ出すと、言はずして止むとの二つをいふ。三障四魔とは此經を弘むる者の身に迫る種々の迫害や支障のこと。王難とは政權をもつて居る者の加へる迫害のこと。六難九易とは須彌山を手で投げるといふ如き困難の事を九ヶ條擧げ、此等は法華經を持つの難きに比ぶればなほ易い事であると說かれたこと。）

といつたのは實に能く當時の決心を語れるものである。三十二歳の春遊學を終つて故鄉に歸つた日蓮上人は、此の大抱負大決心をもつて歸り來つたのである。

清澄の山へ歸つて題目の第一聲を唱へたのは建長五年四月二十八日の朝である。此の第一聲より日本全國の津々浦々で唱ふる題目の聲が生れたのである。

日本國の中にたゞ一人南無妙法蓮華經と唱へたり。これ須彌山の始めの一塵、大海の始めの一露なり。二人三人十人百人、一國二國六十六箇國、已に島二つにも及びぬらん。今は謗せし人々も唱へ給ふらん。又上一人より下萬民に至るまで法華經の神力品の如く、一同に南無妙法蓮華經と唱へ給ふ事もやあらんずらん。——妙密上人御消息

とあるは二十餘年の後に至り當時を追懷しての感慨である。固より迫害の身に及ぶべきことは覺悟して法華經を弘めはじめたのであるが、案の如くに迫害は即日起つた。

日蓮は一閻浮提の内、日本國安房國東條郡に始めて此の正法を弘通し始めたり。隨て地頭敵となる。——新尼御前御返事

とある如く、其地の地頭たる東條景信は念佛の信者であつたが故に、上人を阿彌陀佛の敵として憎み、危害は上人の身に迫つたので、單身安房國を去つて鎌倉に赴き、松

葉ヶ谷に膝を容るゝばかりの庵を結んだ。立正安國論も此の小庵の中で認められたものである。

此時を始めとして上人の一生は迫害の連續であつた。或は惡口罵詈せられ、或は石瓦を擲たれ、或は草庵を燒打せられ、或は安房の小松原で要擊せられて傷を負ひ、或は龍の口で頸を刎ねられんとし、或は伊豆に流され佐渡に流され、彼の勸持品に書かれたる一切の迫害は盡く上人の一身の上に實現した。しかし上人は兼て期する所であるから少しも之に驚かなかつた。

道の間の事心も及ぶことなく又筆にも及ばず、たゞ暗に推し度る可し。又本より存知の上なれば始めて歎く可きに非ずと之を止む。——寺泊御書

といふは佐渡へ配流の時の語であるが、何れの迫害の場合でも上人の態度は此の如くに終始一貫して居た。難にあふは苦しいことであるけれども、難にあふにつけて上人の心には大なる悅びがあつた。何となれば佛の敎へ置かれた所の虛言でないことが、之によつて愈々明になるからである。法華經を弘むる者の身に迫害が集るといふこと

を佛は豫言せられた。而して此經が後には全世界に弘まるといふことをも佛は豫言せられた。其の豫言の一は全く適中して、上人の一身には勸持品に歴擧せられた通りの迫害が集つたのである。之によつて上人が法華經弘通の天職を負うた人であることが明になつた。又上人の努力は空しからずして、此經の全世界に弘まるべき機運を作るに違ひないといふ確信も得られた。一の豫言が適中した以上は、他の豫言の適中すべきことも疑ひの無い所である。上人たる者どうして之に對して大なる悅びを感せずに居られやうか。

日蓮はさせる妻子をも帶せず魚鳥をも服せず、只法華經を弘めんとする失によりて、妻子を帶せずして犯僧の名四海に滿ち螻蟻をも殺さゞれども惡名一天に彌れり。恐らくは在世に釋尊を諸の外道が毀り奉りしに似たり。只偏に法華經を信ずる事の餘人よりも少し經文の如く信をもむけたる故に、惡鬼其身に入てそねみをなすかと覺え候へば、是程の卑賤無智無戒の者の、二千餘年已前に說かれて候法華經の文にのせられて、留難に値ふべしと佛記し置かれまゐらせて候事のうれしさ申盡し難く候。

……法華經の故にかゝる身となりて候へば、行住坐臥に法華經を讀み行ずるにてこそ候へ。人間に生を受けて是程の悅びは何事か候べき。——四恩鈔

といふは伊豆へ配流中の述懷であるが、上人は難にあふ毎に悅びを感ずることが愈々切になつたのである。それは一難毎に自己の天職の貴いことが愈々確められて行くからである。

難を忍んで法華經を弘むることは、一切の人を正しい信仰に導き入れやうためである。佛が一切の人を皆成佛せしめやうと誓はれた、その貴い御心を贊けんが爲である是程洪大なる慈悲はない。

日蓮が慈悲洪大ならば南無妙法蓮華經は萬年の外未來までも流るべし。日本國の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ。——報恩鈔

とは上人の抱負である。正法に負くものは無間地獄に墮つるといふのであるから、正法を弘むるは即ち無間地獄の道を塞ぐ所以である。此文と比べ合せて、前に引いたる開目鈔の文の『いはずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮つべし』とあるを

注意しなければならぬ。自ら正しい敎を信じてゐる者が他人の誤れる敎を信ずるを見て、之を諫めもせず戒めもせずに捨て置くは大なる罪である。涅槃經の中に說かれた所によれば、たとへ其人は善人であつても、他人が正法を壞るのを見て之を攻擊もせず排斥もせずに居れば、自ら正法に敵對すると同樣な罪である。

當に知るべし是人は佛法の中の怨なり。

とまで極言してある。大乘の佛敎を學ぶ者は常に佛の大慈悲の御心に習はなければならぬ。若し他人の過失を見て之を諫めもせず、之を正しい道に導きもせずに捨て置くならば、慈悲の心のある者とはいはれぬ道理である。日蓮上人が諸宗の人々に對して論難攻擊を加へたのは、之を敵として排斥する心ではなくて、之を正しい道に導き入れたいといふ慈悲心からである。

我が父母を人の殺すに父母に告げざるべしや。惡子の醉狂して父母を殺すを制せざるべしや。惡人寺塔に火を放たんに制せざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや

——開目鈔

といふは能く此心を言ひ現はしたるものである。

凡そ敎を弘むるに二つの途がある、その一は攝受で其の一は折伏である。攝受とは他の人々を包容して自然に之を感化して行くことである。折伏とは其の過を嚴しく責めて、正しい道に導き入るゝことである。日蓮上人の採つたのは折伏の途である。又之を逆化ともいふ。自分と意見の同じ人は順緣で、意見の異る人は逆緣である。逆緣によつて之を敎化して行く故に逆化といふのである。如何なる心を以て折伏を行ふかといふに、日蓮上人は昔の不輕菩薩の心を以て折伏を行ふのであるといつて居る。法華經の不輕品の中に、不輕菩薩といふ人の事蹟が委しく記されてある。此人は途中で行きあふ人に對して、一々恭しく手を合せて禮拜し、

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以はいかん、汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし。

といつた。多くの人の中には之に對して惡口罵詈するものもあり、或は杖を以て打ち瓦石を投げつくる者もあつたが、不輕菩薩は更に之が爲に瞋恚の念を發せず、『我敢て

汝等を輕しめず』とのみいつて居た。此の不輕菩薩と同じ心を以て日蓮上人は折伏を行ふといふのである。

一は凡ての人を禮拜し、一は凡ての人を呵責する。此の兩者の爲す所は全く相反するが如くに見えて、其の精神に於ては一致して居るのである。不輕菩薩も日蓮上人も共に凡ての人の佛性を具有せることを認めて、深く之を敬ふ者である。不輕菩薩が凡ての人を禮拜したのは、人々をして皆貴い佛性を具有して居ることを自覺せしめ、平生の卑しい行ひをやめて偏に菩薩の道を勵み、終に佛の境界に到達せんことを期せしめんとの大慈悲心に出るものである。日蓮上人もまた之と同じく、凡ての人が佛性を具有して居ながら之を開發せしむべき正しい敎に依らず、いつ迄も惑を重ねて居るのを悼むのあまりに、何とかして之を覺醒せしめやうとして折伏を續くるのである。而して之が爲に如何なる迫害を受けても更に瞋恚の念を發することは無い。彼の不輕菩薩は其の慈悲の行を積んだ報により後に佛となつたのであるが、日蓮上人もまた同じ報を得べきものである。

我が弟子等之を存知せよ、日蓮は是れ法華經の行者なり、不輕の跡を紹繼するが故に。――聖人知三世事

といふやうな事を上人は幾度も繰返していつて居る。

日蓮上人が法華經を弘めるについてまた特に注意すべきは、常に『日本國』といふことに重きを置いて居た事である。上人が『日本の柱とならん』云々と誓つた語は前にも引いたが、其の著書の中でも特に重要なものとして知られたる觀心本尊鈔には、

一閻浮提第一の本尊此國に立つ可し、月支震旦未だ此の本尊ましまさず。

といつてある。月支とは印度である、震旦とは支那である。佛法は印度から支那を經て吾國に傳はつたものであるが、日蓮上人は印度にも支那にも廢れた法華經が日本に弘まつて、やがて世界各國に流布すべきことを信じて居たのである。されば又

天竺國をば月氏國と申すは、佛の出現し給ふべき名なり。扶桑國をば日本國と申すあに聖人出給はざらん。月は西より東へ向へり、月氏の佛法の東へ流るべき相なり日は東より西に入る、日本の佛法の月氏へかへるべき瑞相なり。月は光あきらかな

らず、在世はたゞ八年なり。日は光明月に勝れり、五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり。――諫陸八幡鈔

ともいつてある。在世はたゞ八年といふは、釋尊が靈鷲山に於て八ヶ年法華經を說かれたことである。その法華經が末法の世に傳はつて永く世間の闇を照すのである。而して其の流布の中心となるものは吾が日本國であると、上人は確信して居たのである。

斯く吾が國を大切に思ふのは、一には法華經の精神に基づくものであるが、又一には生を此の日本國に受けた者として、此國の萬邦に冠絕したる國であることを自覺せるが爲である。一概に佛法といつても、其の敎には淺いのもあれば深いのもある。方便の敎もあれば眞實の敎もある。其の方便の敎の中には此世を穢土と見て、此の穢土を出離することを理想とするやうなのもある。しかし法華經に於ては此世を穢土とは見ないのである。勿論吾々の眼前にある世間は種々の不祥な事に充ち滿ちて居て、いかにも穢土といふ名が適當なやうに見える。けれども此の穢土を淨土に變化せしむる力を吾々は皆もつて居るのであるから、之を穢土として厭ふものは間違ひである。たとへ穢土を離れて見たところが、吾々自身の心が元の心であるならば、安穩なる生活に入り得やう筈はない。此世が穢土であるのは吾々の心が穢れてゐるからである。吾々は互ひに穢れた心を以て相對し、互ひに自分の勝手ばかりを考へて嫉みあひ憎みあひ、種々の紛爭を重ねてゐる。それ故にいつ迄も穢土なのである。又此の世界を娑婆世界といふが、娑婆とは堪忍の義である。種々の苦しい事が多くて堪忍しなければ暮されぬ世の中であるから、之を娑婆と呼ぶのである。しかし吾々の心が全く新になれば娑婆世界は娑婆でなくなる筈である。法華經の壽量品に

我が此土は安穩にして、天人常に充滿せり。

とあるが、此土といふは即ち此の娑婆世界のことをいふのである。吾々が皆佛の御心に近づくならば此の經文は直ちに吾々の眼前に實現せらるべきである。

前にもいふ通り吾々には皆佛性が具はつてゐるので、之を開發長養すべき道を失ひさへしなければ、其人の機根によつて遲速の差はあつても、それ〴〵に皆佛の境界に近づいて行き得べきものである。此の貴い道を示されたるものが即ち大乘の佛敎であ

つて、之に從つて修行を重ねて行くのが即ち菩薩の道である。敎を與へられても之を解することが出來なければ用に立たぬ。解しても深く之を信ずることが出來なければ何の力にもならぬ。信じても之を身に行はなければ眞に信じたものとはいはれぬ。之を行ふのは吾々各自の日常生活を續け、各自の職業に從事する間に於てすべきである。日々世間に立つて多くの人に接する間に、種々の出來事によつて吾が心を鍛へて行くと共に、周圍の人々を導いて共に正しい道に入ることの出來るやうに努力を續けるのが眞の菩薩行である。日蓮上人が

極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず。——報恩鈔

といつたのは眞に意味の深い語である。

釋迦如來は此の娑婆世界の一切衆生をして共に娑婆世界の苦を離れ、共に意義ある生活を營ましめんが爲に法を說き、樣々の苦勞を重ねて衆生を導かれたのである。一切衆生が其の敎に從つて修行を重ぬる時には、此の娑婆世界以外に別に極樂淨土を求むるに及ばず、こゝが次第に極樂淨土の狀態に近づいて行くべきである。法華經の神

力品には十方の世界の衆生が共に此の娑婆世界に向つて、釋迦牟尼佛を禮拜したことが記されてある。

彼の諸の衆生虛空の中の聲を聞き已りて、合掌して娑婆世界に向ひ是の如き言を作さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と。

是れ釋迦如來の洪大なる慈悲に深く隨喜したことを現はすものである。而してなほ此文に續いて、

時に十方世界、通達無礙にして一佛土の如し。

とあるは、釋迦如來の敎が（勿論方便の敎でなく眞實の敎が）凡ての人を化し終る時には、此の娑婆世界が佛土となるべきことを示すものと解すべきである。何ぞ此の世界を離れて別に極樂淨土を求むるの要があらう。各自に此の世界を淨土に近づかしむべく努力すべきのみである。

斯く考へて來ると吾々の日常生活に深い意義が認められるのである。若し煩惱に充ちた心を以て日常の生活を送るならば、いかに長い命を保つても其の生涯は無意味で

あるが、若し菩薩の道を行ずる志を以て日々を送るならば、一々の業は皆此の娑婆世界を淨土に變化せしむるために役に立つものである。斯く吾々の日常の業に深い意義を認むると共に、國家の大切なことも亦た明に認められなければならぬのである。何故なれば國家を離れた個人といふものは全く存在せぬからである。いかなる野蠻人と雖も群を成して住まぬものはない。少しく文明の程度が高くなればたゞ群を成して住むだけでなく、其中に秩序が立ち統一が行はれ、互ひに力を協せて幸福なる生活に向つて進まうと努むるのである。茲に於てか國家といふものが形を成し、主權者といふものが儼として存するやうになる。それで各國民の間に固有の國語が發達すると同じやうに、各國民それ〴〵に固有の風俗習慣が出來、それ〴〵に固有の國民性が出來上るのである。斯る國民生活の中に於て養はれ、斯る國民生活の中に於て教育せられ陶冶せられて、各個人が一人前の働きをするやうになるので、國家を離れて個人といふものは初めから存在せぬのである。

又近頃では種々の事に『世界的』といふ語を用ゐるやうになつたが、國家を離れた

世界といふものは無い。各國が相對立して、それ〴〵に固有の文化を發達せしめて行くによつて、世界が進歩するのである。國民として其國に盡すことの出來ぬものが、世界の進歩に貢獻することの出來やう筈はない。宗教の如きは固より世界的のものであつて、一二の國に限らるべきものでは無い。しかし正しい宗教によつて正しい信仰を有するものは、必ず其國の爲に力を盡さうといふ精神になるべきである。正しい信仰は空理空論とはちがふ。菩薩の道は各自の日常生活の上に實現されて行かなければならぬ。政治でも經濟でも凡てが正しい信仰を基礎として行はるゝやうになれば、國民の生活が初めて幸福になるのである。それ故に宗教の專門家のみの力で宗教を弘めたのでは充分の効果の現はれるものではない。一國の有力者が自ら正しい信仰の上に立つて、共に力を協せて正法の流布を賛くるといふ時代になつて、初めて釋尊の御精神が充分に發揮せらるべきである。それ故に涅槃經の中には、

今無上の正法を以て諸王大臣宰相及び四部の衆に付屬す。正法を毀る者をば大臣四部の衆當に苦治すべし。

といつてある。苦治するといふは制裁を與へることである。即ち國中の有力者の力によつて正法を擁護する必要を示されたのである。

釋尊の御精神が此の如くであるから、眞によく佛法を知り、又眞によく國を治むるの道を知る者は、佛法と治國の道との融合一致を理想として力を盡すのである。これを佛法と王法との冥合といふ。吾國に於ては聖德太子が佛法の興隆に力を盡された際に、法華經を自ら朝廷百官のために講ぜられたことは前にもいつた。傳敎大師が桓武天皇の御信任を得て、叡山が盛になつた時には法華經と仁王經及び金光明經と併せて鎭護國家の三部經といひ、常に之を講說して怠らなかつた。此の二經はいづれも正法を本として國家を治むべきことを敎へられたるものである。涅槃經の中には、むかし覺德比丘といふ人が正法を世に弘めて多くの者の迫害にあつた時に、有德王といふ名主が之を保護して戰つたことが記されてある。されば日蓮上人は自身の理想を述べて、

戒壇とは王法佛法に冥し佛法王法に合して、王臣一同に本門の三大秘密の法を持ちて、有德王覺德比丘の其乃往を末法濁惡の未來に移さん時、敕宣並に御敎書を申し下して、靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か。時を待つ可きのみ。——三大秘法禀承事

といつて居る。斯くして濁惡の世が淨められて行くべきである。

日蓮上人が『時を待つべきのみ』といつたのには深い意味がある。前にもいふやうに上人は末法の世に於ける法華經の流布に魁するといふ精神で奮起したのであるから此經が後には必ず此國中に遍く弘まるといふ確信をもつて居る。此經が遍く弘まる時が來れば、政治上にも經濟上にも其他社會萬般の事に大なる變化が來なければならぬ。何となれば此經の中に說かれたる敎は現世を夢幻の如くに見て來世の成佛を期せよといふのでなく、現世に於て菩薩の道を行せよといふのであるから、此經を信ずる者は必ず各自の業に全力を注ぐべきである。其時に至つて佛法と王法との冥合が事實となつて現はれ、釋尊が此經を說かれた目的もはじめて達せらるゝであらう。又此の法華經を弘むるために力を盡した人々の苦心も其時に至つて初めて酬ゐらるゝであらう。但し天台傳敎の如き人々と日蓮上人とは、其の法華經を弘むる道に於て異る所がある。

彼の二師の如きは主として法華經の敎理を明にし、その最勝の經たる所以を示すことに力を用ゐたのである。日蓮上人に至つては其の深遠なる敎理を日常の生活の上に實現し、一歩一歩と佛の境界に近づき行くべき道を示すのに全力を注いだのである。彼の二師は理論的であるが、日蓮上人は實行的である。

我等が居住して一乘を修行せん處はいづれの處にても候へ、常寂光の都たるべし。

我等が弟子檀那とならん人は一歩を行かずして天竺の靈山を見、本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふ事うれしとも申すばかりなし。——最蓮房御返事

といふやうに、現實の世の中と佛の住みたまふ常寂光土と懸隔したものと見ずに、直ちに吾々の眼の前に佛の國を建設することに全力を注がうといふのが上人の主張である。

彼の天台大師は一念三千の敎理を立て、これが天台宗の方では最も肝要なことになつて居る。一念三千といふことを一言でいつて見れば、地界獄や餓鬼界に墮ちた者にも佛となるべき性質は具はつてゐる。又佛菩薩といへども初めから佛菩薩ではなく、

地獄界へも餓鬼界へも墮つべき性質を具へて居たのである。吾々凡夫の心の中には、上は佛界から下は地獄界の何れにも入るべき性質が皆存在して居る。若し誤つた道に入つて改むることを知らぬものは、永く佛菩薩の境界と懸け隔つてしまふのであるが、幸にして正しい敎によつて導かるゝならば、たとへ現在に於て如何に罪を重ねて居やうとも次第にその汚れたる境界を脱して佛にも菩薩にも近づいて行くことが出來るわけである。此理を委しく示したのが所謂一念三千の說である。凡夫の行ひの迷ひ切つた有樣を見れば、佛性の具はつて居ることなどは信ぜられぬやうであるが、深く之を究むる時には誰にも佛性の具はれることを知るべきである。彼の不輕菩薩が一切の人を禮拜したといふも、深い意義のあることである。實に日蓮上人が

不輕菩薩は所見の人に於て佛身を見る。悉達太子は人界より佛身を成す。此等の現證を以て之を信ずべきなり。……天台大師此經文を承けて云く、若し衆生に佛の知見無くんば何ぞ開を論ずる所あらん。當に知るべし佛の知見、衆生に蘊在することを云々。——觀心本尊鈔

と說いた通り、吾々はたとへ現在に於て凡夫であつても、決して自ら輕んじ自ら侮るべきものではない。

斯く天台大師は一念三千の理を說いて、法華經の文の底に秘められたる深い意義を發揮したる點に於て非常なる功勞がある。然るに日蓮上人は之を理論として敎へたのみで無く、直ちに吾々の日常の生活の間に於て、吾々に具有したる佛性を開發して行くべき道を立て、その修行を吾々に勸めたのである。天台の『理』に對して、日蓮上人の主とする所を『事』といふ、事とは即ち實踐窮行である。

一念三千の觀法に二あり、一には理、二には事なり。天台傳敎等の御時には理なり。今は事なり。觀念すでに勝る故に大難又色まさる。彼は迹門の一念三千、此は本門の一念三千なり。天地はるかに殊なり。——治病大小權實違目

といふは實によく上人自身の立場を明にしたものである。上人が有らゆる艱苦を凌いで法華經を弘め、常に一切衆生を正しい道に導き入れやうと心を碎いてゐるのは、即ち其の心に具はつたる佛性を開發する所以であつて、即ち之をこそ一念三千の敎理の

實現と稱すべきものである。是れ實に法華經と吾身とが一致したる所である。

此御本尊は全く餘處に求むる事なかれ、只我等衆生の法華經を持ち、南無妙法蓮華經と唱ふる胸中の肉團におはしますなり。——日女御前御返事

といふは上人が實踐躬行して體得したる所を語るものである。

但し彼の天台傳敎の諸師が日蓮上人の如くに難を冒して活動をしなかつたのは、難を冒すだけの確乎たる信念が無かつたといふわけでは無い。其時が未だ到來しなかつたからである。彼の諸師の時にはたとへ法華經を說いても、さまで大なる危難には値はなかつた。それだけに又法華經の弘まる力も充分ではなかつた。日蓮上人に至つては末法の世に出て有らゆる危難を冒して此經を弘めたのであるから、此經の弘まるために永遠の基礎が固まつたのである。彼の諸師の努力は實に日蓮上人の働きの準備をなしたものと稱するも可なりである。されば上人は天台傳敎諸師の努力に對して深く感謝すると共に、自らその後を受けて末法の世に出で法華經の行者として世に立つことの悅びを幾度も語つてゐる。

正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか。是はひとへに日蓮が智のかしこきにはあらず、時の然らしむるのみ。――報恩鈔

といふが如きは其の一例である。或はまた

日蓮は世間には日本第一の貧者なれども、佛法を以て論ずれば一閻浮提第一の富者なり。是れ時の然らしむる故なりと思へば喜び身に餘り、感涙押へ難く教主釋尊の御恩報じ奉り難し。――四菩薩造立鈔

といふ語もある。斯る感謝の念に充ちて居たればこそ、有らゆる艱苦にも堪へ得られたのである。

此經の後に必ず全世界に流布すべきことは佛の豫言せられた所であるから、固より誤りのあらう筈もない。しかし物事には順序がある、未だ一國内にも流布せぬものが直ちに全世界に弘まらう理はない。全世界に弘まるには、其の流布の中心たる所の國がなければならぬ。其の中心となる國が日本國でなければならぬといふ事を、日蓮上人は確信して居たのである。火は乾けるにつき水は濕へるに流ると、古語にもいつてある。如何に貴い教でも、其の緣のある國でなければ容易に弘まるものでない。最勝の經たる法華經が世界に流布する中心たるべき國は、また最勝の國でなければならぬ。日蓮上人は屢々日本國を罵つて、此國は必ず滅亡するであらうといひ、或は善神が皆此國を棄て去つたといひ、或は外國から攻められるのは天の罰であるともいつて居る。しかし是は上人當時の社會狀態が墮落の極に在つたのを見て深く之を憂ひ、國民を覺醒せしめんが爲に、特に語を勵まして呵責叱咤したのである。其の語の劇しいのは其の國を愛する念の深いことを證するものである。涅槃教の中に、

慈無くして詐り親むは是れ彼が怨なり。……彼が爲に惡を除くは即ち彼が親なり。

とあるのはまことに善い訓戒である。徒に當世に迎合し、或は勢力のある人に阿附し、宛ら愛國者の如くに裝ふのは實に國を蠹毒する者である。當世の弊害を指摘して苦言を重ぬるものが眞の愛國者である。

日本國には日蓮一人ばかりこそ世間出世間、正直の者にては候へ。――法門可被申樣之事

といふは其の僞らざる告白と見るべきものである。

其の當時は墮落の極に在つたけれども、本來は世界に冠絕したる國である。國民が覺醒して正しい敎に歸依しさへすれば、世界の何れの國にもまして榮え行くべき國である。上人は佛法のみならず、汎く和漢の學を究めて、吾が國のいかなる國體を有するかを極めて能く知つて居る。さればこそ

（我日本國は一閻浮提の內月氏漢土にもすぐれ、八萬の國にも超えたる國ぞかし。）

——神國王書

と斷言したのである。佛法は印度から支那を經て吾國へ傳はつたものである故に、佛法を信ずる者の中には彼を尊んで我を卑み、自ら東海の邊國と思つてゐた者も少くなかつた。然るに日蓮上人は此國の天竺よりも支那よりも勝れる國なることを信じ、前にも擧げたやうに『一閻浮提第一の本尊此國に立つべし』といひ、或は『日本の佛法の月氏へかへるべき瑞相なり』ともいつた。又幕府へ提出した書の中に、

夫れ此國は神國なり、神は非禮を稟けたまはず。——與北條時宗書

とあるに依つても、其の平生信ずる所の如何は推量が出來る。

殊に此國と法華經との間に深い緣の存することは上人の幾度も說いた所である。法華經の翻譯者たる羅什三藏は印度に留學中に須利耶蘇摩に從つて佛法を研究したのであるが、其時に須利耶蘇摩は法華經の原本を之に與へて、慇懃に

佛日西に入り遺耀將に東北に及ばんとす。茲の典は東北に緣あり、汝愼んで傳弘せよ。

と依囑したといふことが羅什の高弟たる僧肇の翻經後記の中に記されてある。日蓮上人は此文を讀んでの感想を述べて、

予此の記文を拜見して兩眼瀧の如く一身悅びを遍くす。此の經典は東北に緣有りと云々。西天の月支國は未申の方、東方の日本國は丑寅の方なり。天竺に於て東北に緣有りとは豈に日本國にあらずや。遵式の筆に云く、始め西より傳ふ、猶ほ月の生ずるが如く、今復た東より返る、猶ほ日の昇るが如しと云々。正像二千年には西より東に流る、暮月の西空より始まるが如く、末法五百年には東より西に入る、朝日

の東天より出るに似たり。――曾谷入道許御書

といつて居る。羅什は東北に緣ありといふを支那と解して、支那に渡つて法華經を弘めたのであらう。其後又天台大師の如き人が出て法華經の最勝の經たることは明になつた。しかし支那は革命のある國であつて、代のかはる度に凡ての事が非常なる變動を來すから、甚だ頼もしからぬ國といはなければならぬ。

日本は萬世一系の皇室を上に戴き、永久に革命などの無い國である。いかに變亂が重つても、その中を貫いて永久にかはらぬ所が存して居る。殊に聖德太子以來大乘の佛敎に深い緣がある。印度にも廢れ、支那にも充分に弘まらぬ法華經が此國に弘まつて、はじめて廣宣流布の新機運が開かるべきである。傳敎大師が

正像稍過ぎ己りて末法太だ近きにあり。

といつたのは、自分は末法の世に此經の弘まるべき基礎を作るために努力するのであるとの意を語つたものである。又更に此經の遍く世に弘まるべき時を考へて、

代を語れば像の終りにして末の初め、地を尋ぬれば唐の東にして羯の西、人を原ぬれば五濁の生鬪諍の時なり。

といつたのは、像法の世もすぎて末法の世の鬪諍堅固の時に、法華經が必ず此の日本國に流布すべきことを確信したるが爲である。彼の宋の遵式は支那に弘まつた佛法がやがて印度に立返つて傳はるべきものと考へて、之を東の空に出た日の光が西を照すのに譬へたのであるが、その譬へは我が日本國に移して初めて適切なるものではないか。

日蓮上人は佛弟子として、佛の眞實の敎たる法華經の疾く全世界に流布せんことを熱望して居た。又上人は日本國民の一人として、此國が安穩に治まつて四民皆其の堵に安んずる日の一日も早く來らんことを熱望して居た。而して法華經が全世界に流布するに當つて、其の流布の中國となるべき國は吾が日本より外にないことを知つた。又此の日本國を安穩に治めんが爲には、法華經を以て國民の信仰を統一するのに如くはなしといふことを知つた。而して上人自身は此國に生を享けて、此經を弘めんが爲に起つたのである。是ほどの光榮、是ほどの滿足のあらう筈はない。

當世日本國に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華經にたてまつる、名をば後代に留むべし。――開目鈔

とは佐渡に配流中の語であるが、また其の平生の志を述べたものであらう。

此の如くに日蓮上人の生涯は、法華經の弘通に捧げられたるものである。上人は法華經を研究し若くは說明することを以て滿足せず、經の中に敎へられたる所を實踐躬行し、身を以て衆を率ゐたのである。自ら稱して『法華經の行者』といつたのは偶然でない。上人は佐渡へ流される前夜、獄中に囚へられてゐる弟子日朗の身の上を思ひやり、之に慰藉の書面を與へた中に、

法華經を餘人の讀み候は、口ばかり言ばかりは讀めども心は讀まず、心は讀めども身に讀まず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ。――土龍御書

とある。心に信ずるを心讀といひ、身に行ふを色讀といふ。心讀色讀の人にして初めて眞に法華經を讀む者といふべきである。上人が心讀色讀の人であつたが故に、其の感化を受けた弟子にも此の如き立派な人が出たのである。

以上に叙述した所は上人の人物性行の一斑をも悉すことは出來ぬけれども、是だけの事を心に置いて立正安國論を讀むならば、其の大意を捉ふるに於て誤りなきを得るであらうと思ふ。此論の書かれたのは前にもいふやうに文應元年であるが、正嘉元年の大地震の時から此論を書くことを思ひ立つたといふ事である。上人は建長五年の五月から鎌倉の松葉ヶ谷に庵を結んで居たのであるが、正嘉元年はそれより三年の後である。此間に於て法華經を弘むるために力を盡すことは一日も怠らなかつた。まだ多くの歸依者を得る運びには至らなかつたけれども、最も賴もしい弟子の數人を得たことは、上人に取つて大なる悅びであつたに違ひない。即ち六老僧として世に知られた門下の高足の中で、日昭と日朗の二人、檀那の中で殊に有力なる富木常忍、四條金吾、進士太郎、工藤吉隆、池上宗仲等は皆此間に歸依したものである。

日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給ひぬ。昔と今と一同なり。各々は日蓮が檀那なり爭でか佛にならせ給はざるべき。――乙御前御消息

といふは此の如き人々に對してこそ、最も適切なる語といふべきである。

正嘉元年には旱魃があつた上に、大地震が屢々あつた。日蓮上人は前年から引續いての天災地變について深く心を痛めて居た上に、今又此の大災害を見て、もはや如何しても棄て置くことが出來ぬといふ心になつた。國民の思想が混亂して正しい敎が泯び果つる時には、之を覺醒せしめんが爲に種々の天災地變が現はれるといふことは、諸經に見えたる所である。是は吾々に與へらるゝ天の警告である故に、若し吾々が之によつて覺醒して正しい信仰に歸し、一國の風俗習慣等が盡く改まるならば、これが永遠の繁榮の元となり、禍を轉じて福と爲すことを得べきである。日蓮上人は此の機會に於て日本國民に大なる警告を與へ、立正安國の大義を知らしめ、國家百年の大計を樹てしめんが爲に全力を注がうと決心した。しかしながら是は畢生の大事業であるから、今一度一切の經論を讀みかへして、自分の考への誤りの無いことを確めやうと思ひ立つた。眞に用意周到といふべきである。

それで正嘉二年の正月から駿州岩本の實相寺の經藏に入つて一切經を覆讀した。而して前年からの考への誤りの無いことを明にしたので、文應元年に至り立正安國論を

完成したのである。此間にも正嘉二年の大風洪水、翌正元元年の日蝕饑饉、文應元年の疫病等、災害は絶え間無く起つた。立正安國論は充分なる用意を以て書かれたものであるが、更に大學三郎に字句の修正を賴み、文應元年七月十六日を以て之を最明寺時賴に献じた。即ち上人三十九歳の秋である。此論は諸經の明文によつて、正法の行はれぬ國には必ず天災地變の集り來るべきことを述べ、日本國民に最も強い警告を與へたものである。諸經に記されたる所によれば、其の天災地變の數は多くあるのであるが、正嘉から文應の頃までには未だ其の全部が實現して居ないのである。即ち他國から此國を攻めらるゝといふ事と、國に內亂が起るといふ事はまだ事實となつては現はれぬのである。されば若し日本國民が今までの天災地變によつて覺醒せず、なほ其の誤れる信仰を改めぬならば、遠からぬ內に彼の二つの災害も必ず現はれて來るであらう。是は日蓮上人の私意によつて推斷したことで無く、經文に基いての豫言である。されば『此詞此言信ずべく崇むべし』とまでいつたのである。

斯くまで誠心を籠めての警告にも、時賴等は耳を傾けなかつた。それのみならず此

年の八月末には念佛の信者等が徒黨を組み、夜に乘じて上人の庵室を襲うた。幸にも上人は危害を免れたけれども、庵室は燒かれてしまつた。斯る暴擧に對しても何等の制裁は加へられず、却て彼等の讒言が功を奏して翌弘長元年五月、上人は伊豆へ配流せらるゝ事となつた。上人が此事を論じて、

先づ大地震に付て去ぬる正嘉元年に書を一卷注したりしを、故最明寺の入道殿に奉る。御尋ねもなく御用ゐもなかりしかば、國主の御用ゐなき法師なれば、あやまちても科あらじとや思ひけん、念佛者並に檀那等又さるべき人々も同意したるとぞ聞えし、夜中に日蓮が小庵に數千人押寄せて殺害せんとせしかども、いかんがしたりけん其夜の害もまぬかれぬ。されども心を合せたる事なれば、寄せたる者も科なくて、大事の政道を破る日蓮が生きたる不思議なりとて、伊豆國へ流しぬ。されば人のあまりに憎きには、我が亡ぶべき科をもかへりみざる歟。御式目をも破らるゝ歟。御起請文を見るに、梵釋四天天照太神正八幡等を書きのせ奉る。余存外の法門を申さば、子細を辨へられずば日本國の御歸依の僧等に召し合せられて、其になを事ゆ

かずば漢土月氏までも尋ねらるべし。其に叶はずば、子細ありなんとて且く待たるべし。子細も辨へぬ人々が身のほろぶべきをさしおきて、大事の起請を破らるゝ事心得られず。——下山御消息

といつたのは誠に公明正大の言である。式目とは泰時が執權になつた時に作つた貞永式目の事で、此中には賞罰について種々の規定が立てられてある。それに背いて賞罰が全く當を失つたのを責めたのである。又日蓮上人の言が不當と思ふならば諸宗の僧と對論せしめて之を決すべきであるのに、たゞ政權に結びついて上人に迫害を加へたのは當を得ぬ仕方である。

されども北條氏も久しからずして其の不當の處置を悔い、弘長三年の春上人を赦して鎌倉に歸らしめた。其後も天變は屢々あつたが、文永五年、上人四十七歳の正月に至り、立正安國論の中の豫言が事實となつて現はれた。時に元の世祖、即ち忽必烈は支那を統一し又歐洲諸國を征服したる餘勢を以て吾が日本國をも併呑せんとし、高麗王禎の臣下なる潘阜をして書を吾國に致さしめた。其の大意は若し日本が之に服屬し

なければ大兵を遣して討ち滅すといふのである。是に於て日蓮上人は八月二十一日を以て前年立正安國論を取次いだ宿屋入道に書を與へて、前年の警告が適中した以上は大に覺醒しなければなるまいと告げ、更に十月十一日を以て執權北條時宗及び宿屋入道に書を與へて、日蓮と諸宗の僧とを對決せしめ、此の大難に對する根本的の計畫を立てんことを求めた。此と同時に鎌倉中の重なる寺々に書を遣はして、幕府へ對決のことを申出したことを告げ、諸宗の人々も對決の用意をせよと申し送つた。實に堂々たる宣言である。此等の書面が十一通あるので、後世に『十一通御書』として知られてゐる。

但し前々からの例に照して見れば、幕府に於ては至誠より出たる諫言を用ゐず、却て迫害を加へるやうな事があるかも圖られぬ。それは固より恐るゝに足らぬことで、正法を弘むるが爲に危難にあふならば、後に大なる報を得べきである。されば上人は十一通の書を送ると共に、弟子檀那等を戒めて結束を固うせしめた。その書の文面は、

大蒙古國の簡牒到來に就て、十一通の書狀を以て方々へ申せしめ候。定めて日蓮が

弟子檀那死罪流罪一定ならんのみ、少しも之に驚くこと莫れ、方々への强言申すに及ばず、是れ併しながら强毒の故なり。日蓮庶幾せしむる所に候。各々用心ある可し、少しも妻子眷屬を憶ふこと莫れ、權威を恐るゝこと莫れ、今度生死の縛を切て佛果を遂げしめ給へ。……十一通の狀を書きて諫訴せしめ候ひ畢んぬ。定めて子細ある可し。日蓮が所に來て書狀等披見せしめ給へ。

といふのである。併し此時には格別の迫害もなく、此より三年の後なる文永八年（上人五十歳）の秋に至り、又もや諸宗の徒の讒言によつて龍の口の法難あり、尋いで佐渡へ流され、同十一年（五十三歳）の春に至り赦されて鎌倉へ歸つたのである。

元の壓迫は愈々その力を增し、文永六年には直接の使と高麗からの使が來た。同八年にも十年にも使が來たが、同十一年には數萬の兵が壹岐對馬に來寇し、殘虐の限りを働いた。之によつて吾國が大に恐れを爲したであらうとの推測から、翌建治元年に至り又々使が來て降伏を勸めたが、執權時宗はその使者を斬らしめた。此より數年を隔て大擧して來寇したのが有名なる弘安四年の役で、此時の敵兵は二十五萬と稱した

是は所謂佗國侵逼難の實現である。

又此と相前後して自界叛逆難も實現した。前年北條義時が安藤五郎といふ者を奥州津輕に遣はし蝦夷に備へて置いたが、蝦夷の者共が集つて之を殺したのは、彼の蒙古の最初の使が來たと同年、文永五年のことである。其後日蓮上人が佐渡在島中の文永九年二月には執權北條時宗の兄時輔が京都の六波羅で兵を擧げ、鎌倉でも之と相應じて兵を起すものがあつて、非常なる擾亂であつた。斯くて立正安國論の豫言は盡く適中したのである。斯く一々の豫言が適中したにも拘はらず、北條氏はなほ法華經に歸依するに至らなかつたのは遺憾のことであるが、之によつて覺醒せられた者の多かつたことは想像に難くない。日蓮上人の門下の人々が一層信心を固うしたのは勿論のこと、其他の人達と雖も此等の事實を上人の今まで言つた所と思ひ合せ、心を法華經に寄するやうになつたのも、決して少くはなかつた樣である。上人が身延へ籠つて後に『今は謗ぜし人々も唱へ給ふらん』といつたのは（妙密上人への消息で、前に引用した。）此間の變化を語るものである。

されば立正安國論は上人自身にいつたやうに『徵ある文』である。上人の敎を信ずると信ぜざるとを問はず、誰も一度は讀むべきものである。其の大體の組織は、假に旅客の來訪したことを設けて端を發し、凡て九段の問答を重ねて後、客が心服して歸つたことを以て終結としてある。文體は漢文であるが、何分にも其頃のことであるから『其上一夢の靈應を蒙り』とか、『此事信じ難し、如何か意を得ん』とかいふやうな和文習氣の句も交つてゐて、あまり名文とは稱せられぬものである。上人の文として最も推賞すべきは開目鈔のやうな假字交りの文で、少しも推敲を加へず筆に任せて書き下した處に、如何なる詩人も學ぶことの出來ぬやうな神韻と氣力とがある。立正安國論の如きは其の文字を批評することをやめて、專ら其の內容を究むべきものである。

此論の中には主として法然上人の創めた淨土宗に對する批判が載せられてあつて、其他の宗には及んで居ないのである。然るに當時に於て勢力のあつたのは凡て四宗である。その一は法然の創めた淨土宗、その二は榮西と道元とによつて宋から傳へられた禪宗である。（日蓮上人の初めて題目を唱へたる建長五年から數へて、法然の淨土宗

を創めたのは七十八年前、榮西が臨濟の禪を傳へたのは六十二年前、道元が曹洞の禪を傳へたのは二十六年前である。)此外に平安朝の頃から傳はつて來た眞言宗もなほ勢力があつた。又律宗は久しく廢れてゐたが、極樂寺の良觀が之を復興したのでまた盛になつた。其頃吾國には凡て十宗あつたのであるが、他の六宗は宗敎としての勢力はなかつたのである。而して此等の四宗は何れも法華經を輕んじて、各その敎義を主張するのであるが、その最も後に出た日蓮上人が法華經を世に弘めるためには、是非とも法華經を排斥する諸宗に對して批判を加へ、その誤れる所以を明にしなければならぬ。譬へば舊い建物を除かなければ、新しい建物を建つべき餘地がないやうなものである。されば上人の折伏は此等四宗に向つて加へられたので、

斯る時刻に日蓮佛敕を蒙りて此土に生れけるこそ時の不祥なれ。法王の宣旨背き難ければ、經文に任せて權實二敎の軍を起し……念佛眞言禪律等の八宗十宗の敵人を責むるに。或は逃げ或は退き、或は生取られし者は我が弟子となる。或は攻め返し攻め落しすれども、敵は多勢なり、法王の一人は無勢なり、今に至りて軍やむ事なし。――如說修行鈔

とは蓋し其の實況である。

しかし其の當時に於て最も多數の人の歸依を得たものは淨土宗である。それ故に此の安國論に於ては之に對して嚴しい批判を加へたのである。他の宗を皆正しいといふのではなく、其中の最も勢力あり、最も多くの歸依者を有する一宗を代表的に取つて、之に批判を加へ、多數の人の蒙を啓かうとの意である。若し之によつて誤つたる信仰の上に立つことの危さを感じ、然らば如何なる敎によつて今後の方針を定めやうかといふ疑問を眞面目に起すやうになれば、法華經の敎がはじめて之に對して與へらるべき運びとなるのである。立正安國論の中に法華經の內容をも說明せず、又日蓮上人自身の敎義をも語らず、たゞ法華經の行者が世に對し人に對する態度をのみ示したのは深い心のあつての事である。敎は人によつて弘まるものである。法華經の行者に近づく人は、自ら其の感化を受け、自ら其の敎を學び知るやうになり得べきである。

若し日蓮上人が今の世に出て立正安國論を書くならば、政府の當局者に提出すると

いふやうな事はせぬであらう。その當時は武家の向背によつて一般國民の向背が定まつたのであるから、武家を覺醒することにのみ意を用ゐたのであるが、今日では時勢が全く變つて居る。今日は政治界といはず、實業界といはず、學者といはず、武人といはず、各方面の人々の力が集つて此國が保たれて行くのである。各方面の人々は皆此國の運命を定むべき責任を分擔して居るのである。されば今日の立正安國論は國民の前に公開せらるべきである。上人當時の外患は蒙古一國であつたが、今は世界の列國を相手として烈しい競爭を續くべき時である。上人當時の內亂は一二の人の謀叛に過ぎなかつたが、今は思想界の混亂その極に達せる時である。今日の內憂外患は六百年のむかしに數百倍するといふも決して過言ではあるまい。此時に當つて立正安國の大主張を提げて起る人が現はれ來ることは、時勢の要求する所ではあるまいか。

時代はまことに行き詰つてゐる、誰も現狀に滿足してゐる者はない。『何とかならなければならぬ』と誰もいつて居る。『誰か偉大なる人物が現はれて新しい機運を作つてくれぬか』といふ要求は社會の各方面にあるやうである。しかし果して誰が斯る要求に應じて起ち、斯る時代に新なる一轉機を作るであらうか。斯る偉大なる人物の現はれて來るのを待つて居る間に、お互ひの生活は益々行き詰つてしまふではないか。お互ひに左樣な無責任な考へをやめなければならぬ。個人と個人とが集つて社會を作つて居るのである。個人以外に別に社會が存在するわけではない。今の世の中が惡いといふのは、今の世の中の一人一人が惡いからである。その責は各自に在る。『是ではならぬ』と氣のついた人は、先づ自ら今までの行ひを改めてかゝるべきである。『誰か現はれて……』などゝいつて居ないで、自ら率先して健實なる生活に入り、身を以て人を率ゐなければならぬ。各自が菩薩の道を行ずべき覺悟をもつべき時である。各自が此國の運命を左右するだけの覺悟と抱負とを持たなければならぬ時である。

日蓮上人自身は『何れの宗の祖師にもあらず末葉にもあらず』といつて居るけれども、久しく一宗一派の祖師として仰がれて來た爲に、種々なる誤解を受けて居る。今日遽かに日蓮上人の敎義を信ずることを凡ての人に望むのは困難であらう。しかし立正安國論を書いた上人の意氣精神は何人も之を學ぶに躊躇せぬ所であらうと信ずる。

立正安國論

旅客來嘆曰。自二近年一至二近日一。天變地夭。飢饉疫癘。遍滿二天下一。廣迸二地上一。牛馬斃レ巷。骸骨充レ路。招レ死之輩。既超二大半一。不レ悲之族。敢無二一人一。然間或專二利劍即是之文一。唱二西土教主之名一。或恃二衆病悉除之願一。誦二東方如來之經一。或仰二病即消滅不老不死之詞一。崇二法華眞實之妙文一。或信二七難即滅七福即生之句一。調二百座百講之儀一。有因二秘密眞言之教一。灑二五瓶之水一。有全二坐禪入定之儀一。澄二空觀之月一。若書二七鬼神之號一。而押二千門一。若圖二五大力之形一。而懸二萬戸一。若拜二天神地祇一。而企二四角四堺之祭祀一。若哀二萬民百姓一。而行二國主國宰之德政一。雖レ然唯二摧肝膽一。彌逼二飢疫一。乞客滋レ目。死人滿レ眼。臥レ屍爲レ觀。並レ尸作レ橋。觀夫二離合一レ壁。五緯連レ珠。三寶在レ世。百王未レ窮。此世早衰。其法何廢。是依二何禍一。是由二何誤一矣。

旅客來り嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天變地夭、飢饉疫癘遍く天下に充ち、廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり、死を招くの輩既に大半に超え

悲まざるの族敢て一人も無し。然る間或は利劍即是の文を專にして西土教主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を恃みて東方如來の經を誦し、或は病即消滅不老不死の詞を仰ぎて法華眞實の妙文を崇め、或は七難即滅七福即生の句を信じて百座百講の儀を調へ、有は秘密眞言の教に因つて五瓶の水を灑ぎ、有は坐禪入定の儀を全うして空觀の月を澄し、若は七鬼神の號を書して千門に押し、若は五大力の形を圖して萬戸に懸け、若は天神地祇を拜して四角四堺の祭祀を企て、若は萬民百姓を哀みて國主國宰の德政を行ふ。然りと雖も唯だ肝膽を摧くのみにして彌々飢疫に逼る。乞客目に溢れ死人眼に充てり。屍を臥して觀と爲し尸を並べて橋と作す、觀れば夫れ二離は壁を合せ五緯は珠を連ぬ。三寶世に在し、百王未だ窮まらず。此世早く衰へ其法何ぞ廢れたる。是れ何なる禍に依り、是れ何なる誤に由るや。

○近年より近日に至るまで　正嘉元年八月の大地震から、文應元年まで四年越しに、種々の天災があつた。○利劍即是の文　唐の善導の『般舟讃』の中の語に『利劍即ち是れ彌陀の號、一聲の稱念に罪皆除く』とある。彌陀の名を唱ふれば、利劍の物

を斷つが如くに、凡ての罪を除くといふのである。○西土教主　西方極樂淨土の教主たる彌陀佛のこと。○衆病悉除の願　藥師如來がまだ菩薩であつた時に他日佛となつた時には斯くして衆生を救はうといふ願を立てられたのが所謂十二大願で、その第七願に『若し諸の有情、貧窮困苦にして歸趣あること無く、衆病に逼られて藥無く醫無きも、暫く我が名を聞かば衆病消散して眷屬增々盛に、資財乏しきこと無く身心安樂にして乃ち菩提に至らん』とある。されば藥師如來を念ずれば凡ての病が除かれるといふのである。○東方如來の經　即ち藥師經のことである。藥師如來は東方淨瑠璃國の教主である。○病即消滅不老不死の詞　法華經の藥王品に『此經は則ち爲れ閻浮提の人の病の良藥なり。若し人病有らんに、是經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん』とある。○法華眞實の妙文　法華經以前の諸經は皆釋尊の方便の說であつて、法華經に至り初めて眞實を說き顯はされたのである。○七難即滅七福即生　仁王經の中に此經を受持する功德を說いて『七難即ち滅して七福即ち生じ、萬姓安樂にして帝王歡喜せん』とある。七難の事は下にある。七難の無くなつたのが即ち七福である。○百座百講の儀　朝廷の御催しで仁王經を講ぜしむるので、一百の高座を設け、一百人の僧をして此經を講ぜしむる定めである之を仁王會といふ。○眞言秘密の教　眞言宗は大日經を依經とするのであるが、大日如來の說かれた所は釋迦如來の說かれた所よりも更に立勝つて深遠なるものであるといふので、之を秘密の教と稱するのである。○五瓶の水　眞言の修法に、壇上に五つの瓶を置き水を盛り花を挿む定めである。○坐禪入定の儀　坐禪は心を靜めて惑を打拂ひ眞理を觀ずるためであるが、斯くして心が決定して動かぬやうになつたのが即ち入定である。○空觀の月　雲が散つて月が明になるやうに、有らゆる惑を去れば吾が本來の性質が分つて來るのである。空觀とは人生の有らゆる差別を超越して、絕對の眞理を觀ずることである。○七鬼神の號　疫病を却くるために夢多難鬼等の七鬼神を念ずべきことが『却瘟神呪經』に出て居る。○五大力　金剛吼菩薩その他の五菩薩が佛勅を奉じて、正法を以て國を治むる王と其の人民とを護るといふことが仁王經に出て居る。これを五大力菩薩といふ。○觀と爲し　觀といふは物

見の臺のことである。死屍が多くて之を積めば物見臺も出來る程である。○二離離といふは天に懸つて居ることで、二離とは即ち日月をいふのである。○五緯　緯とは動く星のことで、動かぬ星は經といふ。其の動く星の中の最も大なるもの、歳星と熒惑星と太白星と辰星と鎮星とを五緯といふ。○三寶世に在し　佛法僧を三寶といふ。三寶の世に在すといふは即ち佛敎の信奉せられて居ることである。○百王未だ窮まらず　文應元年は龜山天皇の御宇で、即ち第九十代の天皇である。帝王百代にして氣運が一變するといふは俗說で採るに足らぬ。殊に本邦は天壤と共に窮まり無かるべき天皇を戴いてゐる。日蓮上人も無論此事は信じて居たのである。此處はたゞ旅客の言として俗說を採り入れたまでの事と視て宜い、深く穿鑿するには及ばぬ。

先づ全篇の發端として客の言を假り設けて、近年の天災地變頻りなる有樣を述べ、此等の禍をはらふ爲に催された祈禱が一切効のないのは何故であるかとの問題を揭げ出したのである。元來佛の貴い敎を信じて現世に福を得やうといふ思想は、いつの世にも絶えずあるのであるが、佛の敎が貴いのは之によつて吾々の心の惑を除き去ることが出來るからである。心が元の儘であれば、たとへ福が與へられたところが、其の福は久しからずして又禍の種と變るであらう。法華經の譬諭品に佛の說法のさまを述べてある中に、

若し衆生有りて苦の本を知らず、深く苦の因に著して暫くも捨ること能はざる、是等の爲の故に方便して道を說きたまふ。諸苦の所因は貪欲これ本なり。若し貪欲を滅すれば依止する所なし。

とあるが、全く此の通りである。佛は名利の念を絶ち、執着を去ることが即ち苦を除く道であると敎へて居らるゝのである。然るに名利の念に驅られて他を顧みず、自己の小い欲望を滿足さすことのみを目的として佛の加護を祈つたとて、何の効驗のあらう筈はない。彼の平安朝の盛時よりして佛敎が非常に盛になつたのは結構なことのやうであるが、深く考へて見れば少しも悅ぶには足らぬ事である。堂塔伽藍が多く立ち並ぶのを見ると、いかにも佛敎が隆盛になつたやうに見えるが、その堂塔伽藍は如何

なる人の布施によつて作られたかをよく考へて見なければならぬ。若し自己一身の欲望を達したいとか、一家一門の繁榮を謀りたいとかいふ目的のために寺や塔を建て、心は元のまゝで煩惱に充されて居ながら利益の現はれるのを待つて居るならば、此人の爲したことは少しも善根とはならぬのである。隨て其の建てたる寺や塔は少しも佛の御心には叶はぬものである。平安朝以來の佛敎は大體斯ういふ間違つた心をもつた人々の力によつて繁昌して來たのである。さればこそ如何に祈禱を盛に行つても其の効果は無かつた。藤原氏といひ平氏といひ、若くは源氏といひ、何れも神佛を崇重し、或は寺を建て或は宮を作つて信心怠りなき有樣であつた。然るに藤原氏は忽ちにして勢力を失ひ、平氏は二代にして源氏に亡ぼされ、源氏は三代にして北條氏に代られた。加之天災地變は殆んど年毎に起り、庶民の困苦は一通りではなかつた。これは汚れた心を以ていかに祈つても、その効驗の無いといふ確かなる證據である。最も大切なのは心を立て直すことである。心を正しくするには正しい敎に依らなければならぬ。これ立正安國論の必要已むべからざる所以である。以下順を追うて此の意義が闡明せら

れて行くのである。

主人曰。獨愁二此事一。憤二悱胸臆一。客來共嘆。屢致二談話一。夫出家而入レ道者。依レ法而期レ佛也。而今神術不レ協。佛威無レ驗。具觀二當世之體一。愚發二後生之疑一。然則仰二圓覆一而呑レ恨。俯二方載一而深レ慮。倩傾二微管一。聊披二經文一。世皆背レ正。人悉歸レ惡。故善神捨レ國而相去。聖人辭レ所而不レ還。是以魔來鬼來。災起難起。不レ可レ不レ言。不レ可レ不レ恐。

主人の曰く。獨り此事を愁へて胸臆に憤悱す。客來りて共に嘆く、屢々談話を致さん。夫れ出家して道に入る者は法に依りて、佛を期するなり。而るに今神術も協はず、佛威も驗なし。具に當世の體を觀るに、愚にして後生の疑を發す。然れば則ち圓覆を仰ぎて恨を呑み、方載に俯して慮を深うす。倩々微管を傾け、聊か經文を披きたるに、世皆正に背き人悉く惡に歸す。故に善神國を捨て相去り、聖人所を辭して還らず。是を以て魔來り鬼來り、災起り難起る。言はずんばあるべからず、恐れずんばあるべからず。

○法に依りて佛を期す　人々皆佛性を具へてゐるから、佛の遺されたる法に依つて修行を積むならば、後には必ず佛となることも出來るのである。○後生の疑　此世に於て佛の力を頼むことが出來ぬならば、來世も覺束ないと思ふのである。○圓覆天は圓くして凡ての物を覆ふ。圓覆とは即ち天のことである。○方載　地は方にして物を載するものであるから、これを方載といふ。○微管を傾け　管を見て天を見ても天の一小部分しか見えぬ。それ故に自分の意見を謙遜して管見といふ。微管といふは即ち微なる管見といふ意である。○善神　國の繁榮を護る神々のことである。

○聖人　智深くして末の末までも見通すことの出來る人をいふのである。

前段の客の問に答へて災害のやまぬ理由を概括的に說き、以下說明を重ぬるに隨つて其の細目に入るのである。此處に『當世の體を見て後生の疑を發する』といふは大に注意すべき語である。いふ迄も無く佛敎に於ては、人の生命は現世に限らるゝもので無いといふことを敎ゆるのである。吾々の現世に於ける生命は五十年か六十年で盡きるけれども、來世の生命は限りなく續くのである。しかし現世の生命と來世の生命と別々のものではない、これは一貫したる唯一つの生命である。譬へば竹に幾つかの節があつても其の節と節とは續いて居て、少しも離るゝ所の無いのと同樣である。されば現世に於て人らしく生を送ることの出來ぬものが、來世に於て急に佛菩薩の如き境界に達し得られやう道理はない。又佛の大慈悲心が吾々の身を照して居るならば、何も故らに來世に入らなければ救ひの力が現はれぬと限るにも及ぶまい。佛の大慈悲心と、信ずる者の誠心とが相照すならば直ちに其時から新なる力が生れなければならぬ。若し現世に於ていかに信を凝しても何の効驗も無いならば、來世の事も甚だ心細くなるわけではないか。然らば佛の大慈悲心なるものが果して頼むに足らぬものかといふに、日蓮上人は之に答へて、『佛が頼りにならぬのではなく、信ずる者の心得が間違つて居るのである』といふ。『世皆正に背き人悉く惡に歸す』といふ有樣であつては、いかに堂塔伽藍ばかり立派に立ち並んでゐても國民が幸福にならう筈は無い。此時に當つて國民の妄見を醫すために奮起するのが、眞に佛に對して忠實なる弟子のする事である。鴨長明の方丈記に、養和年中に飢饉疫癘の續いて烈しかつたことを記し、

仁和寺に慈尊院の大藏卿隆曉法師といふ人、かくしつゝ數知らず死ぬることを悲みて、ひじりを數多語ひつゝその死首の見ゆるごとに、額に阿字を書きて緣を結ばしむるわざをなんせられける。その人數を知らんとて四五兩月が間數へたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭すべて四萬二千三百餘なんありける。

とある。四萬以上の人の額に一々阿字を書く骨折はさることながら、それは小い慈悲である。多くの僧が此の如く小い慈悲に甘んじて居るから世の中は改まらぬのである大なる慈悲より生ずる大なる折伏の力に依らなければ、根本的の救治は出來ぬ。

客曰。天下之災。國中之難。余非二獨嘆一。衆皆悲。今入二蘭室一。初承二芳詞一。神聖去辭。災難並起。出二何經一哉。聞二其證據一矣。

客の曰く、天下の災、國中の難、余獨り嘆くのみにあらず衆皆悲めり。今蘭室に入りて初めて芳詞を承るに、神聖去り辭して災難並び起ると、何れの經に出たるや、其證據を聞かん。

○蘭室に入りて　蘭のある室に入れば自ら其の香りが身に移るものである。善人の家に入りて自ら其の感化を受くることを蘭室に比するのである。○何れの經　佛弟子たるものは必ず佛說に基いて意見を定むべきであつて、敢て私見を立つべきでない。それ故に何れの經に基いた說であるかを質すのである。

主人の說に對して客が其の證據を求めたのは尤もなことである。佛は絕大の智慧を具へて居たまふが故に、後世の者はいづれも佛說に基いて其の意見を定むべきである。若し佛說に背けば邪義邪說である。但し佛の說きたまふ所は極めて高遠であるが故に、後世に其の敎を敷衍し解釋する必要を生じた。佛の直接の敎を記錄したものを名けて經といひ、之を敷衍し解釋したものを論といふ。隨て斯る論を作つた人々を論師といふのである。例へば龍樹とか天親とかいふ人々がそれである。それより後世になつて此の經や論を更に解釋したものが多くある。それを名けて釋といふ。釋をかいたり、或は經論を說き弘めた人々を稱して人師といふ。例へば羅什とか玄奘とかいふ人々がそれである。經も論も釋もそれ〴〵に貴いものであるけれども、最も大切なる根據と

しては經文の外はないのである。たとへ如何なる論師人師と雖も、佛に比べて見れば物の數ではない。もし論師人師の言と佛說とが一致せぬならば、直ちに其等の人の言を捨て佛說に歸すべきである。此點に就て日蓮上人は最も嚴格であつた。

宗々互に權を諍ふ。予此をあらそはず、但だ經に任すべし。——開目鈔

といふ態度は上人の生涯を通じて終始一貫したるものである。

主人曰。其文繁多。其證弘博。金光明經云。於二其國土一。雖レ有二此經一。未二嘗流布一。生二捨離心一。不レ樂二聽聞一。亦不二供養尊重讚歎一。見二四部衆持經之人一。亦復不レ能二尊重乃至供養一。遂令下我等及餘眷屬。無量諸天。不レ得レ聞二此甚深妙法一。背二甘露味一。失二正法流一。無二有威光及以勢力一。增二長惡趣一。損二減人天一。墜二生死河一。乖二涅槃路一。世尊。我等四王。並諸眷屬。及藥叉等。見二如レ斯事一。捨二其國土一。無二擁護心一。非二但我等捨二棄是王一。必有下無量守二護國土一。諸大善神上。皆悉捨去。既捨離已。其國當下有二種々災禍一。喪失國位上。一切人衆。皆無二善心一。唯有二繫縛殺害瞋諍一。互相讒諂。狂及二無辜一。疫病流行。彗星數出。兩日並現。薄蝕無レ恒。黑白二虹。表二不祥相一。星流地動。井內發レ聲。暴雨惡風。不レ依二時節一。常遭二飢饉一。苗實不レ成。多有二佗方怨賊一。侵二掠國內一。人民受二諸苦惱一。土地無レ有二可レ樂之處一。

主人の曰く、其文繁多にして其證弘博なり。金光明經に云く、其國土に於て此經ありと雖も、未だ嘗て流布せず。捨離の心を生じて聽聞せんことを樂はず。亦た供養し尊重し讚歎せず。四部の衆持經の人を見ても、亦た復た尊重し乃至供養することを能はず。遂に我等及び餘の眷族、無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味に背き正法の流を失ひ、威光及び勢力有ること無からしむ。惡趣を增長し、人天を損減し、生死の河に墮ちて涅槃の路に乖かん。世尊、我等四王並に諸の眷屬及び藥叉等は、斯の如き事を見て其國土を捨て擁護の心無けん。但だ我等のみ是王を捨棄するにあらず、必ず無量の國土を守護する諸大善神有らんも、皆悉く捨て去らん。既に捨離し已りなば、其國當に種々の災禍有りて國位を喪失すべし。一切の人衆皆善心無く、唯だ繫縛と殺害と瞋諍とのみ有らん。互に相讒諂し、狂げて無辜に及ばん。疫病流行し、彗星數々出で、兩日並び現じ薄蝕恒無く、黑白の二

虹不祥の相を表し、星流れ地動き、井の内に聲を發し、暴雨惡風時節に依らず。常に飢饉に遭ひて苗實成らず。多く佗方の怨賊有りて國内を侵掠し、人民諸の苦惱を受け、土地樂む可きの處有ること無けん。

○金光明經　金光明經といふは四卷で、金光明最勝王經といふは十卷である。後者は前者よりも内容が完備してゐる。その外にも譯本はあるが、日蓮上人の引用せられたのは此の二種の經のみである。金光明とは佛の德を稱したので、佛法を本として國を治むる時は必ず泰平なるべきことを敎へたのが、此經の大意である。今此處に引用せられたのは、四天王が釋尊に向つて其の意見を述べて居る所である。○捨離の心　佛の貴い敎を捨て信ぜぬ邪惡の心をいふのである。○四部の衆　比丘（出家した男）比丘尼（出家した女）優婆塞（出家せずして佛の敎を信ずる男）優婆夷（出家せずして佛の敎を信ずる女）をいふのである。○持經の人　此經の中の敎を信奉して之を身に持つ人。○我等及び餘の眷屬　四天王と之に屬する者等をいふ。四天王とは帝釋天の下に居る武將で、此の世界を各々手を分けて護るのである。即ち東方には持國天、南方には增長天、西方には廣目天、北方には多聞天（毘沙門天といふも同じ）である。○甘露の味　佛の敎の深遠なる意義あるを甘露の味に比するのである。○惡趣を增長し　地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界を名けて四惡趣といふ。惡業を重ねた報として此等の境界に趣くからである。人々が罪惡のみを重ぬる故に惡趣を增長すといふのである。○人天を損減し　善業をした者はその報として人界又は天上界に生るゝのである。罪を犯す者が多ければ人界や天上界に生るべき者は減ずるわけである。○生死の河　生死の問題に惱まされて常に不安なる境界、即ち凡夫の境界である。○涅槃の路　涅槃とは滅といふ義である。即ち一切の苦を滅し了つて眞の覺を得たるものを涅槃を得たといふのである。○國位を喪失す　國位とは國王の位である。一國亂れて國王が其位に安んぜぬことをいふ。○繫縛　煩惱のことである。心が煩惱に支配されて自由にならぬことは、宛も繩で縛せられてあると同じ有樣である。○瞋諍　人々互に瞋恚の心を以て相敵とし相爭ふのである。○佗方の怨賊　他國から來襲することで、怨とは即ち敵といふと同意である。

帝釋天及び四天王を崇むることは印度の古代からの思想である。帝釋は須彌山の頂上なる喜見城に居て三十三天を統治し、其下に四天王をはじめ多くの者が屬して居る。此四天王が各分擔して四方を護るので之を護世四天王といふ。而して此の帝釋天はじめ其の眷屬は何れも釋尊に歸依し、佛の敎の最も尊むべきことを深く信ずるが故に其の流布を助け、法師の身を護ることを固く誓つたと傳へられて居る。今此處に引用せられたる金光明經の文は、即ち此の四天王の言であつて、正法の廢れたる國に種々の災禍あるべきことを述べたものである。こゝに數へ擧げられたる殺害瞋諍以下種々の災難は殆んど皆現はれたが、たゞ佗方の怨賊ありて國内を侵掠するといふ一事のみが文應年中までには未だ現はれて居なかつたのである。斯く正法の廢れた國に種々の災難が起るのは何の爲であるか。これ其國の國王及び凡ての國民に對して與へらるゝ警告と解すべきものである。人は生命があつて天地山川等は生命のないものであると、普通の人は皆考へて居る。けれども大乘の佛敎の中に流れて居る思想に基いて考へれば、凡ての物が皆生命をもつて居るのである。凡ての物が皆共に活き共に存し、共に榮えて行くべきものである。斯く考へて見れば人の爲す業が天地を動すといふのに何の不思議もない。吾が一言一行は他の人を悅ばすことも出來れば、又他の人を怒らすことも出來る。それと同じやうに國に正法の行はれると廢れるとによつて、或はめでたき瑞兆も顯はれ或は恐ろしい天變地夭も起るべきである。その天變地夭によつて目を覺されて、各自に反省し戒愼して、共に正しい道に歸依し永く泰平を樂むことが出來るやうになれば、即ち一時の禍害は永遠の幸福の本となるであらう。吾々はいつも此の如き念を以て凡ての天變地夭に對すべきである。徒に歎くのは愚の至である。

大集經云。佛法實隱沒。鬚髮爪皆長。諸法亦忘失。當時虛空中。大聲震於地。一切皆遍動。猶如水上輪。城壁破落下。屋宇悉圮拆。樹林根枝葉華葉菓藥盡。唯除淨居天。欲界一切處。七味三精氣。損減無有餘。解脫諸善論。當時一切盡。所生華菓味。希少亦不美。諸有井泉池。一切盡枯涸。土地悉鹹鹵。剖裂成丘澗。諸山皆燋燃。天龍不降雨。苗稼皆枯死。生者皆死盡。餘草更不生。雨土皆昏闇。日月不現明。四方皆亢旱。數現諸惡瑞。十不善業道。貪瞋癡倍增。衆生於父母。觀之如

獵鹿。衆生及壽命。色力威樂滅。遠離人天樂。皆悉墮惡道。如是不善業惡王惡比丘。毀壞我正法。損減天人道。諸天善神王。悲愍衆生者。棄此濁惡國。皆悉向餘方。

大集經に云く、佛法實に隱沒せば、鬚髮爪皆長く、諸法も亦た忘失せん。當時虛空の中に大聲ありて地に震ひ、一切皆遍く動くこと猶ほ水上輪の如くならん。城壁破れて落ち下り、屋宇悉く圮れ拆け、樹林の根枝葉華葉菓藥盡きん。唯だ淨居天を除き、欲界の一切處の七味三精氣、損減して餘有ること無けん。解脫の諸の善論當時に一切盡きん。生ずる所の華菓の味も希少にして亦た美からず。諸有の井泉池盡く枯涸し、土地悉く鹹鹵し、剖裂して丘澗と成らん。諸山皆燋燃して天龍も雨を降さず、苗稼も皆枯死し、生ける者皆死に盡き、餘草更に生ぜず、土を雨らし皆昏闇にして、日月も明を現ぜず、四方皆亢旱して數々諸の惡瑞を現ぜん。十不善の業道、貪瞋癡倍增して、衆生の父母に於ける、之を觀ること獐鹿の如くならん。衆生及び壽命色力威樂減じ、人天の樂を遠離し、皆悉く惡道に墮せん。是の如き不善業の惡王と惡比丘と、我が正法を毀壞し、天人の道を損減し、諸天善神王の衆生を悲愍する者、此の濁惡の國を棄て皆悉く餘方に向はん。

○大集經　佛が十方の佛菩薩を集めて大乘の法を說かれたを集錄せる故に大集經といふのである。譯本種々あるが、何れも全譯ではないといふ。○諸法も亦た忘失人の姿が見苦しくなるのみならず、心も亦た拙くなつて、佛の說かれた凡ての敎を忘れはつるのである。○水上輪　即ち水車のことである。動いて少しも靜ならぬ形容である。○淨居天　先づ三界の區別を立てる。三界とは欲界と色界と無色界とである。色欲食欲等のある者の住む所は欲界である。吾々も亦た欲界の一部分に住んで居る。凡ての欲を離れてゐるが、なほ形體を有する者の住む所が色界である。色とは有形のものをいふのである。形體に囚はれぬ純精神的の生活を爲す所が即ち無色界である。淨居天といふのは此の色界の中にあるので、欲を離れた淸淨の生活である故に淨居といふのである。○七味三精氣　七味といふは甘と辛と酢と苦と鹹と澁と淡とである。精氣とは生命といふと同じ義である。地味の精氣といふは五穀や

蔬菜のことである。衆生味の精氣といふは無病で健康なることである。法醍醐味の精氣といふは戒定慧等のことである。之を併せて三精氣といふ。○解脫の諸の善論人々をして苦を脫し惑を去らしむべき一切の敎のことである。○十不善の業道十不善はまた十惡ともいふ。一には殺生、二には偸盜、三には邪婬、四には妄語、五には綺語(人をして淫意を發せしむべきことを語るのである。)六には兩舌(人を離間するやうな事を語るのである)。七には惡口(虛僞のことをいふのは妄語であるが、たとへ事實であつても人を敵とし、人を害すべきことを言ふのは惡口として戒められてある。)八には貪欲、九には瞋恚、十には愚痴。此等の惡い業は皆苦の報を受くべきものである。○獐鹿の如く　獐といふも鹿の類だといふが、此獸は危い時には自己のみ助からうと思つて、一切他のものを顧みぬので、不孝の者に譬へらるゝのである。○色力威樂　色とは即ち身體のことで、色力とは身體の力である。威とは人々の具ふる威德のこと、樂とは其人其人に具はる樂みである。○惡道　前に惡趣といつたのも同じことで、地獄餓鬼畜生等の境界のこと。

此の大集經の文も大體に於て前の金光明經のと同意である。此處に『佛法實に隱沒せば』といひ、又『不善業の惡王惡比丘』といふ意味をよく考へて見なければならぬ。寺や塔が多く立つて居て讀經の聲がいつも絕えないでも、それだけで佛法の盛んな時代と定めるわけには行かぬ。佛の本意に叶はぬ弘まり方をしたのでは眞に佛法が弘まつたとはいはれぬ。如何に寺が多くても佛法隱沒である。又法を說き法を弘むる業、及び之を保護する業を大なる善業といふのは、之によつて自ら佛の境界に近づかんことを期すると共に、凡ての人を共に導いて佛の道に入らしめやうといふ淸淨なる心より起るからである。名聞利欲の爲に法を說き、自己の繁榮を祈らんが爲に之を保護するといふやうなのは何れも不善業である。惡王惡比丘とあるが、人を殺したり盜んだりするばかりが惡ではない、人を迷はし世を誤るやうなことを平氣でして居る者は皆惡人と呼ばるべきである。たとへ道を說き敎を弘むるために力を盡して居ても、惡人と呼ばるゝことを免れぬ人がいくらもある。但し惡人と雖も皆佛性を具へてゐるから、徒に之を憎まず、之を呵責して其の過を改めしむるやうにすべきである。

仁王經云。國土亂時。先鬼神亂。鬼神亂故萬民亂。賊來劫レ國。百姓亡喪。臣君太子。王子百官。共生二是非一。天地恠異。二十八宿星道。日月失レ時失レ度。多有二賊起一。亦云。我今五眼明見二三世一。一切國王。皆由三過去世侍二五百佛一。得レ爲二帝王主一。是爲一切聖人羅漢。而爲來二生彼國土中一。作二大利益一。若王福盡時。一切聖人皆爲捨去。若一切聖人去時。七難必起。

仁王經に云く、國土亂れん時は先づ鬼神亂る。鬼神亂るゝが故に萬民亂る。賊來りて國を劫し、百姓亡喪し、臣君太子王子百官共に是非を生ぜん。天地恠異し二十八宿星道、日月時を失ひ度を失ひ、多く賊の起る有らん。又云く、我今五眼をもて明かに三世を見るに、一切の國王は皆過去の世に五百の佛に侍せるに由りて帝王主と爲ることを得たり。是をもて一切の聖人羅漢、而も爲に彼の國土の中に來生して大利益を作す。若し王の福盡きん時は、一切の聖人皆爲に捨て去らん。若し一切の聖人去らん時は七難必ず起らん。

○仁王經　佛が諸王に對して正法によつて國を治むべきことを敎へられたので、この卷ある。傳敎大師以來、此經を法華經及び金光明經と併せて鎭護國家の三部經といひ、大に重んぜられたものである。○是非を生ぜん　不和になつて相爭ひ相鬩ぐことである。○五眼　一には肉眼、普通の人の身に具はる眼である。二には天眼、天人の具へたる眼で、遠近內外晝夜を問はず物を見る力がある。三には慧眼、即ち智慧の眼の意で、小乘の敎によつて覺を得たるものに具はる。四には法眼即、ち一切の法を見究める力のある眼で、菩薩の具へ得る所である。五には佛眼、即ち究竟の智慧を具へたる眼で照見せざる所なきものである。佛は凡て此の五眼を併せて具有せらるゝのである。○三世を見る　凡ての人の過去と現在と未來とを見通すことである。○羅漢　譯して殺賊といふ、即ち煩惱の賊を殺し盡すことである。小乘の敎により覺を得たる極致である。正しくは阿羅漢といふので、羅漢とはその略である。

仁王經は唐朝にも又吾が平安朝時代にも大に重んぜられたもので、屢々仁王會が行はれた。唐の代宗の時に祈雨の爲に仁王會のあつた事もある。吾が齊明天皇の時に一百の高座を設けて仁王經を講ぜしめたのを濫觴として、朝廷の定まつた式となつた。

『公事根源』二月の下に、

臨時の仁王會吉日を擇んで行はる、或は三月なり。大極殿、紫宸殿、清涼殿などにて此事あり、仁王護國般若經を講ぜしむ。ひとへに朝家の御祈の爲に齊明天皇六年五月に仁王會あり。聖武天皇神龜六年六月に宮中並に五畿七道に於て行はる。又一代一度の大仁王會と申すことも侍るにや。

とある。それは此經の護國品に、國に災難のある時は百の講座を設けて仁王經を講讀して之を禳ふべきことが說いてあるのに基くものである。但し講讀する目的は之を聽聞した人が皆互ひに反省し戒愼して日々の行を改めることに在る。若したゞ聽聞するだけならば何の用にも立たぬのである。正法に基いて國を治むる王、即ち眞の仁王の國には慶福が多く、之に反する國には種々の災禍が集つて來るといふことが此經の中に說かれてある。それ故に此經の講讀を聞いて國政が改まり、國民の心の持ち方が改まれば禍は自ら無くなるわけである。然るに經文の深い意義を辨へず、何でも此經を講じさへすれば災難を除くことが出來るといふ考へから、たゞ形式的に仁王會を執り行ひ、儀式は華々しく立派であつても、經を講ずる人も又聽く人も共に其心に之を味ふなどいふ事は少しもなくなつたのは哀むべき事である。こゝに引用した文に『鬼神亂るゝが故に萬民亂る』とあるはよく服膺すべき語である。正しい敎が地を掃つて無くなり、邪惡の氣が國中に行き渡るやうになると、國民各自の心が自ら荒んで來る。斯くして內には紛爭が起り、外からは隙を窺はるゝやうになるのである。若し仁王經を口先でばかり讀まずに、心に讀む人が國の要路に立つならば、有らゆる天災をはらふことも決して出來難くはあるまい。

藥師經云。若刹帝利灌頂王等災難起時。所謂人衆疾疫難。佗國侵逼難。自界叛逆難。星宿變恠難。日月薄蝕難。非時風雨難。過時不雨難。

藥師經に云く、若し刹帝利灌頂王等の災難起らん時は、所謂人衆疾疫の難、佗國侵逼の難、自界叛逆の難、星宿變恠の難、日月薄蝕の難、非時風雨の難、過時不雨の難あらん。

○藥師經　譯本は幾種もあるが、玄奘三藏の譯したのが普通行はれてゐる。これは

一卷である。○刹帝利　印度には人民の階級が四つに分れて居た。第一は婆羅門、出家のもあり出家せぬのもあるが、天に仕ふることを職とするもので最も尊敬せられた。第二には刹帝利、これは武士階級で政權を握り、國王も此中から出るのである。第三は毘舍（びしゃ）これは商人である。此中で殊に富めるものは長者といはれ、武士階級と對等の交りをした。第四は首陀（しゅだ）、即ち農民及び奴隷である。此外に旃陀羅（せんだら）といふ賤民があつて他の四種の人民とは交際することが出來ず、屠殺などを業としてゐた、○灌頂王　國王が即位の時には四大海の水を以て其頂に注ぎ其德の四方に及ばんことを祝するので、これを灌頂の式といふ。

此の藥師經の七難が殊によく知られてゐる。文應年中までに此中の五難は既に現はれ、佗國侵逼の難は即ち蒙古の來襲となつて現はれ、自界叛逆難は北條時輔の擧兵となつて現はれたのである。此處の文に『刹帝利灌頂王の災難起らん時』とあるが、これは國家に災難の起る時のことである。何故特に刹帝利灌頂王といふのかといへば、國王と其の下に屬する重なる臣下とが國の運命を左右する力をもつて居たからである

印度は階級の別のことに嚴しい國であつて、農民や奴隷などは全く無教育の者のみで、たゞ仰いで上の者の命を聽くのみであつた。婆羅門は最も尊敬さるゝ地位であるが、直接に世間の事にはたづさはらぬから、刹提利が國民全體の上に立つて之を治めて行くと共に、之を指導して行くべき責任をもつて居たのである。斯る時代に於て釋尊が『一切衆生悉く佛性有り』と斷言されたのは非常なる見識といはなければならぬ。一切衆生といへば國王をはじめとして農民も、奴隷も最下の賤民たる旃陀羅をも其中に含むのである。階級的差別は宗教上にまで及んでゐて、婆羅門の人々は下級の者共を殆んど相手にしなかつた。その時に旃陀羅でも佛に成れるといふことは何人も想像のつかぬ事であつたに違ひない。釋尊は斯く一切衆生を平等に愛せられたけれども、先づ國民の全體を左右すべき地位に在る者の心から改まつて來なければ、教化の實を擧ぐることは困難である。佛教は實生活を離れたる空理空論でないから、其の教が直ちに國家の凡ての事業の基礎とならなければならぬ。さればこそ天災地變の起るに際しても、主として國王大臣等の反省を促し、彼等をして共に俱に身を以て衆を率ゐて正し

い道に歸依せしめやうと努めらるゝのである。日蓮上人の立正安國論を書いたのも、亦た斯る佛の御心を繼承したものに外ならぬ。

仁王經云。大王吾今所レ化。百億須彌。百億日月。一一須彌有二四天下一。其南閻浮提。有二十六大國五百中國。十千小國一。其國土中。有二七可レ畏難一。一切國王爲二是難一故。云何爲レ難。日月失レ度。時節返逆。或赤日出黑日出。二三四五日出。或日蝕無レ光。或日輪一重二三四五重輪現。爲二一難一也。二十八宿失レ度。金星彗星輪星鬼星火星水星風星彡星。南斗北斗。五鎮大星。一切國主星。三公星百官星。如レ是諸星各々變現。爲二一難一也。大火燒レ國。或鬼火龍火天火山神火。人火樹木火賊火。如レ是變怪。爲二三難一也。大水漂二沒百姓一。時節返逆。冬雨夏雪。冬時雷電霹靂。六月雨二氷霜雹一。雨二赤水黑水青水一。雨二土山石山一。雨二沙礫石一。江河逆流。浮レ山流レ石。如レ是變時。爲二四難一也。大風吹二殺萬姓一。國土山河樹木一時滅沒。非時大風。黑風赤風青風。天風地風火風水風。如レ是變爲二五難一也。天地國土亢陽。炎火洞燃。百草亢旱。五穀不レ登。土地赫燃。萬姓滅盡。如レ是變時。爲二六難一也。四方賊來侵レ國。內外賊起。火賊水賊風族鬼賊。百姓荒亂。刀兵劫起。如レ是怪時。爲二七難一也。

仁王經に云く、大王吾が今化する所の百億の須彌、百億の日月。一一の須彌に四天下有り、其南閻浮提に十六の大國、五百の中國、十千の小國有り。其國土の中に七の畏る可き難有り。一切の國王是を難と爲すが故に。云何なるを難と爲す。日月度を失ひ時節返逆し、或は赤日出で黑日出で、二三四五の日出で、或は日蝕して光無く、或は日輪一重二三四五重輪現ずるを一の難と爲すなり。二十八宿度を失ひ、金星彗星輪星鬼星火星水星風星、南斗北斗、五鎮の大星、一切の國主星、三公星、百官星、是の如き諸星各々變現するを二の難と爲すなり。大火國を燒き萬姓燒盡せん或は鬼火龍火天火山神火、人火樹木火賊火あらん。是の如く變怪するを三の難と爲すなり。大水百姓を漂沒し時節返逆して、冬雨り夏雪り、冬時に雷電霹靂し、六月に氷霜雹を雨し、赤水黑水青水を雨し、土山石山を雨し、沙礫と石を雨し、江河逆に流れ山を浮べ石を流す。是の如く變ずる時を四の難と爲すなり。大風萬姓を吹殺し、國土山河樹木一時に滅沒し、非時の大風、黑風赤風青風天風地風

火風水風あらん。是の如く變ずるを五の難と爲すなり。天地國土亢陽し、炎火洞燃し、百草亢旱し、五穀登らず、土地赫燃して萬姓滅盡せん、是の如く變ずる時を六難と爲すなり。四方の賊來りて國を侵し、內外の賊起り、火賊水賊風賊鬼賊ありて百姓荒亂し、刀兵の劫起らん。是の如く恠する時を七の難と爲すなり。

○大王　釋尊が波斯匿王に對つて說かるゝのである。○化する所　敎化を與へることである。釋尊は此の娑婆世界の一切の人を敎化せんが爲に出られたので、即ち娑婆世界の敎主と稱せらるゝのである。○須彌　高山の名である。此の高山の四方に各一洲あり、その南方にあるのを南閻浮提といふ。吾々の住むのも其の一部分だといふことである。○日月度を失ひ　日月の運行が狂ふことである。○時節返逆し四季の時候が狂つて、或は冬暑く夏寒い等の事が起るのである。○天地國土亢陽し陽氣が克ちすぎて雨ふらず、旱天のみが續くことである。

前に引いた仁王經の文に『一切の聖人去らん時は七難必ず起らん』とあつたが、その七難をこゝに列擧したのである。『今吾が化する所』云々とあるは、佛の敎化の及ぶ所の極めて廣いことをいふのである。印度のむかしからの傳說によれば須彌山を中心として其の周圍に七山八海を繞らし、鐵圍山を外廓としたものが一小世界である。須彌山の四方に各一洲あり、之を四天下といふ。其の南なるは南贍部洲（南閻浮提といふも同じ）その東なるは東勝神洲、その西なるは西牛貨洲、その北なるは北瞿盧洲である。此の一小世界を一千合せたのを小千世界といひ、更に之を一千合せたのを中千世界といひ、更に之を一千合せたのを大千世界といふ。されば大千世界は小世界の數が一千の三乘だけ集つたものであるから、之を三千大千世界といふのである。釋尊の敎化の及ぶ所は三千世界の隈々までも漏れぬので、南贍部洲の一部分に住む吾々の如きも亦た之に漏れぬ者と考へられて居るのである。

大集經云。若有二國王一。於二無量世一。修二施戒慧一。見二我法滅一。捨不二擁護一。如レ是所レ種無量善根。悉皆滅失。其國當レ有二三不祥事一。一者穀貴。二者兵革。三者疫病。一切善神悉捨二離之一。其王敎令。人不二隨從一。常爲三隣國之所二侵燒一。暴火橫起。多二惡風雨一。暴水增長。吹二漂人民一。內外親戚其共謀叛。其王不レ久。當下遇二重病一。壽終之後。生

大地獄中上。乃至如レ王夫人太子。大臣城主。柱師郡守宰官。亦復如レ是。

大集經に云く、若し國王有りて、無量世に於て施戒慧を修するとも、我が法の滅するを見て、捨て擁護せずんば、是の如く種ゆる所の無量の善根、悉く皆滅失して、其國當に三の不祥の事有るべし。一には穀貴二には、兵革、三には疫病なり。一切の善神悉く之を捨離せば、其王教令するも人隨從せず、常に隣國の侵嬈する所と爲らん。暴火横さまに起り惡風雨多く、暴水増長して人民を吹漂はし。內外の親戚其れ共に謀叛せん。其王久しからずして當に重病に遇ひ、壽終の後には大地獄の中に生ずべし。乃至王の如く、夫人太子大臣城主、柱師郡守宰官も亦た復た是の如くならん。

○施戒慧を修す　施とは布施のことで、物を施すを財施といひ、人を救ひ導くために力を盡すのを法施といふ。戒とは即ち持戒で、佛の定められたる戒律を守つて違はぬことである。慧とは智慧を磨いて正しい道を躬に行ひ、一切の人に對して慈悲を行ふことである。此等は菩薩としての修行の最も肝要なるものである。○我が法

の滅するを見　佛の敎が他の邪說に壓倒されて世に行はれぬやうになることである

○穀貴　物は乏しければ貴くなる。穀貴とは即ち飢饉のことである。○壽終の後此世の生命が終つて後、即ち來世に於て。○大地獄　八大地獄がある。その最下なるは無間地獄である。○柱師　大集經の本文とは合はぬ、その意味も分らぬ。

正法の弘通に力を用ゆることは佛弟子の身に負ふべき最も重大なる責任であつて、能く此の責任を果すことが菩薩行の根本ともいふべきものである。一般に菩薩行としては六つの事が數へらるゝのである。之を名けて六度といふ。度といふは迷ひの海を渡つて佛の境界に到達すべき道といふ意である。其の六度とは一に布施、二に持戒、三に忍辱、四に精進、五に禪定、六に智慧である。此處の經文に施戒慧とあるも六度の中の重なるものを擧げたので、要するに菩薩の道を修行するに力を用ゐて居ることをいふのである。斯く一個人としては申分の無い行ひをして居る人でも、正法を壞る者を見て之を捨て置くならば、折角の善行も意味のないものになつてしまふのである。若し不正な行ひをする者を棄て置けば、其人自身に益々不正を重ねて罪を大にして行

くのみならず、其の周圍に及ぼす惡感化はまた非常なものである。それを其儘に見て居るといふのは慈悲の念の足らぬものである。たとへ自分は如何なる難にあはうとも念とせずして、彼の不正なるものに制裁を與へ、正義を擁護することに努むるのが、眞に世を思ひ人を思ふ人の行ひである。此の如き行ひが即ち眞の菩薩行である。若し自分は少しも過失が無いから、他の者が如何なる過失を犯してもかまはぬといふならば、自己の地位や勢力を恃んで他の人を輕侮する者と大差はないもので、佛の弟子とはいはれぬのである。此の道理は何人にも通じて同じ事であるが、殊に帝王たる者は身を以て國民の先に立ち、國民の凡てに實行の範を示すべき者であるから、其の責は幾倍か重いといはなければならぬ。

國に君王ありて一切安きことを獲、是故に王は一切衆生安樂の本とす。在家出家の精心道は皆正國によりて住持し演化流布せらる。若し王の力なくんば功行成らず、法滅して餘無からん。——華嚴經

といふは能く王の責の重いことを説明したるものである。王が其の責を果さぬのは勿論其人の罪であるけれども、夫人太子をはじめ左右の人々は王と一身同體となつて世の爲にも國の爲にも力を盡すべき者である故に、王に過がある時には又其の罪を分つべきものと考へらるゝのである。

夫四經文朗。萬人誰疑。而盲瞽之輩。迷惑之人。妄信二邪説一。不レ辨二正敎一。故天下世上。於二諸佛衆經一。生二捨離之心一。無二擁護之志一。仍善神聖人捨レ國去レ所。是以惡鬼外道成レ災致レ難矣。

夫れ四經の文朗なり、萬人誰か疑はん。而るに盲瞽の輩、迷惑の人、妄に邪説を信じて正敎を辨へず、故に天下世上、諸佛衆經に於て捨離の心を生じ、擁護の志無し。仍て善神聖人國を捨て所を去り、是を以て惡鬼外道災を成し難を致すなり。

○四經の文　以上引用したる金光明經、仁王經、藥師經、大集經に説かるゝ所は一致して居る。即ち正法の行はれぬ國に多くの天災のある事である。○擁護の志　敎は人を導くためのものであるが、之を弘むる人がなければ世に行はれぬ。故に佛法の貴いことを知る者は共に力を協せて之を擁護しなければならぬのである。○外道

佛の教を内として、佛教以外のものを外と名くるのである。それが更に轉じては佛教の敵のことを外道といふやうになつたのである。

以上四經の文を重ねて引いたのは、天災地變が偶然に起つたのでなく、誤つた信仰の上に立つ國民に對して與へられたる警告であるといふことを、佛說によつて證據立てんが爲である。其の信仰の誤りは何れの點に在るかを此より順次に說くのであるがこゝに先づ『天下世上諸佛衆經に於て捨離の心を生じ擁護の志なし』とあるは、後に淨土門の極樂往生の說に對して嚴しき批判を加へんが爲の前提である。人々皆佛性を具有するといふこと、其の佛性の次第に開發せらるゝに隨ひ苦惱も罪過も少くなるといふことは、諸經の中に明されてある事である。然るに此世を穢土と定め、西方の極樂世界に往いて生れんことを理想とすることになれば、現世に於て善行を積み、世をも人をも導いて共に幸福なる道に入らしめんといふ念は無くなるわけである。是れ佛の洪大なる慈悲を無視するものである。又貴い多くの經典を蔑視するものといはなければならぬ。日蓮上人が、開目鈔の末文に於て、

三佛の未來に法華經を弘めて未來の一切の佛子に與へんと思しめす御心の中を推するに、父母の一子の大苦に値ふを見るよりも强盛にこそ見えたるを、法然痛はしとも思はで末法には法華經の門を堅く閉ぢて人を入れじとせき、狂兒をたぼらかして寶をすてさするやうに法華經を拋てさせける心こそ無慚に見え候へ。

といつたのは即ち此意である。三佛とは法華經を說かれたる釋迦牟尼佛と、其の說を『皆是眞實』と證明せんが爲に出現されたる多寶佛と、同じく證明の爲に出現されたる釋迦の分身の諸佛をいふのである。法然上人が一切の佛と一切の經をすてゝ只阿彌陀佛にのみ歸依せよと教へ、捨閉閣抛の四字を以て大乘佛教の凡てを排斥し去つたことは下の文に委しく見えて居る。客の問に對する返答はこゝで一段落をなし更に新なる問を設けて、說明の歩を進めて行くのである。

客作レ色曰。後漢明帝者。悟二金人之夢一。得二白馬之教一。上宮太子者。誅二守屋之逆一。成二寺塔之構一。爾來上自二一人一。下至二萬民一。崇二佛像一。專二經卷一。然則叡山南都園城東寺。四海一州。五畿七道。佛經星羅。堂宇雲布。鶩子之族。則覩二鷲頭之月一。鶴勒之流。亦

傳二鷄足之風一。誰謂下編二一代之教一。廢二三寶之跡上哉。若有二其證一。委聞二其故一矣。

客色を作して曰く、後漢の明帝は金人の夢を悟りて白馬の教を得、上宮太子は守屋の逆を誅して寺塔の構を成す。爾しより來、上は一人より下は萬民に至るまで、佛像を崇め經卷を專にす。然れば則ち叡山南都園城東寺、四海一州五畿七道、佛經は星の如く羅り堂宇は雲の如く布けり。鷲子の族は則ち鷲頭の月を觀じ、鶴勒の流は亦た鷄足の風を傳ふ。誰か一代の教を褊して三寶の跡を廢すと謂はんや、若し其證有らば委しく其故を聞かん。

○後漢の明帝　明帝の永平八年に蔡愔等を西域に遣して佛經を求めしめたが、同十一年に歸つて來た。これ佛法の支那に弘まる初めである。吾朝では垂仁天皇の御宇に當り、西洋では紀元六十八年である。○金人の夢　帝は金色の人の身のたけ丈六にして微妙の相をしたるが庭前を飛行する夢を見た。覺めて後大史傅毅等の說により是れ佛法の渡來すべき兆なりと知り、蔡愔等を遣はしたのである。○白馬の教　蔡愔等が西域から歸る時に、佛經を白馬に載せて來たので、洛陽の都に白馬寺を建てた。これ佛寺の初めである。されば白馬の教とは佛教の意に用ゐらるゝ語である。○上宮太子　即ち聖德太子のこと。御名は厩戸皇子といふので、聖德とは諡である。宮南の上殿に居たまへる故に上宮太子とも申すのである。○守屋の逆　物部守屋は佛法の弘まる妨げをした者であるが、太子の之を誅せられたのは其爲ではない。崇峻天皇の即位せらるゝに當り、守屋は穴穗部皇子を奉じて位に即けやうと謀つたからである。しかし守屋が誅せられてから佛法に敵意をもつ者が無くなつた。○叡山南都　叡山は傳教大師が延曆寺を建て天台の教を弘められてから、法華經弘通の中心である。南都は久しく王城の地であつて、華嚴、法相、三論をはじめ凡て六宗が此處を根據として吾國に弘まつたのである。○園城東寺　園城寺は近江にある、三井寺として普く世に知られてゐる。叡山と相並んで天台宗の寺である。東寺は弘法大師が嵯峨天皇より賜はる所で、即ち眞言宗の本邦に弘まる中心である。○四海一州　一州とは日本全國のことをいふのである。○鷲子の族　鷲子といふは舍利弗のことである。其母を舍利女といふのであるが舍利とは鳥の名で、漢語に譯し

ては鷲といふ。此人の眼が鷲鳥の如くに美しかつたので、舍利女と稱した。舍利弗は其子である故に鷲子といふ。舍利弗は釋尊十大弟子の一人で智慧第一といはれた。鷲子の族とは、その舍利弗にも劣らぬやうな高僧といふ意である。○鷲頭の月

釋尊が法華經をはじめ大乘の敎を說かれた靈鷲山は、元來その形が鷲の頭に似て居るのでつけた名である。鷲頭の月とは即ち大乘の敎のことである、○鶴勒の流

鶴勒とは鶴勒夜那の略稱である。釋尊の滅後、十大弟子の一人たる迦葉が其の師よりして聽き得たる所を集めて、法藏と稱したのであるが、其後この法藏を傳へられた人を付法藏の人といひ、鶴勒夜那は付法藏の第二十三に當るのである。さば鶴勒の流といへば迦葉の本意を傳へたる高僧の人々といふ意である。○鷄足の風　迦葉は鷄足山に於て入定したので、鷄足の風とは即ち迦葉の傳へた敎のことである。

○一代の敎を褊し　褊とは狹い意味で、即ち之を輕んじ侮る意になる。釋尊一代の間に說かれた貴い敎を輕んずること。

第一段の問答終つて、此より第二段の問答である。先づ客の問を設けて、今は佛法の隆盛の時であるのに、何故に法が滅びたといふのかと反詰し、更に之に對して佛法の盛衰は其の外形のみを以て定むることの出來ぬといふ理由を述ぶるのである。いかにも形の上に現はれた所のみでいへば、佛法は久しく此國に流布して隆昌を極めてゐるとも見られやう。一條兼良の著なる『公事根源』はよく朝廷の凡ての儀式を擧げて最も簡明に說明したものであるが（兼良は文明十三年即ち足利九代の將軍義尙の時に、八十歲で沒した人である。）其中に佛敎に關するものは夥しくある。即ち正月には

御齋會。八日から十四日まで最勝王經（金光明經に同じ）を講じ、朝家の繁榮を祈る。

眞言院御修法。是も八日から十四日迄、宮中の眞言院に於て修せらるゝもので、唐の內道場に擬して弘法大師がはじめたのである。

大元帥法。是も同じく八日から七ヶ日の間行はるゝ式で、主上の御衣を賜はつて壇上に置き、聖壽萬歲の御祈をするのである。

仁壽殿の觀音供。十八日に眞言宗の東寺より長者たる人を召して行はせらる。

國忌。これは鳥羽院の母后の御忌日で、此月二十五日に法會を行はるゝのである。

次に二月になつては、

北野御忌日、菅原道眞の忌日たる二十五日に吉祥院で法華八講を營むのである。

臨時の仁王會。吉日を擇びて行はるゝこと、前に記する如くである。大極殿、紫宸殿或は清涼殿に於て行はる。

次に三月に入つては、

藥師寺の最勝會。七日より七ヶ日間、藥師寺に於て最勝王經を講ぜしむるのである。東大寺の授戒。孝謙天皇の時に始まつたのであるが、三年に一度擧げらるゝ定めである。

次に四月になつては、

灌佛。即ち今も一般に行はるゝ四月八日の灌佛會であるが、推古天皇の御宇から佛生會と稱して宮中で行はれた。

五月の儀式としては、

最勝講。兼て日をトして清涼殿に於て最勝王經を講ぜしめらるゝのである。その講師には東大寺興福寺延暦寺園城寺の四大寺中から選定せらるゝ規定である。

六月の催しとしては、

延暦寺の六月會。此月四日、傳敎大師の命日に營むので、勅使を立てらるゝのである。

施米。日は其時々に定めるのであるが、東山西山北山などで貧しい僧に米鹽を施さるゝのである。

次に七月になつては、

文殊會。八日に東寺と西寺とで行はれ、貧者に物を施す定めである。

盂蘭盆會。天平五年が始めであつて、爾來此月の十四日に宮中で行はるゝのである。

仁王會。春の時のと同じことである。

次に八月になつては、

石清水の放生會。此月の十五日に行はるゝのである。石清水の八幡宮は神であるけ

れども、放生會は最勝王經等の佛典に說かれたる所に基くものである。

季の御讀經。二月と八月と年に二度宮中で行はるゝのである。

九月は特に何の事もなくて、十月には

興福寺の法華會。六日から七ヶ日間催さるゝ定めである。內廳朝臣の忌日をよけて、

九月三十日から七ヶ日と後に改まつた。

維摩會。奈良の興福寺で此月の十日から十六日まで維摩經を講せしむるのである。

大職冠鎌足の忌日なるによる。

十一月は何もなく、十二月に入つて、

國忌。此月の三日、天智天皇の御忌日で、崇福寺に於て法會が行はるゝのである。

御佛名。十九日より三ヶ日間、仁壽殿に於て行はるゝので、三世の諸佛の名號を唱へて六根の罪を滅するのである。

以上は定まつたる例であるが、此外にも臨時にいろ〳〵の事が營まれた樣子である。

斯くまで朝廷よりはじめて百官盡く佛敎に歸依してゐたのであるから、寺も塔も莊嚴に出來た筈である。其後一般の信仰としては淨土宗が勢力を得、武家の間に禪の行はれて來たことは前に委しく述べた。されば外形から見て佛敎の隆昌なる時代が續いたといふに異議はない筈である。しかし之に就て日蓮上人の意見は別に存するのである。

主人喩曰。佛閣連レ甍。經藏並レ軒。僧者如二竹葦一。侶者似二稻麻一。崇重年舊。尊貴日新。但法師諂曲。而迷二惑人倫一。王臣不覺。而無レ辨二邪正一。仁王經云。諸惡比丘多求二名利一。於二國王太子王子前一。自說二破佛法因緣。破國因緣一。其王不レ別。信二聽此語一。橫作二法制一。不レ依二佛戒一。是爲二破佛破國因緣一。

主人喩して曰く、佛閣甍を連ね經藏軒を並べ、僧は竹葦の如く侶は稻麻に似たり。崇重年舊り尊貴日に新なり。但し法師は諂曲にして人倫を迷惑し、王臣は不覺にして邪正を辨ふること無し。仁王經に云く、諸の惡比丘多く名利を求め、國王太子王子の前に於て自ら破佛法の因緣、破國の因緣を說かん。其王別へずして此語を信聽し、橫さまに法制を作りて佛戒に依らず。是を破佛破國の因緣と爲す。

○竹葦稻麻　いづれも多く揃つて立並んでゐるもので、僧侶の多く盛なのに譬へた

のである。○諂曲にして　私心を專にして正しい道理を曲ぐることである。互に諂曲の心を以て黨を作れば必ず爭ひとなる。故に諂曲の心が極端まで盛になれば修羅界が現出すると敎へられてある。○破佛法の因緣　名利の念に動されて說くのであるから、其の說く所は佛の本意に違ふのが當然である。故に佛法を破壞する因緣となるのである。○破國の因緣　國王が斯る邪說に迷はさるゝ時は、正法世に廢れて國家は衰微するに極つてゐる。故に斯る邪說は破國の因緣となるものである。

佛意に叶はぬ敎を弘むるならば、國中の人は皆その禍を受くべきである。まことに佛の法を破り又國を破るものといはなければならぬ。獅子は死んで後でも多くの獸が恐れて容易に近づかぬが、その肉の中から蟲が出て皮をも食ひ破るといふことである。蓮華面經の中には之を以て佛法を弘むる者の中から佛法を破るものが出るのに譬へ、

阿難、譬へば師子の命終して身死せんに、若くは空若くは地若くは水若くは陸の所有の衆生は彼の師子の身肉を噉食せず。唯だ師子の身より自ら諸蟲を生じ、還て自ら師子の肉を噉食するが如し。阿難、我が佛法も餘の能く壞るにあらず。是れ我が法の中の諸の惡比丘、猶ほ毒刺の如く、我が三阿僧祇却に積行勤苦して集むる所の佛法を破らん。

とあるが、實際釋尊の先見の通りの事實が現はれ來つたのである。その原因は敎を弘むるものが名利に囚はるゝことに在る。名利を求むる者は吾が說の世に用ゐられんことをのみ望む故に、常に聽く人の顏色をうかゞひ其の意に投ぜんことをのみ努むるのである。斯くして世の人を警醒せんことは到底不可能である。苟くも敎を說く以上は如何なる場合にも己の主張を枉げぬといふ覺悟がなければならぬ。名利を求むるは大なる惑である。自ら其心中の惑を去ることが出來ずして、人の惑を除かんとするも何の効があらう。日蓮上人が

正直にして少欲知足たらん僧こそ眞實の僧なるべけれ。——曾谷殿御返事

といつたのは如何にも適切の言で、敎を世に弘めんとする者の共に服膺すべきことである。

涅槃經云。菩薩於三惡象等一。心無三恐怖一。於三惡知識一。生三怖畏心一。爲三惡象一殺。不レ至三三趣一。爲三惡友一殺。必至三三趣一。

涅槃經に云く、菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無く、惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ。惡象の爲に殺さるゝも三趣に至らず。惡友の爲に殺されては必ず三趣に至る。

○涅槃經　釋尊が入滅に先つて說かれたる所で、佛身の不滅を敎へ、又末世に出て大乘の敎を弘むる者の志とすべき所を敎へられてある。其の完全な漢譯に二種あるが、天台宗等で重んずるのは南本と稱する三十六卷のものである。○惡知識　道を傳ふるものを知識といふ。邪道を傳ふるものは惡知識である。○三趣　三惡趣と同じこと。即ち地獄餓鬼畜生の何れかに生を受けるのである。

人の心は動き易いものであるから、交る所の人を擇ぶことが最も肝要である。彼の阿闍世王が父を殺し母を惱ますといふやうな大罪を犯したのも、提婆達多の邪說に惑はされたが爲である。しかしながら後に其罪を悔いて釋尊に歸依し、佛法の弘通のために大に力を盡した。彼もまた佛性を具へたる者であるから、一たび過を改めて正しい道に入りさへすれば、いくらでも善事を積み得るのである。若し最初に提婆を近づけずして佛に歸依したならば、其の罪を作る爲に用ゐた力は盡く世をも人をも益するために用ゐられたであらう。薪は燃ゆる性をもつて居るが、水の中に漬けてある薪に火をつけても決して燃ゑぬ。人の胃腸は食物を消化するものであるが、胃腸に重い病があれば食物を消化することは出來ぬ。人の境遇によつて移さるゝことも亦た此の如きものである。いかに貴い佛性を具へてゐても、惡い者に取り圍まれて惡い敎に感化されて行けば、其の佛性はいつ迄も發揮せられずして已むの外はない。されば法華經の中には、

法は常に無性なり、佛種は緣に從ひて起る。——方便品

といつてある。善き人を友とし善き敎を聽くことは善緣である。善緣あつて初めて佛性の發揮も出來るのである。

法華經云。惡世中比丘。邪智心諂曲。未レ得謂二爲得一。我慢心充滿。或有下阿練若。納

衣在二空閑一。自謂レ行二眞道一。輕二賤人間一者ヨ。貪二著利養一故。與二白衣一說レ法。爲二世所一恭敬一。如二六通羅漢一。乃至常在二大衆中一。欲レ毀二我等一故。向二國王大臣婆羅門居士一。及餘比丘衆一。誹謗說二我惡一。謂三是邪見人說二外道論議一。濁劫惡世中。多有二諸恐怖一。惡鬼入二其身一。罵二詈毀辱我一。濁世惡比丘。不レ知二佛方便隨宜所說法一。惡口而顰蹙。數數見二擯出一。

法華經に云く、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に、未だ得ざるをこれ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。或は阿練若に、納衣にして空閑に在り、自ら眞の道を行ずと謂ひて、人間を輕賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣の與に法を說き、世に恭敬せらるゝこと六通の羅漢の如くならん。乃至常に大衆の中に在りて我等を毀らんと欲するが故に、國王大臣婆羅門居士及び餘の比丘衆に向ひ、誹謗して我が惡を說き、是れ邪見の人、外道の論議を說くと謂はん。濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん。惡鬼其身に入りて我を罵詈し毀辱せん。濁世の惡比丘は佛の方便隨宜所說の法を知らず。惡口して顰蹙し、數々擯出せられん。

○法華經　此處に引かれたのは法華經勸持品の偈で、末世に出て法華經を弘むる者に諸種の迫害の集り來るべきことを說かれたるものである。○惡世の中　末世に及んでは正法が廢れて濁惡となる故に、惡世といふのである。○阿練若　また阿蘭若ともいふ。閑寂の義で、即ち市街を離れたる閑靜な場所のことであるが、轉じて佛寺の意に用ゐらるゝのである。○納衣　人の棄てかへりみぬ布を拾ひ集め、それを綴り合せて法衣とする故に納衣といふ。又その見窶らしい所から糞掃衣ともいふ。○利養　財利を得て安らかに身を養はうと思ふのである。○白衣　印度では中流以上の人は白衣を着たもので、即ち世間の地位あり勢力ある人のことである。○六通の羅漢　六種の神通力である。一には天眼通、いかなる遠くも照し見るのである。二には天耳通、いかなる音をも聞き分るのである。三には他心通、他人の心を皆察し知るのである。四には宿命通、自己及び他人の前世の事を皆知るのである。五には神足通いかなる所へも自在に行き得るのである。六には漏盡通、漏とは煩惱のことで、凡ての煩惱を除く力を有することである。○我等を毀らんと　佛の眞實の敎

を世に弘めんとする者を却て敵として、之を罵るのである。○是れ邪見の人　正道を見得ぬのが即ち邪見である。彼の惡比丘が正しい敎を弘むる者を讒言して邪見の人といひ、佛說に背反する者といふのである。○濁劫　劫とは長い間といふことであるが、時代といふ意に用ゐてある。即ち濁惡の時代といふこと。○惡鬼其身に入りて　正法を辨へ知らぬ人の心に惡鬼が入り代つて、正しい人に幾多の迫害を加へるのである。○佛の方便隨宜所說の法を知らず　佛は聽く人の機根に應じて之に相當する敎を與へらるゝので、これ即ち方便であり、隨宜の說である。しかし是は皆眞實の敎に歸着せしむべき爲である。此理を知らぬ者がいつ迄も方便の說にのみ囚はれて、却て眞實の敎を弘むる者を敵とするのである。○顰蹙　正法を弘むる者を惡んで眉をひそめ、顏に皺を寄せるのである。○數々擯出せらる　正法を弘むるものが主權者の迫害にあひ、幾度も所を追はれるのである。

此處に引用されたのは勸持品の偈に出たる文で、法華經を末世に弘むる者の覺悟を遺憾なく述べ盡されたるものである。日蓮上人の一生は此の文の實現であるといふも

不可ではない。法華經は末法の世に於て遍く流布すべきに定まつたものではあるが、其の流布に魁する人の一身には有らゆる危難が加はるべきで、その危難を堪へて此經を弘むるに就ての決心を述べたものが此の勸持品である。法華經を弘むるものに對する迫害は三種の人から加へらるゝのである。その一を俗衆增上慢といひ、その二を道門增上慢といひ、その三を僭聖增上慢といふ。增上慢とは自ら正しい道に達せずして既に達し得たりと信じ他を輕んじ侮る者である。それ故に自分の信ずる所の道が誤りであると聞けば、少しも反省せずして直ちに怒りを發するのである。俗衆增上慢といふは在俗の人、道門增上慢といふは出家の人で、共に正法を弘むる者に敵對するのである。その俗衆增上慢の人のことを勸持品には、

諸の無智の人の惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者あらん。

とある。次に道門增上慢の人のことを、

惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に、未だ得ざるをこれ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。

といつてある。而して此處に引用したる文は第三の僭聖增上慢の人のことである。これは僧徒の中でも殊に外形をつくろふことに巧みなもので、名利を求むる念の強いのを外には現はさず、日々の行ひを謹んで居るので世間の信用もあつく、宛も聖人かなぞのやうに見せかけて居る者である。斯る徒が當世の地位ある勢力ある者と結び付いて、正法を弘むる者に迫害を加へるのは最も害毒が甚しいのである。唐の妙樂大師が『第三最も甚し』といつたのは此の僭聖增上慢の者の害迫を指したのである。斯る僧徒は若し法華經が世に弘まれば自分達の立脚地が全く無くなつてしまふ故に、法華經の行者を誣ゐて『彼等のいふ所は佛說ではない、外道の說である、彼等は邪見の徒である』といふ。それを當世の有力なる人々が信じて、法華經を弘むる者に壓迫を與へ、その爲に幾度も住む所を追ひ拂はれるやうな目に逢はせるのである。日蓮上人當時の極樂寺の良觀などは正しく此の第三の增上慢の人に相當するので、北條氏一門が其の讒言を信じたるが爲に、日蓮上人は伊豆へ流され或は佐渡へ流されなどして、『數々擯出せらる』の文が其身に實現した。上人が

既に經文の如く惡口罵詈、刀杖瓦礫、數々見擯出と說かれて、かゝる目に値ひ候こそ法華經を讀むにて候らめと、いよ〳〵信心も起り後生も賴もしく候。——佐渡御勘氣鈔

といふは其の自信の動すべからざることを語るものである。

涅槃經云。我涅槃後。無量百歲。四道聖人。悉復涅槃。正法滅後。於二像法中一。當レ有二比丘。似二像持律一。少讀二誦經一。貪二嗜飲食一。長二養其身一。雖レ著二袈裟一。猶如二獵師。細視徐行一。如二猫伺レ鼠。常唱二是言一。我得二羅漢一。外現二賢善一。內懷二貪嫉一。如下受二啞法一婆羅門等上。實非二沙門一。現二沙門像一。邪見熾盛。誹二謗正法一。就レ文見レ世。誠以然矣。不レ誡二惡侶一者。豈成二善事一哉。

涅槃經に云く、我が涅槃の後無量百歲にして、四道の聖人も悉く復た涅槃せん。正法滅して後、像法の中に於て當に比丘有るべし。持律に似像して少しく經を讀誦し、飲食を貪嗜して其身を長養し、袈裟を著すと雖も猶ほ獵師の細めに視て徐に行くが如く、猫の鼠を伺ふが如し。常に是言を唱へん、我羅漢を得たりと。外には賢

善を現じ内には貪嫉を懷く、唖法を受くる婆羅門等の如く、實は沙門に非ずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せんと。文に就て世を見るに誠に以て然り。惡侶を誡めずんば豈に善事を成さんや。

○四道の聖人　凡夫の境界を脱したものを聖人といふのであるが、此處にいふのは小乘の敎によつて覺を得た者のことである。それに四種あつて、また四果ともいふ。即ち一に須陀洹、二に斯陀含、三に阿那含、四に阿羅漢である。須陀洹とは入流の義で、即ち聖人の流に入るを得たばかりの者である。斯陀含とは一來の義で、まだ充分に覺り切らぬ故に一度ぐらゐは元の凡夫の狀態に戻るかも知れぬ者である。阿那含とは不來の義で、決して凡夫の境界には歸り來らぬ者である。阿羅漢は前にもいふ如く煩惱を去り盡したる者で、小乘の徒の最上の者である。○正法像法　佛の敎が佛の本意を失はずして實行せらるゝ時代が正法の世である。それが唯だ形體のみを存して精神を失つた時代が像法の世である。○持律に似像し　佛の戒律を嚴しく守るやうに外面を裝つて、心はそれに背いて居るのである。○獵師　彼の僧等は獵師が身を潛めて鳥や獸をねらふやうに、竊かに有力なる檀家を得るのに苦心して居るのである。○貪嫉を懷く　自身の名利を貪り、他人の勢力を妬むのである。○唖法を受くる婆羅門　婆羅門敎には種々の修行がある。定まつたる時の間無言の行をするのを唖法といふのである。○沙門　譯して勤息といふ。勤めて道を求め煩惱を止むるの義である。○文に就て世を見る　此の涅槃經等の本文と、今の世の中の僧侶とを照し合せて見ると、全くその通りである。

此の涅槃經の文は末世に出て法を說く者の弊を說いてまことに適切を極めて居る。僧となれば袈裟を着くるのであるが、袈裟は元來青赤のやうな正色を避けて濁つたる雜色で染めるのである。これは美しい色に心を惹かれぬことを現はすもので、即ち煩惱を除いたるしるしである。然るに袈裟を着けて居ながら煩惱が熾盛であつて名利を貪る念が止まぬのは、自ら欺き他を欺く者である。其の外貌に無欲を裝つて竊かに名利を求むるさまを獵師が足音を忍ばせて獲物を探し、猫が物蔭から鼠を伺ふに譬へたのは如何にも痛切である。斯く自分に歸依する者が多くて布施も多く勢力も盛ならん

ことを熱望して居る故に、他の寺が盛なのを見れば必ず之を嫉妬するのである。即ち『内には貪嫉を懷く』といふが其の實狀である。又出家の人を沙門といひ或は桑門ともいふが、勤めて佛道を求め自ら煩惱を止息せしむるの意で、智度論には婆羅門と沙門の異る所を述べて、

婆羅門は多く學び智慧をもて福を求む。出家の人は一切道を求む。

といつてあるが眞に名言である。道を求むるものは世間の福利を求むる念などの無かるべき理である。然るに沙門の像を似せながら實は沙門にあらざる者が、末世になつては非常に多いのである。日蓮上人の當時には尼に賴つて武家の奥向きに緣を求め、己の宗派に都合の宜いやうなことを計畫する僧も少からずあつた。上人の佐渡配流の事の如きも、斯樣の企てが効を奏したのである。實に涅槃經の文を其儘ともいふべき有樣である。

客猶憤曰。明王因二天地一而成レ化。聖人察二理非一而治レ世。世上之僧侶者。天下之所レ歸也。於二惡侶一者。明王不レ可レ信。非二聖人一者。賢哲不レ可レ仰。今以二賢聖之尊重一。則知二龍象之不レ輕。何吐二妄言一。强成二誹謗一。以二誰人一謂二惡比丘一哉。委細欲レ聞矣。

客猶ほ憤りて曰く、明王は天地に因りて化を成し、聖人は理非を察して世を治む世上の僧侶は天下の歸する所なり。惡侶に於ては明王信ずべからず。聖人に非ずんば賢哲は仰ぐ可からず。今賢聖の尊重せるを以て則ち龍象の輕からざるを知んぬ。何ぞ妄言を吐き强て誹謗を成し、誰人を以て惡比丘と謂ふや。委細に聞かんと欲す。

○惡侶に於ては　今の世の僧侶が惡い者ならば、朝廷に於ても又武家に在つても之を尊信する筈がない。○賢聖の尊重　當世のすぐれた人々が皆諸寺の僧を尊敬して居る。○龍象　水を行く者の中では龍が最も力あり、陸を行く者の中では象が最も力あるものである。それで德の高く力のすぐれた者を龍象といふのである。即ち高僧碩學をほめたる語である。『威儀巧妙最も比無し、是を龍象の自在力と名く』と華嚴經にもある。

第二段の問答が終つて第三段の問答に入るのである。今迄はたゞ當世の僧徒の佛意に背いて私曲を謀ることのみを責めて、未だ何れの宗派が惡いのであるか明言して無

いのであるが、更に客の言を假り設けて、淨土宗に對する折伏の端を發するのである。王朝時代に於て佛敎が凡ての有力者の歸依を得たことは前にもいつたが、武家も皆佛敎に歸依せぬ者は無かつた。殊に北條氏歷代の執權の中でも賢人の聞えのある泰時は栂尾の明惠上人に歸依してゐた。諸國を歷遊して人情風俗を察し、民治の上に深く心を注いだといふ最明寺時賴は深く禪宗に歸依した。其子の時宗に至つては殊に信仰あつく、或は父にもまさる程であつた。此等の非凡な人物の歸依を受けた僧侶は何れも高德の人の如く思はれたのも無理はない。併し日蓮上人には別に主張がある。

主人曰。後鳥羽院御宇。有二法然一。作二選擇集一矣。則破二一代之聖敎一。遍迷二十方之衆生一。其選擇云。道綽禪師立二聖道淨土二門一。而捨二聖道一。正歸二淨土一之文。初聖道門者。就レ之有レ二。乃至準レ之思レ之。應レ存二密大及以實大一。然則今眞言佛心天台華嚴三論法相地論攝論。此等八家之意正在レ此也。曇鸞法師往生論註云。謹案二龍樹菩薩十住毗婆沙一。云菩薩求二阿毗跋致一。有二二種道一。一者難行道。二者易行道。此中難行道者。即是聖道門也。易行道者。即是淨土門也。淨土宗學者。先須レ知二此旨一。設雖レ先學二聖道門一人上。若於二淨土門一有二其志一者。須レ棄二聖道一、歸レ於淨土上。

主人の曰く、後鳥羽院の御宇に法然といふもの有り、選擇集を作る。則ち一代の聖敎を破し、遍く十方の衆生を迷はす。其の選擇に云く、道綽禪師が聖道淨土の二門を立て、聖道を捨て正しく淨土に歸するの文。初に聖道門とは之に就て二有りと乃至之に準じて之を思ふに、應に密大及び實大を存すべし。然れば則ち今の眞言、佛心、天台、華嚴、三論、法相、地論、攝論、此等の八家の意は正しく此に在るなり。曇鸞法師が往生論の註に云く、謹んで龍樹菩薩の十住毗婆沙を案ずるに、云く菩薩阿毗跋致を求むるに二種の道有り。一は難行道、二は易行道なりと。此中の難行道とは即ち是れ聖道門なり。易行道とは即ち是れ淨土門なり。淨土宗の學者先づ須らく此旨を知るべし。設ひ先より聖道門を學ぶ人と雖も、若し淨土門に於て其志有らん者は、須らく聖道を棄て淨土に歸すべし。

○法然　美作の人で、初めは天台宗の僧であつたが、種々研究を積んだ末に唐の善導の『觀經疏』を見て大に感じ、專修佛念を主張して淨土宗を開いた。それは高倉

天皇の安元元年で、平氏の全盛の時である。教を弘むること三十餘年にして、順德天皇の建暦二年に八十歳を以て入寂。○選擇集　後鳥羽天皇の建久九年（淨土宗をはじめてから二十三年後）に九條兼實の請によつて作つたものである。『選擇本願念佛集』といふのを、略して一般に選擇集と呼んでゐる。佛教は非常に多方面であるが、其中の何れを擇んで末世に生れたる吾等の信仰を定むべきかを究めて、阿彌陀佛を念するの外はないと決定し、其の證となるべきものを集めたのである。○道綽禪師　唐の貞觀年中に念佛を弘めた高僧で、其著に『安樂集』といふのがある。○聖道淨土の二門　多くの經論を研究して成佛の道を求むるのが聖道門である。偏に彌陀の力に依つて成佛を期するのが淨土門である。往て極樂淨土に生るゝことが目的であるが故に淨土門といふ。○密大及び實大　大乘教の中で、眞言宗では大日經の中に說かれた所を密教といひ、他の凡てを顯教といふ故に、此宗を密大といふ。天台宗では法華經を眞實の教として、他を凡て方便とする故に、此宗を實大といふのである。○佛心　即ち禪宗のことである。吾が自性は即ち佛心であることを悟るのが主である故に、佛心宗ともいふのである。○地論攝論　此の二宗は唐時代に一時起つたが幾くもなく廢れ、吾國には傳はらなかつた。○曇鸞法師　南北朝の頃に念佛を弘めた高僧で、尤も魏主に歸依せられた。○往生論の註　往生論はまた淨土論ともいひ、印度の天親の作といひ傳へてある。それに註解を加へたものである。○龍樹菩薩　佛滅後七百年代に印度に生れ、大乘の佛教を弘むるに大なる力となつた人である。眞言宗で龍猛と呼ぶのも同じ人の事である。○十住毗婆沙　龍樹の作の十住毗婆沙論は羅什の譯で十卷となつてゐる。華嚴經の意を敷衍したものである。十住とは大乘の教を修むるものゝ十種の境界である。毗婆沙とは廣く說くといふ義である。○阿毗跋致　譯して不退轉といふ。成佛の路を求めて、心が少しも動搖せず退轉せぬをいふのである。

阿彌陀佛に對する信仰は法然上人に始まつたのではなく、既に王朝時代からある。但し法然上人の特色は專修念佛を唱ふるに在る。王朝時代に於ては唐との交通があつたので、思想上に多くの影響を受けたことはいふ迄も無い。而して支那に於て阿彌陀

佛の信仰の盛になつたのは即ち唐代である。支那に於ける佛教は南北朝時代に於て可なりに盛であつたが、隋より唐に至つて愈々隆昌を極め、高僧碩德ともいはれる人々が輩出した。それで天台、三論、法相、華嚴、眞言といふやうな諸種の大乘教が相並んで榮えて來た。その中に在つて念佛の教もまた次第に勢を得るやうになつた。彼の南北朝時代に於て既に無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經（いはゆる淨土の三部經）及び天親の作なる淨土論等の漢譯は既にそろつて居た。尤も此より前に東晉の時代に廬山の慧遠法師が既に念佛の行を始めたが、さまで盛にはならなかつた。然るに南北朝の末、北魏に曇鸞が出て淨土論の註を作つて弘め、唐に至り道綽と善導との二人が出たので、念佛の教は非常な勢を以て弘まつた。日本に遍く弘まつたものは此の善導の餘流である。吾が平安朝の初期に於ては傳教弘法の二師によつて、天台眞言の二宗が弘められたのであるが、前にもいふやうに唐と交通の頻繁である間に自然と念佛の教も傳はつて來た。尤も人々が現世の利益のみを求めて、家の繁昌や身の榮達を祈つて居る間には、現世を穢土として思ひを絶ち、專ら來世を賴めといふやうな教が勢力を得やう筈はないが、時代は段々と動いて來た。平安朝も半をすぎて世間は次第に複雜となり、各地方には種々の騷亂も起り、京都でも藤原氏一門の中に内訌も繁くなり、世の中の煩はしさ苦しさを誰も深く思ひ知るやうになると、信仰の上にもまた新しい途が開けなければならぬやうになるわけである。此の機會を捉へて念佛を唱へ出したのは空也上人である。（圓融天皇の天祿三年七十七歳で寂。）此人はもと天台宗の僧であつたが、京の町に立つて往來の人に向ひ、現世に心を囚はるゝことをやめて阿彌陀佛の力に縋り、極樂に往生することを期せよと勸めたのである。京都の人で之に歸依するもの少からず、後には東國を遍歴してなほ多くの人の歸依を得たといふことである。其後叡山に慧心僧都が出て（後一條天皇の寛仁元年、七十六歳で寂。）往生要集を作り、往生極樂の教行を勸めた。此集のはじめには、

夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰か歸せざる者あらん。

といひ、又

夫れ三界は安きこと無し、最も厭離すべし。

といひ、主として來世の安樂を求むべき道を述べてある。其の後を承けて鳥羽天皇の御字に良忍上人が出て（崇德天皇の長承元年、六十一歳で寂。）融通念佛を唱へた。此等の人々は何れも法然上人の現はるべき前驅を爲したともいひ得べく、それ〴〵に世間を動す力をもつて居たのである。世間もまた追々に騷がしくなつて、不平や苦悶を懷く人が多くなつたから、此世を穢土と見て專ら來世を賴むといふ敎が人心に投じて、多くの歸依者を得たわけである。しかし此等の人々はたとへ阿彌陀佛の貴いことは說いても、阿彌陀佛以外の神佛を一切賴むなといふ程には强く主張しなかつた。法然上人は此等の人々の後に出て淨土門の敎を立て、阿彌陀佛のみに歸依して他の神佛に對する歸依を一切やめなければならぬといふことを主張した。即ち專修念佛である。その理由は此より以下に引用せられたる文によつて明である。

法然上人の敎義を知るのには選擇集二卷を讀めば充分であるが、此書は經文や支那の高僧の著書の中から、淨土門の肝心たるべき語を抄出し、之に『私に云く』として法然上人自身の意見を附記したものである。今此處に引用したる文は、その第一段に道綽の安樂集の文を引いて、之に『私に云く』として附記したる中から處々を抄錄したものである。道綽の安樂集には、一切衆生皆佛性を具しながら、いつ迄も佛に成ることの出來ぬのは何の爲であるかとの問を設け、それは佛に成るべき道の擇み方が間違つて居るからであると斷定してある。その理由は諸經の中に示されたる敎を自ら研究して成佛の道を求むるは（之を聖道門といふ）末世に生れて機根の劣つた者の力で到底及ばぬ所である。それよりも一切の思案をすてゝ阿彌陀佛を念ずる時は、（之を淨土門といふ）必ず成佛の望みを達し得べきである。然るに此の兩途に就ての選擇を誤る故に何人も成佛が出來ぬのであるといふので、之を無量壽經の文によつて證據立てゝある。此文について法然上人は更に種々の書を引用して其意を敷衍し、淨土門以外の敎に依るの不可なることを縷說した。何にせよ『大聖を去ること遙遠なり』といつて、釋尊の時代とは非常に離れて居るから、人々の機根も著しく下つて居る。又多くの經典を研究しやうとしても『理深く解微なり』といつて、其の敎理が深遠であるのを、理解すべき力が至て微弱である故に、いかに研究しても間に合はぬ。それよりも

専心にたゝ阿彌陀佛を念じて來世の極樂往生を期するに如くものは無い。譬へば陸を行くのは自分の足に依らなければならぬから非常に骨が折れる。水上を行けば舟に乗るのであるから少しも骨は折れぬ。聖道門は陸行の如く難行道である。淨土門は舟行の如く易行道であるといふのが、即ち淨土宗の主張である。

又云。善導和尚立二正雜二行一。捨二雜行一歸二正行一之文。第一讀誦雜行者除二上觀經等往生淨土經一已外。於二大小乘顯密諸經一。受持讀誦。悉名二讀誦雜行一。第三禮拜雜行者。除二上禮二拜彌陀一已外。於二一切諸佛菩薩等。及諸世天等一。禮拜恭敬一。悉名二禮拜雜行一。私云。見二此文一。須二捨レ雜修レ專。豈捨二百即百生專修正行一。堅執二千中無一雜修雜行一乎。行者能思二量之一。

又云く、善導和尚が正雜の二行を立て、雜行を捨て正行に歸するの文。第一に讀誦雜行とは、上の觀經等の往生淨土の經を除て已外、大小乘顯密の諸經に於て受持讀誦するを、悉く讀誦雜行と名く。第三に禮拜雜行とは、上の彌陀を禮拜するを除て已外、一切の諸佛菩薩等及び諸の世天等に於て禮拜恭敬するを、悉く禮拜雜行と名くと。私に云く、此文を見るに須らく雜を捨て專を修すべし。豈に百即百生の專修正行を捨て、堅く千中無一の雜修雜行を執らんや。行者能く之を思量せよ。

○善導和尚　唐の高宗の時に念佛を弘めた高僧である。觀經疏、往生禮讃、その他淨土門の主張を明にするに最も有力なる著書がある。○正雜の二行　心が正しく彌陀にのみ向ふのが正で、他にも向ふのは雜である。○觀經等　觀無量壽經のことを略して觀經といふ。之に無量壽經と阿彌陀經とを併せて淨土の三部經といふのである。○往生淨土の經　三部の經はいづれも阿彌陀如來の德をたゝへ、其力に依つて西方の極樂淨土に生を受くるに志すべきことを敎へたものである。○世天　世とは人界のこと、天とは天上界のことである。人界の神々や、天上界の善神や、その外尊敬すべき者を汎く世天と呼ぶのである。○百即百生　彌陀の力を賴めば百人が百人とも必ず極樂に生を受くることが出來るのである。○千中無一　自分の力で經論等を研究して成佛を得るものは千人中に一人も無いといふのである。

此處に引用せられたのは選擇集の第二段、善導和尚の『觀經の疏』の文に、例の如

く『私に云く』として法然が附記した中から抄出したものである。善導の意によれば五種の正行を分つのである。一には讀誦正行、三部經のみを讀むこと。二には觀察正行、彼の西方淨土の事のみを考へてゐること。三には禮拜正行。阿彌陀佛のみを禮拜すること。四には稱名正行、專ら彌陀の名號のみを唱ふること。五には讃歎供養正行、專ら彌陀を讃歎し供養することである。此中で第四の稱名が最も大切なので之を正業といひ、他の四種を助業といふ。信仰は純一でなければならぬものであるから既に阿彌陀佛を賴んで西方極樂淨土に往生せんことを願つた以上は、その他の神佛の力を賴んではならぬ。他の神佛を賴むといふは即ち彌陀の洪大なる慈悲を疑ふことになるので、これは正しい信仰ではない。斯ういふ理由から五種の雜行を戒むるのである。それは一に讀誦雜行、二に觀察雜行、三に禮拜雜行、四に稱名雜行、五に讃歎供養雜行である。此等の雜行はいづれも往生極樂の因とはなり得ぬのである。それで善導の著はしたる往生禮讃の中には、

若し能く上の如く念々に相續して畢命を期とする者は、十即ち十生じ百即ち百生ず

何を以ての故に。外の雜念なく正念を得るが故に、佛の本願と相應することを得るが故に。云々

とある。念々相續といふは常に彌陀を賴む念の絶えぬをいふので、十即ち十生ずとは十人が十人ながら皆極樂に生を享くることが出來るといふのである。又此文の續きに、

余頃ろ自ら諸方の道俗を見聞するに、解行同じからず專雜異ることあり。たゞ心を專にして爲さしむる者は十即ち十生ず。雜を修して至心ならざる者は千が中に一もなし。

といつてある。法然上人は此意に基いて、十即十生の念佛を勸めたのである。

又云。貞元入藏錄中。始自二大般若經六百卷一。終二于法常住經一。顯密大乘經。總六百三十七部。二千八百八十三卷也。皆須レ攝二讀誦大乘之一句一。當レ知隨他之前。暫雖レ開二定散門一。隨自之後。還閉二定散門一。一開以後永不レ閉者。唯是念佛一門。

又云く、貞元入藏錄の中に、始め大般若經六百卷より、法常住經に終るまで、顯密の大乘經總じて六百三十七部、二千八百八十三卷なり。皆須らく讀誦大乘の一

句に攝すべし。當に知るべし、隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も、隨自の後には還て定散の門を閉づ。一たび開いて以後永く閉ぢざる者は唯だ是れ念佛の一門なり。

○貞元入藏錄　また『貞元新定釋敎目錄』といふ。唐の貞元十六年に勅命によつて圓照の撰する所で三十卷ある。即ち後漢明帝の永平年中から此年までに支那で飜譯せられたる經論の總目錄である。○讀誦大乘の一句に攝す　凡ての經論の趣意は、大乘經典を讀誦して其の眞意を知り、自ら成佛の道を求めよといふことに歸着する。攝とは其中に收め入るゝ意である。○隨他の前　方便の敎は聽く人の機根に隨つて說くものである故に、之を隨他の說といふである。○定散の門　決定したる心を以て善い行をするのを定善といふ。散亂したる心ながらに善い行をするは散善である いづれも功德があると說くが即ち二門を開くのである。○隨自の後　佛が自ら眞實と思ふ所をそのまゝに說かれたのを、隨自の說といふのである。前には隨他の說、後に至つて隨自の說が出たのである。○定散の門を閉づ　散亂の心を以てしたる善行は功德が無いと斷言せられたのである。○念佛の一門　善人も惡人も智者も愚者も、彌陀を念じさへすれば皆成佛が出來るので、此一つの道のみは永く吾等の前に開かれてあるのである。

此處に引用したのは選撰集の第十三段で、『釋尊定散の諸行を付屬せず、たゞ念佛をもて阿難に付屬したまふの文』といふ條である。先づ觀無量壽經の文が引いてある、それは

佛阿難に告げたまはく、汝よく是語を持てよ。是語を持てとは即ち無量壽佛の名を持てとなり。

といふのである。次に同經の疏には此意を說明して、

佛告阿難汝好持是語より以下は、正しく彌陀の名號を付屬して遐代に流通し給ふことを明す。上來定散兩門の益を說くと雖も、佛の本願に望むれば、こゝろ衆生をもて一向に專ら彌陀佛の名を稱せしむるにあり。

とある。此次に例の如く法然上人自身の見る所を記した中に、

定散は廢のために說き、念佛三昧は立のために說く。

とある。定善も散善も一應は皆善であると說いてあるけれども、それよりも更に善い道があるとて定散二善對立を斥けたのであるから、之を廢といふのである。然る後に念佛三昧は凡ての善の本であると說くのが即ち立である。勿論その淺深に拘はらず善事は皆善事であるけれども、凡夫と佛とは非常の懸隔がある故に、いかに善事を積んでも佛の境界にまで達することは望むべからざる所である。況んや末世に生れたる者は機根も劣つて居るのであるから、彌陀の御力に依り縋るより外には、凡夫の境界を脫すべき方法はない。斯く論じ來つた結論として、

諸行を廢して念佛に歸せしむる所以は、即ち彌陀の本願たる上に、またこれ釋尊付屬の行なればなり。故に知んぬ、諸行は機にあらず、時を失へり。念佛往生は機に當り時を得たり。感應豈に唐捐ならんや。當に知るべし隨他の前には……

と此處に引いた文に入るのである。釋尊の敎をすてゝ阿彌陀佛を賴むのが時を得たものであるとは善導以下念佛門の人々の說である。之に反して法華經を信ずるが時を得たものであるといふは、經文に基いて立てたる日蓮上人の說である。

又云。念佛行者。必可レ具二足三心一之文。觀無量壽經云。同經疏云。問曰。若有二解行不同。邪雜人等一。防二外邪異見之難一。或行一分二分。群賊等喚回者。即喩二別解別行惡見人等一。私云。又此中言二一切別解別行異學異見等一者。是指二聖道門一。

又云く、念佛の行者必ず三心を具足す可きの文。觀無量壽經に云く。同經の疏に云く。問て曰く、若し解行の不同なる邪雜の人等有りて外邪異見の難を防がん。或は行くこと一分二分にして群賊等喚び回すとは、即ち別解別行惡見の人等に喩ふと。私に云く、又此中に一切の別解別行異學異見等といふは、是れ聖道門を指すなり。

○三心具足　一には至誠心、眞實に淨土に生ぜんことを願ふ心である。二には深心。深く淨土を願ふ心である。三には回向發願心、自ら修むる所の功德によつて淨土に生ぜんことを願ふ心である。○觀無量壽經　釋尊が韋提希夫人のために阿彌陀佛及び淨土の相を說かれたもので、一卷である。○同經の疏　前にいふ唐の善導の作る

所である。○解行　佛の敎を解すると、それを身に行ふとの二である。○邪雜の人
　正しい信仰をもたぬ人と、心が專一でなく彌陀以外の佛等をも賴む人である。○
別解別行　彌陀と淨土と以外のことを思ふを凡て別といふのである。○私に云く
即ち法然上人の考へをいふのである。
此段も聖道門をすてゝたゞ淨土門にのみ依る者が必ず往生極樂の願を達し得べきこ
とを明すために、觀無量壽經の文と同經の疏の文とを引いたのである。經の文は
若し衆生有りて彼國に生ぜんと願せば、三種の心を起してすなはち往生す。何等を
か三と爲す。一には至誠心、二には深心、三には回向發願心なり。三心を具するも
のは必ず彼國に生ず。
といふのである。其次に引いた同經の疏の文は非常に長いものであるが、その中段に
至つて問を設け、
問て曰く、若し解行の不同なる邪雜の人等有りて來りて相惑亂し、或は種々の疑難
を說きて往生を得ずといひ、或は云く汝等衆生、曠劫よりこのかた及び今生の身口
意業に、一切凡聖の身上に於て具に十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等の罪を作り
て、未だ除き盡すこと能はず。然るに此等の罪は三衆の惡道に繫屬す。いかんぞ一
生の修福念佛をもて、すなはち彼の無漏無生の國に入り、永く不退の位を證悟する
ことを得んや。
といひ、此の疑問に答ふるために有名なる二河白道の譬喩を用ゐて、彌陀の慈悲の洪
大無邊なることを說くのである。その大意をいへば、人あり西に向つて百千里の道を
行かんとするに、忽然として眼前に二つの河が現はれた。一は火の河で一は水の河で
あるが何れも百步の廣さで深さは測り知られぬ。二河の間に一の白道がある、これは
僅かに四五寸の廣さである。後の方からは又多くの賊や惡獸が漸く近づいて來る。此
人は狹い白道を踏んで西の方へ進んで行かうと決心した。其時東の方の岸に人聲がし
て『たゞ決定して此道を尋ねて行け、必ず死の難無けん。もし止まらばすなはち死せ
ん』といつた。又西の方からも人の聲がして『汝一心正念にして直ちに來れ、我よく
汝を護らん』といつた。此人は念々賴もしく感じて眞直に進んで行くと、多くの賊等

はうしろから聲をかけて『この道嶮しく惡し過ることを得じ、必ず死せんこと疑はず』といひ、早く返つて來いと誘惑したけれども、此人は一心になつて彼の白道を進み、終に西の方に到着して多くの善友と、永く樂みを享けたといふのである。此の譬喩の中の火の河といふは衆生の瞋憎の念、水の河といふは其の貪愛の念である。白道といふは往生極樂を求むる心である。東岸の人の聲といふは釋尊の敎のことで、西岸の人の聲といふは彌陀の願をいふのである。多くの賊がうしろから喚びかへしたのは、念佛以外の敎をすゝめて、往生極樂を妨ぐる者のことで、即ち

或は行くこと一分二分にして群賊等喚び回すとは、即ち別解別行惡見の人等、妄りに見解を說きて互に相惑亂し、及び自ら罪を作りて退失するに喩ふるなり。

といつてある。法然上人は例の如く此末に『私に云く』とて其の意見を附け加へ、經文と疏の文とによつて、三心具足してはじめて極樂に生ずることを得べきよしを反覆して述べ『明に知んぬ三を具すれば必ず生ずることを得べし』といひ、『明に知んぬ、一も缺けぬればこれ更に不可なり』といひ、三心具足の人は決して彌陀以外の佛を賴

んだり、他の經論等に心を傾けたりするものでないから、疏の中に群賊に譬へられたる別解別行異學異見の者といふは、即ち聖道門の學者の事であると斷じたのである。尊い佛の遺されたる經文を研鑽し或は解釋して一切衆生を益せんとする人々を群賊に比する如きは、あまりに甚しい暴言であると、日蓮上人によつて痛烈なる呵責を加へられたのは、下の文を見れば自ら明である。

又最後結句文云。夫速欲ㇾ離ニ生死一。二種勝法中。且閣ニ聖道門一。選入ニ淨土門一。欲ㇾ入ニ淨土門一。正雜二行中。且拋ニ諸雜行一。選應ㇾ歸ニ正行一。

又最後結句の文に云く、夫れ速に生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に且く聖道門を閣き、選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲せば、正雜二行の中に且く諸の雜行を拋ち、選んで應に正行に歸すべし。

○二種の勝法　聖道門も淨土門も共に、凡ての人に覺を得せしむることを旨とするものであるから勝法といふ。○諸の雜行　彌陀以外のものを念ずるは皆雜行であるから、雜行の種類は限りなくあるわけである。

是は選擇集の末段の文で、阿彌陀經と善導の法事讃とを引いて、法然上人の意見を之に加へたのである。

釋迦彌陀及び十方各恒沙等の諸佛、心を同しくして念佛の一行を選擇したまへり、餘行は然らず。故に知んぬ、三經ともに念佛を選びて以て宗致とするのみ。

とあつて、此の『夫れ速に生死を』云々の文となり、その次に

正行を修めんと欲せば、正助二業の中には猶ほ助業を傍にし、選んで應に正定を專にすべし。正定の業といふはすなはち是れ佛名を稱するなり。名を稱すれば必ず生ずることを得、佛の本願に依るが故なり。

といつてある。經を讀んだり佛を讃嘆したりするのは念佛の功德を補ふ業であるから、之を助業と名くるのである。これも無用の業ではないが、主として佛名を稱することに專心であるべきである。此の簡短なる敎は其の時代の人心に投じて、忽ちにして多くの歸依者を得た。熊谷直實が法然上人に謁して、極樂に往生するの道を問うた時、法然はたゞ專心に彌陀の名を唱へよと敎へた。直實は之を聞いて頻りに落涙してゐたので、法然は怪んでその故を問うた。直實は之に答へて、『我は久しく戰場に往來して居たものであるが、人に認めらるゝやうな手柄をするのには生命を賭して奮鬪をしなければならぬ。極樂に往生するといふ如きは、戰場で功を立つるよりも遙かに重大なることである。されば如何程多くの苦勞を積まなければならぬのかと思つて御尋ねしたところが、たゞ彌陀の名號を唱へされすれば宜いと承つて意外の感に堪へぬ。唱名の功德がそれ程に大きいかと思へば、あまりの忝さに落涙を止めあえぬのである』といつたと傳へられて居る。此の直實の如き心で、淨土門に歸依した者が當時は夥しかつたと見える。日蓮上人が曾て

廣學多聞の智慧も空しく、諸宗の頂上たる天台宗を打捨て、八宗の外なる念佛者の法師となりにけり。……一天の貴賤首を傾け四海の道俗掌を合せ、或は勢至の化身と號し或は善導の再誕と仰ぎ、一天四海になびかぬ木草なし。――念佛無間地獄鈔

と形容したのに依ても其の勢力の程は察せられやう。此の勢力は武家の間にも乃至は百姓町人の間にも目覺しい有樣で擴がつて行つた。上人が此の大勢力に對して奮起し

たる意氣は眞に驚嘆すべきものといはなければならぬ。

就レ之見レ之。引二曇鸞道綽善導之謬釋一。建二聖道淨土難行易行之旨一。以二法華眞言。總一代之大乘六百三十七部。二千八百八十三卷。一切諸佛菩薩。及諸世天等一。皆攝二聖道難行雜行等一。或捨或閉或閣或抛。以二此四字一。多迷二一切一。剩以三三國之聖僧。十方之佛弟一。皆號二群賊一。併令二罵詈一。近背二所依淨土三部經。唯除五逆誹謗正法誓文一。遠迷二一代五時肝心。法華經第二。若人不信毀謗此經。乃至其人命終入阿鼻獄誡文一者也。

之に就て之を見るに、曇鸞道綽善導の謬釋を引き、聖道淨土難行易行の旨を建て、法華眞言、總じて一代の大乘六百三十七部、二千八百八十三卷、一切の諸佛菩薩、及び諸〳〵の世天等を以て、皆聖道難行雜行等に攝して、或は捨て或は閉ぢ或は閣き或は抛つ、此四字を以て多く一切を迷はし、剩へ三國の聖僧、十方の佛弟を以て皆群賊と號し、併せて罵詈せしむ。近くは所依の淨土の三部經の唯除五逆誹謗正法の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる法華經の第二の若人不信毀謗此經、乃至其人命終入阿鼻獄の誡文に迷へる者なり。

○攝して　其中に盡く採り入れ、包容せしむること。○三國の聖僧　印度と支那と日本とに於て、大乘の佛敎を弘むるに力を致した人々である。○十方の佛弟　佛の敎は十方の世界に弘まつてゐる。十方とは東西南北と、その間の四隅と及び上下とである。○群賊と號し　彌陀以外に心が向くのは、宛も多くの賊に呼びかけられて振向くやうなものだと善導がいつて居る。○唯除五逆誹謗正法の誓文　無量壽經の中に有名なる彌陀の四十八願といふものがある。是は阿彌陀佛が一切衆生を救ふに就ての理想を述べたものである。其の第十八願に『設ひ我佛を得たらんに、十方の衆生心を致し信樂して、我國に生れんと欲して乃至十念せんに若し生れずんば正覺を取らし。唯だ五逆と正法を誹謗せんをば除く』とある。即ち如何なる人でも十たび彌陀を念ずる時は、必ず極樂淨土に生じ得るが、唯だ五逆の者と正法を誹謗するものは例外なのである。五逆とは父を殺すと母を殺すと阿羅漢を殺すと、佛身より血を出すのと、僧の和合を破るとをいふ。正法を誹謗するのは五逆と同じやうな大罪である。今彼等は正法を誹謗して居るのであるから、いかに彌陀を念じても極樂

に往生することは出來ぬ理である。○一代五時の肝心　天台大師は釋尊の一代五十年間の說法を五の時期に分つた。即ち第一華嚴の時、第二阿含の時、第三方等の時第四般若の時、第五法華涅槃の時である。而して第五の時に至り初めて眞實を說かれたのであるから之を五時の肝心といふのである。○法華經の第二　此處に引かれたのは法華經第二卷の譬諭品の偈である。○若人不信毀謗此經　譬諭品の偈の中に『若し人信ぜずして此經を誹謗せば、則ち一切世間の佛種を斷ぜん』とある。誹謗する者に迷はされて正しい信仰をすつる故に、佛と成る者は無くなつてしまふのである。○其人命終入阿鼻獄　同じ偈の中に『此人の罪報を汝今復た聽け。其人命終して阿鼻獄に入らん』とある。即ち此經を信ずる者を輕賤し憎嫉し、また之に對して敵意をもつ者は、次の生に於て阿鼻獄に墮つるといふのである。阿鼻とは即ち無間地獄のことである。

法然上人が淨土三部經以外の諸經に對する態度は捨閉閣抛の四字に盡きてゐるといつても宜い。選擇集の中に就て之を見ると、その第二段に『雜を捨て專を修す』とある。次に其の第十一段に『隨自の後には還て定散の門を閉づ』とある。而して其の末段に於ては、前節に引いてある通り『二種の勝法の中に且く聖道門を閣き、選んで淨土門に入れ』とあり、『また正雜二行の中に且く諸の雜行を抛ち、選んで應に正行に歸すべし』とある。即ち捨閉閣抛の四字によつて淨土門以外の一切の敎、淨土三部經以外の一切の經、阿彌陀佛以外の一切の佛菩薩を無視して顧みぬ意が明曉に示されてあるわけである。勿論淨土門の主張の如くに阿彌陀佛は絕對の慈悲を有したまひ、いかなる惡人と雖も阿彌陀佛の御名を唱へさへすれば必ず極樂に往生することが出來ると定まつて居るならば、捨閉閣抛も宜い途であるかも知れぬ。然るに無量壽經の中に於て阿彌陀如來が十方の衆生を盡く極樂淨土に往生せしむべき願を說かれたのにも『五逆と正法を誹謗せんをば除く』と斷つてある。釋尊が一切衆生を救はんが爲に世に出たまひ、五十年の間生命にかけて說かれたる敎を盡く無視し、又その貴い敎を世に弘めんが爲に力を盡したる人々を皆排斥して顧みぬは、即ち正法を誹謗するものではないか。斯る大なる罪を犯したものは、たとへ阿彌陀如來の大慈悲に依り縋つて極樂に

往生せんことを願つても、それは叶はぬことであると無量壽經の中に明言してある。此處に心のつかぬといふは惑へるの甚しきものといはなければなるまい。更に進んで論ずるならば、釋尊の敎が末世に至つて全くその力を失ふものゝ如くに考へ、一切の經論を拋つて專ら淨土門に心を寄せ、來世に於ての極樂往生をのみ望むといふことが、深く佛法を究めぬものゝ臆斷である。此の如き臆斷に盲從して釋尊の敎に背くのは不知恩の甚しきものといはなければならぬ。前にも繰返していつたやうに、釋尊が法華經を說かれたのは、主として末世の吾々を救はんが爲の大慈悲心に出るものである。吾々が此の大慈悲心に感激して此經を信じ、各自に努力を積むならば、末法濁惡の世はやがて化して平和安穩の世となり、こゝに佛の國土をそのまゝに移して來ることも出來るのである。斯る貴い敎をすてゝ、此世をたゞ娑婆として厭離し、西方の淨土に往生せんことを望むといふは、切角の佛の大慈悲を無視してかへりみぬ者である。斯る妄見を主張するために世の人も多く之に惑はされて、釋尊の有難い思召に背く者のみが世に多くなるのである。これ即ち『一切世間の佛種を斷ずる』の大罪である。されば淨土門を弘めて、凡ての人を釋尊に背かせんとする者は、その願とする所の極樂往生も叶はず、又一切世間の佛種を斷ずる大罪を犯す事になるのである。互に深く相戒めて、早く斯る妄見より遠ざかるやうにしなければならぬ。

於レ是代及二末代一。人非二聖人一。各容二冥衢一。並忘二直道一。悲哉不レ樹二瞳矇一。痛哉徒催二邪信一。故上自二國王一下至二士民一。皆謂下經者無二淨土三部之外經一。佛者無中彌陀三尊之外佛上。仍傳敎義眞慈覺智證等。或涉二萬里之波濤一。而所レ渡之聖敎。或回二一朝之山川一。而所レ崇之佛像。若高山之巔。建二華界一以安置。若深谷之底。起二蓮宮一以崇重。釋迦藥師之並レ光也。施二威於現當一。虛空地藏之成レ化也。被二益於生後一。故國主寄二郡鄕一。以明二燈燭一。地頭充二田園一。以備二供養一。而依二法然之選擇一。則忘二敎主一而貴二西土之佛一。拋二付屬一而閣二東方之如來一。唯專二四卷三部之經典一。空拋二一代五時之妙典一。以是非二彌陀之堂一。皆止二供佛之志一。非二念佛之者一。早忘二施僧之懷一。故佛堂零落。瓦松之煙老。僧房荒廢。庭草之露深。雖レ然各捨二護惜之心一。並廢二建立之思一。是以住持聖僧行而不レ歸。守護善神去而無レ來。是偏依二法然之選擇一也。悲哉數十年之間。百千萬之

人。被レ蕩ニ魔縁一。多迷ニ佛教一。好レ傍忘レ正。善神不レ爲レ怒哉。捨レ圓好レ偏。惡鬼不レ得レ便哉。不レ如修ニ彼萬祈一。禁ニ此一凶一矣。

是に於て代は末代に及び人は聖人に非ず、各冥衢に容りて並に直道を忘る。悲しい哉瞳矇を拭たず、痛ましい哉徒に邪信を催す。故に上は國王より下は土民に至るまで、皆經は淨土三部の外の經無く、佛は彌陀三尊の外の佛無しと謂へり。仍て傳教義眞慈覺智證等、或は萬里の波濤を渉りて渡す所の聖教或は一朝の山川を回りて崇むる所の佛像、若は高山の巓に華界を建て以て安置し、若は深谷の底に蓮宮を起て以て崇重す。釋迦藥師の光を並ぶるや威を現當に施し、虛空地藏の化を成すや益を生後に被らしむ。故に國主は郡鄕を寄せて以て燈燭を明にし、地頭は田園を充て以て供養に備ふ。而るに法然の選擇に依りて、則ち教主を忘れて西土の佛駄を貴び、付屬を拋ちて東方の如來を閣き、唯だ四卷三部の經典を專にして、空しく一代五時の妙典を拋つ。是を以て彌陀の堂に非れば皆供佛の志を止め、念佛の者に非れば早く施僧の懷を忘る。故に佛堂零落して瓦松の煙老い、僧房荒廢して

庭草の露深し。然りと雖も各護惜の心を捨て、並に建立の思を廢す。是を以て住持の聖僧は行て歸らず、守護の善神は去て來ること無し。是れ偏に法然の選擇に依るなり。悲しい哉數十年の間百千萬の人、魔縁に蕩かされて多く佛教に迷へり。傍を好みて正を忘る、善神怒を爲さゝらんや。圓を捨て偏を好む、惡鬼便を得ざらんや。如かず彼の萬祈を修せんよりは、此の一凶を禁ぜんには。

○瞳矇を拭たず　眼の玉の曇つたのを治療して除くことが出來ぬといふ義で、世人の惑ひを除く方法の無いのに譬へたのである。○彌陀三尊　觀音と勢至との二菩薩は阿彌陀佛の左右に侍して其の化導を輔けるので、之を併せて彌陀三尊といふ。○傳教　名は最澄といふ、傳教大師といふは諡である。延曆四年はじめて叡山に上つて天台の教義を研究し、同七年山上に一乘止觀院を建てたのが本朝に於ける法華の道場の初めで、後に改めて延曆寺と稱した。弘仁十三年六月、五十六歲にして示寂。○義眞　傳教大師の高弟で、傳教入唐の時に之に從つて行き又共に歸つた。傳教の後を承けて叡山に住したが、弘仁十四年朝廷より天台座主の名を賜はつた。これ天

台座主の初めである。○慈覺　名は圓仁といひ、慈覺大師といふは諡である。傳敎大師の弟子であるが、承和五年入唐して止まること六年に及び、歸朝の後第三代の座主（第二代は圓澄）となつた。○智證　名は圓珍といひ、智證大師といふは諡である。義眞の弟子で、仁壽三年に入唐し七年を經て歸朝し、近江の三井寺を賜はつて天台宗の寺とした。これ叡山と三井寺と對立の初めである。其後叡山に入つて第五代の座主（第四代は安慧）となつた。○現當に施し　現世に於て直ちに佛の利益を蒙ることが出來るのである。○虛空地藏　虛空藏菩薩と地藏菩薩とで、いづれも平安朝以來深く歸依せられたものである。○燈燭を明にし　佛前の燈火の明なのを其敎の盛に弘まるに譬へたので、寺に領地を寄附するのは敎を弘むるの資とするためである。○敎主を忘れ　釋迦如來は此の娑婆世界の敎主であるのに、それを疎略にするは間違つてゐる。○西土の佛駄　西方極樂淨土の敎主たる阿彌陀佛のことをいふ。○付屬を拋ち　佛の敎を永く信奉し擁護して、廢せぬやうに命ぜらるゝのを付屬といふのである。○東方の如來　藥師如來は東方淨瑠璃國の敎主である。○四卷三部　無量壽經二卷、觀無量壽經一卷、阿彌陀經一卷である。○供佛の志　佛に供養する志を以て種々の寄付をするのである。○施僧の懷　法を弘むる目的を以て僧に布施するのである。○傍を好みて正を忘る　佛の正しい敎を忘れて、一方に偏したる方便の敎のみを好むことである。○圓を捨て偏を好む　圓とは圓滿完全なることである。偏とは一方に偏したる敎で、永く守るに足らぬものである。○萬祈　天災地變を恐れて種々の祈禱することである。○一凶　彌陀に歸依して他の佛菩薩を忘れはてたといふ一事が凡ての禍の本なのである。

此の娑婆世界を穢土として厭離し、偏に彌陀の御力に縋つて西方の極樂淨土に往生しやうといふのは、即ち釋尊をはじめ多くの佛菩薩の貴い努力を無視するものである。法華經の中には

諸佛世尊は唯だ一大事の因緣を以ての故に世に出現したまふ。――方便品

とあるが、その一大事といふは即ち一切衆生をして共に皆佛の境界に到達せしむることである。而してなほ